
ある女鍊金術師の試み

巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある女鍊金術師の試み

【Zコード】

Z8687M

【作者名】

蜃

【あらすじ】

女性の身ながら鍊金術の研究所に勤めるマリーは、かつて婚約者が別の女性と駆け落ちしたせいで、恋愛が出来なくなっていた。ある日、友人の結婚式に参列したことで寂しさをおぼえたマリーは、いつそのこと鍊金術を使使し、自分の恋人を作ってしまおう、と考える。そうして、「彼」の完成したその日、新たに赴任してきた助教授を見て驚いた。その顔が「彼」そっくりだったから。R15
は一部のみです。

教会の鐘が鳴る。

マリーは作り笑いを浮かべながら、祝福を惜しみなく送った。
けれども、心の中はちつとも笑っていなかつた。いや、むしろそ
の逆だつた。

ため息をつきたい気持ちをこらえて、友人の門出を見守るのが今
の私の義務なのよ。しつかりしなさいマリー、と自分に言い聞かせ
て、しばらく苦痛のときが過ぎるのを待つ。

もちろん、すぐになど終わらないのは知つてゐる。

招待客は大体明日の昼くらいまでもてなされるのが慣例だから仕
方ないが、研究を言い訳に帰つてやろうか、と何度も思つたことか。
空はよく晴れていて、夏の暖かく爽やかな空気が心地よい。

いい日だ。友人の新しい門出にはピッタリだ。

だが、マリーの方はといえば、許婚には別の女と駆け落ちされ、
近頃は研究も上手くいかず、教授とも折り合いが悪い。

スケベだった助教授はこの間左遷されたからいいものの、今度來
る人物がどんなふうなのかわからない。また似たような奴だったら
嫌だな、とマリーは思った。

マリーは決して不細工ではないが、美人と断言できるほどでもな
い。

鼻の上に散つたそばかすや、高すぎる背、肉づきの良すぎる胸な
どがそれだ。一番もてはやされる女性の容姿はといえば、細い体つ
きの、今にも倒れそうな、金髪に白い肌をした少女のようなひと、
と決まつてゐる。そう考へると、マリーの姿はだいぶ規格から外れ
ていた。

そのうえ、完全男社会、しかも頭のいい連中ばかりが集まつた大
学院で、鍊金術の研究員をしていともなれば、たいていの男はそ
れだけで逃げていく。今日も何人かに声をかけられたものの、マリ

ーの肩書きを聞くと、そそくさと逃げ出してしまった。

ふん、別にいいわよ、と思いながら供されたワインをする。マリーは燃えるような赤い髪と、アメジストのよつこにも見える深い青の瞳をした女性だ。この髪のせいで勝手に気性が荒いと決めつけられ、傷つけられてきた。それでも赤い髪は綺麗だから気にしている。

パーティは立食形式で、色とりどりのオードブルなどが並び、壮观だ。

このパーティが終われば、これから花婿と花嫁が初夜を迎える。うんざりしてきて、心中で悪態をつく。

(私だつて、誰かと恋をしたいし、愛し合いたいわよ)

好きで、許婚に捨てられた訳ではない。マリーとは一生気が合わないような、頭の固いキザな男だつた。それでもマリーは彼のことを愛そつと努力したのだ。それでも、数ヶ月前に彼は可愛らしい頭の弱い金髪の少女と駆け落ちし、婚約は白紙になつた。

そのあと、マリーと縁を組もうという男は現れず、親戚からは、お前が変わらない限り、一生そのままだと言われ続けている。

マリーを思つての忠告なのだ、とわかつていても、傷ついた。

空しさに打ちのめされながら、静かにワインをすすり、密かに思う。誰もが私の側から離れ、逃げていくけれど、やはりひとつは空しくて寂しくて、誰かに側にいて欲しいと想う自分がいる。それならば、いつそのこと……。

マリーはその思いつきが気にいった。

式の間中ひたすらにそのことばかりを考えつづける。

どうすればいいのかは分かつていた。それが本当は禁忌に触れることも知つていた。

それでも、マリーは寂しかつたのだ。

ひそかな決意を胸に、マリーは友人の家となつたその館に泊まることを辞した。

両親はまたかと呆れたような顔で送りだしてくれたが、招待客の

何人かの口から、いたたまれなくなつたのではといつわせやきがも
れるのが聞こえてしまった。

それを聞いて胸は痛んだ。どうせいつものことだと、自分に言い
聞かせる。

だからこそ、この痛みを少しでもやわらげられればいい。

マリーは寮の部屋へ帰り、すぐに大学院に向かつた。

そしてそれから一ヶ月あまり、ほとんど寝る間も惜しみ、今まで
学んだすべてと自分の理想を詰め込んで「彼」は完成した。

「完成したわ……ふふん、なかなかの出来よね
マリーはつぶやいてみて、不意になんともいえない馬鹿らしさに
襲われた。

朝日の差し込む研究室。

一応それなりの能力を持つていてマリーには、研究に集中するための個室が与えられていた。

壁や床は冷たい石張りで、作りつけの棚には大量の書籍や、一般の人を見てもさっぱり理解できない器具類が所狭しと並べられている。休憩用のソファや、書きもの机の上には、マリーが書き散らした紙が散らばっていた。

天井にはくもの巣がはられており、大きなくもが上方で静かに休んでいる。

掃除もろくにしていなかつたことに、今さらながら思い至つたが、朝日を受けたくもの巣はきらきらしていて綺麗だった。

そして、目の前の一番大きな作業用テーブルには、マリーが作りだした命の宿らない、血の通わない、動くこともない人形が横たわっている。

美術館の彫像や、神話に出てくるような美しい顔立ちと引き締まつた肢体。

髪は濃い褐色で、やや波打っている。長いまつ毛に縁取られた目は、明るい金色。マリーより頭一つ分も背が高く、かなり大きい。唇は薄いが、それが妙にセクシーだった。

皮膚も人のように柔らかく、人形のように固くはない。

もちろん、その他色々な部分も細部までしっかりと再現されているが、これは現実には存在しない人物なのだ。なにより、皮膚は死人のように冷たい。

「彼」を動かすには魂が必要となるが、それに成功した人はいな

い。

そもそも魂をとらえ、人形に宿りせるということ 자체が不可能なのだ。

魂には実体がないのだから。

なにしろ、鍊金術において最も重要視されているのは「金」の生成であり、至上の物質である「賢者の石」を生みだすことである。かつては人造人間「ホムンクルス」を生みだすことが重要視されていた時代もあつたようだが、現在はそれは不可能なこととして過去の人間のたわ言という扱いになつている。

それら過去の資料を集めて作成した「彼」の出来は素晴らしいものだった。

でも喋らないし、冷たい身体がマリーを抱いてくれるわけでもない。

「後は、どうやって命を吹き込むかよね

つぶやいてみて、ますます自分が無謀だったのではないか、とマリーは思った。

その時、ドアが軽くノックされた。

「はい、どうぞ」

ドアを開けて入ってきたのは、同じ研究室で助手をしている青年、クリスだった。

金髪でそばかすだらけだが愛嬌のたっぷりある青年で、人をからかうのが好きなところさえなければ皆に愛されるのに、マリーはひそかに思っていた。

「あれ、マリー 今日もいたのか？」

「まあね、昔のひどがやつてたことを再現してみてるんだけど……

やっぱつまらないかないわ

「へえ、つてうつわなんだこの美形……こんな現実にいるかよ

クリスは「彼」を見るなり吹き出した。

「いいじゃない別に、人形なんだもの」

マリーは言って肩をくわめた。

「そりゃあそ'だ、だけど本当によく出来るよな。君さあ、結婚前だつてのに、男の身体ここまで知つてると色々疑いたくもなつてくるよ」

クリスは含みのある笑みを浮かべて言ひ。

マリーは彼を睨んで、

「何か用があつたんじゃないの？」

と声を低くして言つた。

自分より少し背の低いクリスを見下ろす形となり、マリーはますます自分が可愛くない女だわ、と思つて軽く落ち込んだ。

「はは、そうでしたそうでした。

用つてのはね、ついさっき新しい助教授が来たんだ！

これからここにあいさつに来るんだって。

教授より有能だつて噂だから、席を追われるんじゃないからさ、

ない髪かきむしッてイライラしてる姿が可笑しいんだ！

早めに行つて見ないと損だよ！」

クリスはもう可笑しくて仕方ないとばかりに腹を抱え、しまいには大声をあげて笑いだした。目じりにはうつすらと涙まで浮かんでいる。

「あら、それは是非見てみたいわ！」

マリーもその様子を想像したら、顔がにやけてきた。

あの教授、権力をかさに着て言いたい放題だつたからいい氣味よ！

「助教授のお出迎えもしなくちゃならないし、行きましょ」

「よし！」

「いいか、笑っちゃダメなんだからな？」

「分かつてるわよ」

それでもくすくす笑いが漏れてしまつ。

マリーはクリスと共に部屋を出ると、笑を噛み殺しながら研究室へと向かつた。

「マリーがクリスとともに部屋へ入ると、すでに全員が揃っていた。

その中に、数少ない女性の鍊金術師であり、友人のリサを見つけ、マリーは彼女の側へと歩み寄った。教授はまだ来ていないようだ。

「あら、ようやく来たのね。今日もすごいクマ、大丈夫？」

「平気」と言いたいとこだけど、流石に今日は早く帰つて寝るわ」リサの呆れたような言葉にマリーはそう返した。

実際、鏡など見ていないからひどい状態だと思う。

いつも綺麗なリサとは大違ひだ。

リサは良家の子女で、くせのない銀糸のよつた金色の髪を後頭部ですつきりと編みこみ、露出の少ない青いドレスを着ている。

ただ立つてているだけでも気品が感じられるたたずまいが、マリーにはいつも羨ましい。

彼女が大学院へ入つたのは、虚弱な婚約者、ビックの身体を直す方法を調べるためにだが、やがて医学よりも鍊金術の方に興味がでてしまい、今に至る。

ちなみに婚約者のビックは相変わらず虚弱なもの、リサの怪しい研究の成果か、少しづつ外でのパーティなどにも参加できるようになつてきてているとか。

「もつたいないわね、せつかく美人なのに」

「なにバカなこと言つてるのよ。私なんかせいぜい十人並だわ、綺麗にしたつて、そんなに美人になんかならないし、なにしたつて男は逃げてくんだからもういいのよ」

それよりも、研究室のアレを完成させたい。

アレが完成しさえすれば、少なくともこの寂しい気持ちだけは解消するだろう。

けれど、先人達が知恵を絞つても完成させることの出来なかつた人造人間を、私程度の者が一生懸命学んだ知識を全てつぎこんだ……

… というだけで、完成させることなど出来るのだろうか？

挑戦してみなければ、結果など分からぬ。

それでも、やっぱり不安にはなる。

マリーはため息をついた。

「……一回きちんと鏡を見せてあげるわ」

リサが呆れたようにつぶやいた言葉を、マリーは聞き流した。結局のところ、外見が問題ではないのだ。

マリーが相手にされないのは、きっと内面の問題だらう。一般的にイメージされる女性と比べると、マリーは利発すぎだし、言葉づかいも男みたいに強いから、怖がられているのは分かつていい。そしてなにより、求め続ける「夢」が原因なのだと思う。

一般的な男は、女に、自分の「夢」について欲しいと思つているが、女の「夢」に協力しようなんて考えもしないのだ。諦めればいい話なのは分かつてている。

けれど、夢を手放せば自分が自分である意味がなくなってしまうような、そんな氣がするから。だから、このままでいい。マリーはいつもそう結論付けてしまう。

それ以上考へても、辛いだけだから。

だから、男はいらないなんて強がつてみたりする。

それでも、やっぱり寂しいものは寂しい。

だからこそあんな思いつきにすがるようにして、アレを作つてしまつたのだ。

そんなことを考へていると、教授が教室の扉を開けて出てきた。ワイヤー教授は、腹の出た恰幅のいい身体を難儀そうに移動せながら、待つていた面々を見渡した。

「待たせてすまない。

紹介しよう、以前勤めていたオットー君の後を引き継ぐ、ハース

ト君だ」

教授が手招きをすると、その男性はやたら背の高い身体をすぼめるように、うつそりと姿を現した。

マリーは、その顔を見て絶句した。

……そんな馬鹿な！

同じ顔、ふたつ 1

とりあえず、夢でも見ていいのだろうか、と頬をつねってみる。痛い。

クリスの方を見ると、彼も仰天した顔で「こっちをちらちら見ている。

「初めてして。

アレックス・ハーストです。北のヤグディウム大学院から赴任してきました。パティントンはかなり研究が進んでいると聞き、楽しみにしております。至らぬところもあると思いますがこれからよろしくお願ひします」

背の高い男性は、低く張りのある、しかし抑揚に欠けた声で言った。顔にも声にも、感情のあまり出ないタイプのようだ。しかし、それよりも問題なのは顔だった。

なにしろ「アレ」とそっくりなのだ。身長も恐らくほとんど同じだろう。

アレの顔はあくまでもマリーが、もしも劇に出てくるような魅力的な恋愛が出来るなら、相手はこんなふうな人がいいな、などと気楽に考えて造形しただけのものだった。

今まで見てきた劇の俳優や、物語の挿絵、教会のフレスコ画、彫像などなど、色々見本にしたものを使いまぜまして好きなところだけ取り出して組み合わせたものなのだ。

現実に存在するわけがないはずなのに……。

しかし、彼はそこにいる。そしてこれからしばらく二人で一緒に研究をするのだ。

助手を務めることになるかも知れない、指示を仰ぐこともあるだろう。

マリーは血の気が引く思いだった。

(と、とにかくアレを始末しなくちゃ……つー)
もし見つかってしまったら、なんと説明すればいいのか分からな
い。

例えば……。

「貴方の顔は知らなかつたけど、たまたま同じになつちやいました、
テヘツ」

「以前一日見た時に、美しいお顔だと思つてモーテルにしてしまつま
した。すみません!」

どちらも言いにくい。

前者では信じてもらえない可能性が高いし、後者では嘘をつくこ
とになる。

「彼の専門は、鉱石関係だそつだから、そちらの研究をしている者
たちは師事を仰ぐといい。

それでは、今日からよろしく頼むよ」

教授はやや引きつた顔でそう言つと、新しい助教授、アレック
スの背を軽く叩いた。肩を叩こうとしたのだろうが、届かなかつた
らしい。

「はい」

アレックスは静かに頷くと、集まつた研究員に軽く会釈して助教
授のための部屋へと下がつていった。やがて教授の長つたらしい挨
拶、まあ大半がこれから自分のことだったのだが、が終わると、
マリーは出来るだけ怪しまれないように急いで研究室へと戻つた。
そして戸を開けると、しばし立ちすくむ。

「……なんてこと」

「おいマリー！ どうするつもりだよあれ……ってあれ？」

追いかけてきたクリスがマリーの背後から部屋の中を、特に作業
台の上を凝視してから、次いでマリーの青ざめた顔をまじまじと眺
める。

「お、おい。もしかして動いたとかないよな？」

「そんな……ゾンビじゃあるまいし」

マリーは咳いて、そっとした。

もしもそななら完全にゾンビではないか。魂の宿らない人体など、死体と同義だ。

「と、とにかく探すから手伝って！」

「えー、僕だつてやること山のようにあるんだけど？」

「じゃあ後でそれ手伝つてあげるから！」

マリーは殆ど泣きそうになりながら言つた。クリスは少し考えるそぶりを見せ、少ししてからにやつ、と笑つて何度も頷いてみせると、もつたいぶつて言つた。

「よし！

じゃあ一番手ごわい、面倒極まりないやつを手伝つてもらう」とにするけど……それでもいいかい？」

そのセリフに、マリーは思わずクリスを睨んだが、今はひとりよりふたりの方が効率がいい。仕方なく、分かつたわと弱々しく告げた。

「とにかく学内を手分けして探ししましょう。私は上の階を探すから、下の階をお願い」

「了解」

クリスはふざけた敬礼をしてから出て行つた。

(クリスめ、後で頬をつねつてやる)

マリーは額に青筋をたてつつ、自分も急いで研究室を出た。まずは近くの場所をしらみつぶしだ。なんとかして「アレ」がアレックス・ハーストの目に留まらないうちに見つけなければならぬ。

もしも見つかってしまつたら……。と起こる不測の事態を考えてみたが、今はあまり思い浮かばない。

それよりも急いで探さなければ！

マリーは廊下に出ると、気合いを入れるために頬を叩いて、「あれ」を探し始めた。

同じ顔、ふたつ 2

アレックスは、指定のローブを脱ぐと椅子にかけた。

この学院で研究に携わる者は、通常学生と区別をつけるため、それぞれの研究分野現す紋章の縫い付けられたローブの着用が義務付けられている。

学生のものは白で、他の職務に携わる者たちは全員青い色と決められていた。

しかし、ずる長いローブはうつとうしく、アレックスは好きになれなかつた。

「全く、ヤグディウムではこんなもの着なくても良かつたのだが」
ぼやいて、書きもの机に向かつ。

とりあえず、ここに来て分かつたことは、教授はなにかの口ネでここにいるのだということ、研究員たちはあまり有能ではなさそうだ、ということだつた。

なにひとつ質問が飛んでくることもなく、研究内容を聞いても興味を示すような顔をしたものはいなかつた。ただなぜかひとり、非常に顔色の悪い女性がいたが、体調でも悪かつたのだろうか？
それを除けば、皆あまりやる気のない様子だつた。

「あの教授の下にいるのだから、仕方ないか」

自分が上に上ることしか考えていないようなクズだ。

上手く言葉を選べば、ああいう輩は利用出来るだろう。

アレックスは、研究が続けられる環境さえあればそれで十分なのだ。ただし、こちらが利用されるようなことだけは避けなければならない。

ああいう小悪党はそういうことだけには知恵が回るからだ。

アレックスには目的がある。それを成すためには、どんな努力も惜しむ気はなかつた。

邪魔だけはされぬようにしなければ、そんなことを考えつつ、部

屋にどのよつたものがあるのか見聞していると、バタバタと騒々しい足音がして、戸がノックされた。

「誰ですか？」

「あの、リサ・ヤーディンという者です。鍊金術の研究員です……中に、いらっしゃいます、よね？」

「……何のことですか？」

とにかく入ってきて、ちゃんと話して下さい」

そう言うと、戸が遠慮がちに開いて、美しい女性が入ってきた。少し前、青い顔をしていた女性の横にいた人物だろう。アレックスは怪訝そうな顔をしている女性、リサの顔を見て訊ねた。妙に顔が赤い気がするが気のせいだろうか。

「何かあつたのですか？」

「えつと……それが、助教授と同じ姿のひとが校内をうろついていたもので。

その、ぜ、ぜ、全裸で」

しばらく部屋に沈黙が流れた。

アレックスはまず自分の耳を疑つた。疲れているのだろうか。彼女は何を言つているのだろう。なにしろ、自分はここを一步も出でない。そもそも記憶にある限りは、生涯で一度も、裸で人前をうろついたことなどない。

神に誓つてない。

だが、この学院内で研究されているのは、鍊金術だけではない。

天文學、神學、心靈術、召喚術などなど、人が知りうるさまざまな學問の全てが研究されているのだ。もしかしたら、それもそつた研究の一環であり、何らかの失敗作である可能性がある。

「それを、どこで見ました？」

「あの、この上の階の、悪魔學研究所の付近で……」

「分かつた。確認してみます、君はそれが私ではないと会つた人に伝えておいて下さい」

「わ、分かりました」

リサは少しほつとしたように頷いた。

アレックスは脱いだばかりのローブを持ち上げて、袖を通すと部屋を後にした。

同じ顔、ふたつ 3

やや薄暗い廊下を歩きながら、マリーは焦っていた。

そもそもどうして「彼」がなかつたのだろう？

探すにしても、まったく手がかりがないのだ。ただ、まだそんなに時間がたっていないから、遠くへは行つていらないだろうというのが唯一の救いだった。

廊下を歩きながら、片端から鍵のかかっていない扉を開けてみる。

……いない。

少し美形に作りすぎたのだろうか？

誰かが気について持ち帰つてしまつたのだろうか？

それとも、怪しい研究に使おうと持つて行つてしまつたのだろうか？

一番ありそうなのは最後の選択肢だ。

なにしろこの学院はそういう研究をする場所だから。

マリーはいつそのこと、このまま放置してしまおうかとも考えた。クリスさえ口止め出来れば、他に知る者はいないのだ。

マリーはそんなことを考えながら、廊下を歩き、ふと足をとめた。ここから先は「悪魔研究」をしている場所だ。学内でも極めて忌避されている場所である。マリーもあまりいい印象は抱いていない。かつて出資していた貴族の青年が死んだことがある。悪魔に魂を食われたのでは、などと噂されているが、真偽が定かではない。行きたくない。

マリーは心の底からそう思った。

大体、研究内容が悪魔についてだけならともかく、召喚まで含まっているのが嫌だ。

あんな醜いものに魂を食われるなど、考えただけで身の毛がよだつ。

だからといって、スルーしてしまう訳にもいかない。

どうしよう。

歎きでいると、なにせら歓声が聞こえた。

マリーは思わず身を固めた。何があったのだろう。気持ち悪すぎ
る。しかももう夏も近づいて、毎回だとこうの人に、真黒なカーテン
を締めきついている。

壁に設置された燭台のロウソクの炎がゆらゆらと揺らめく。

そのオレンジ色の炎に照らされて、何かがゆり、と動いた。

「ひつ！」

マリーは思わず後ずさった。

もういい、もう嫌だ。ここを探すのは諦めよう。しかし、暗闇に
背を向けるのが怖くて足が動かない。

男たちに強い女だと、クールだと言われることの多いマリー
だが、そんなことは全くない。

むしろ逆で、かなりの臆病者なのだ。

外見のせいでそう思われてしまつのもマリーの歎みの一いつだつた。
恐怖で涙が出てきた。

それでも動けないマリーの前に、それは現れた。

「そ、そんな」

ショックで言葉すら出でこない。

「彼」は見つかった。とこか、いま田の前にいる。

しかも動いてこる。

「彼」はマリーの目を見て、妖艶にほほ笑んだ。

そして、硬直したままのマリーの前まで「全裸」でやってきて、
おもむろに顎に手を掛けて上を向かせる。頭が真っ白になつてている
マリーはなすがまだ。

「ふうん、なかなかの上玉じやないか。丁度いい、あんた俺と契約
しない？」

「いい夢見させてあげるよ」

アレックスの声とは違つ、優しい声。その声は耳をくすぐり、背
筋をぞわり、と粟立たせる。

赤く輝く瞳がマリーを射抜くように見つめてくる。

瞳の色は確かに金色にしたはずなのに、その中に炎でも宿したような金赤色に変貌していた。

整った薄い唇からも、白い牙がこぼれおちている。

少しずつ、その唇が近づいてくる。

逃げなくては、とマリーが思った時、暗闇で派手な音がした。人が転んだようなドタッ、バタッという感じの音だ。

少しして、暗闇から黒ずくめの女性が出てきた。

「待つて！ 待つて下さい！ ハウエルズ様、ご契約はこの私が仰せつかります、どうか、どうか！」

悪魔学研究所からまろびでてきた少女は、見たところ十七歳の学生のようだった。黒ローブの下に、白い制服が見える。可愛らしい美少女だが、狂気めいた顔でこちらにじり寄つてくるため非常に怖い。

「お願いです、お願いです！」

少女はすがりつくように「彼」、どうやらハウエルズという感じだが、その足に両腕を絡めて何度も何度も願いをこづ。

が、ハウエルズは至極面倒そうな顔で、

「えー、おまえまずそまだからやだ」と言い放つた。

美少女はその言葉に泣き崩れた。

ハウエルズはそれに一瞥をくれただけで、またすぐにマリーに向き直った。

回し顔、ふたつ 4（前書き）

キス描写が出てきますので、苦手な方は読み飛ばして下せー。

同じ顔、ふたつ 4

マリーは、やつと少し我に返つて、震える身体を叱咤して、必死に後ずさる。

「あれ、何で逃げんの？ 今あんた俺に気を許しそうになつてたじやん」

「……貴方本当に悪魔なの？」

「うんまあそудよ、呼ばれたから来てみただけだけだけど。

なんか珍しいなあとthought。

入れ物に宿れ、なんてこと初めてだからね、面白そうだなあと思つて。

丁度空腹だつたし、腹(ヒ)しらべついでこれ

よくしゃべる悪魔だとマリーは思った。

「まあ氣は済んだし、君を頂いて帰るよ。

いやまてよ、いつそのこと連れ去つて俺の愛玩物にしようつかな、君、俺の好みだし。

それにこんな入れ物に入つてない俺の方がきつとずつと麗しいと思うよ」

ハウエルズは自分の胸に手を当てて、自己礼賛の言葉を並べる。マリーは不意に自分で何ががぶちり、と切れる音を聞いた気がした。

「……で」

「で？」

「出でいけ――――！」

それは私が丹精込めてつくつた最高傑作なの！

あんたみたいな力ス悪魔なんかが入つてていいものじゃないのよ、将来の恋人の予定でつくつたのに、気が済んだなら出ていけこのナルリスト！」

「カスつて、おまえ少し前と性格違わねえ？」

「うるやこつるせー...」

マリーは叫んだ。

すると、不意に目の前が暗くなつた。

唇にやわらかいものが触れる。それが自分の作りだした「彼」のものだと悟った瞬間、マリーの頭は再び真っ白になつた。少しして唇が離れるべ、今度は舌で唇をなめられる。

温かくて柔らかい感触に、頭が真っ白になる。

「ん……っ、やめっ」

「やだ

ふたたび口づけられて、マリーは動けなくなつてしまつた。全裸の男性にキスされているというとんでもない状況なのに、身体が動かない。逃げなければと思つのに、頭の芯がしびれてしまつてどうにもならない。しかも、口づけてきているのは、マリーが最も好きな姿をした存在なのだ。

抵抗する気力が奪われていく。

「のまま……魂を食べられてしまつのだろつか。

舌が唇から侵入していく。

「……やだっ、んっ」

こんなキスは知らない。今まで挨拶のキスしかしたことがない。マリーは必死に理性を呼び起こして抗つた。

彼の胸に両手をついて、なんとか押しやろうともがくが、びくともしない。

誰か、と声を上げようとした時、少し前に聞いたばかりの声がした。

「どうこつことですかこれはー！」

まぎれもなく、アレックスの声。

すると、ハウエルズの手の力が緩んだ。マリーはもがいて、必死に彼の腕から逃げだすと、床の上に尻もちをついた。

「つ、痛……」

痛さに顔をしかめつつも、目を開けて状況を見る。

視線を上げると、蒼白な顔をしたアレックスと、興奮めしたようなハウエルズの顔が目に入る。

同じ顔がふたつ並んでいるのに、絶対に別人だと分かる。マリーはとりあえずどうすればこの状況を無事に切り抜けられるかと考えを巡らせたが、ショックが残つており、どうにもいい案が浮かばない。

視線をさらに巡らすと、少し離れた場所で恥ずかしそうにうつむいているリサが見えた。

あれを見られてしまったのだろうか。

まさに穴があつたら入りたいという気分だった。

「貴方は一体誰なんですか？」

何故私と同じ顔をしていて、ここにいるんです？」

アレックスが訊ねる。が、ハウエルズは、曖昧な笑みを浮かべて、「さて、どうしてでしょう？」

と答えた。まともに答える気はないらしい。

それに気づいたアレックスは、悔しそうに押し黙る。

「くくっ、まあいいか。俺の事を知りたければその女に訊け。せつかく久しぶりに地上に出てきたことだし、お楽しみは後につけておくことにするわ。」

またあとでな、俺好みの赤毛ちゃん」

ハウエルズは、せせら笑うように言つと、開いていた窓から飛び降りた。

「あ！ 待ちたまえ！」

アレックスの言葉も空しく、ハウエルズは窓の外へと全裸のまま消えた。

「くそ、一体なんだというんだ……」

アレックスは悔しそうにつぶやいて、今度はマリーに視線を向けていた。

「貴女、何か知っているんですね？」

「ちょっと詳しく話してもらいましょうか？」

「……は、はー」

「どうせ話せないのだろう。マリーは嘘をつくのが苦手だった。正直に言つしかない。

せめて立たないと、と思つて、壁に手をついて立ちあがらうとするのだが、足が震えてしまって立ちあがれそうになってしまった。悔しくて脣を軽く噛む。

すると、アレックスが手を差し伸べてくれた。

「あ、ありがとうございます」「倒れている女性を助け起すのは当然の礼儀ですよ、礼などいりません」

言葉は優しいのに、声が冷たい。

怒っているのだ、ものすごく。

萎縮する心をなだめて、マリーはアレックスの手を取った。

骨っぽい、がっしりした手。

「彼」の指の長い綺麗な手とは違つて、とても素適だなと思つた。

「ふむ、ここでは落ち着かないですね。

私の部屋で話を聞かせて貰いましょうか……そこまで歩けますか？」

？

「は、はー。なんとか」

マリーはつづむいて答えた。

「ええと、リサ、でしたね。ここに倒れている学生をお願いします」

「はー」

答えたリサが心配そうにマリーを見てくる。

しかし、マリーはただ力ない笑みを返すしか出来なかつた。これから、マリーがここに残れるかどうか決まるのだ。
気が遠くなりそうだった。

笑顔

マリーは椅子に座つたまま、気まずい思いで縮こまつっていた。
あれからきちんと正直に経過の全てをアレックスに報告したのだが、何も言ってくれないのだ。

黙りこくつたまま、動かない。

早く引導を渡して欲しい。

「マルガレーテ・ヘイスティングス」

「はっ、はいっ！」

いきなりフルネームを呼ばれて、マリーは上ずつた声で返事をしてしまった。

「……そんなに怯える必要はありません。

あなたはもしかしたら自分がここを辞めさせられるとしても思つていいのですか？」

「ち、違うんですか？」

てっきり、やつてはならないことをしてしまったのか……と

マリーは顔をあげて、恐る恐るアレックスの顔を見た。

微かに、ほんの微かにだが、口元に笑みらしきものが浮かんでいる。

理由は分からなかつたが、マリーの胸がちくり、と痛んだ。
(あれ、なんだろうこれ？ なんだか胸のところがじんわりと温かくて、ちょっと痛い……)

だが、謎の痛みはアレックスの次の言葉で吹きとんだ。

「違いますよ。むしろその逆です、私は君が欲しい

「……え？」

マリーは耳を疑つた。

「ここにはやる氣のある人材がないとばかり思つていたのですが、ひょんなとこでくれて良かつた。

あなたには私の助手になつて頂きます。

教授にはそのように話を通しておきます。あなたさえよければ、ですが

マリーは呆気にとられて、ただひたすらアレックスの顔を見詰めた。

「そんな、いいんですか？」

「ええ、私がここに来たのは、鍊金術は人の役に立つ、素晴らしい学問なのだと世に知らしめたいがためなのですよ。なのに、教授はあんなりですし、その下の学生も助手たちも、あまりやる気があるよう見えなくて、ここに来た事を少し後悔していたのですが、君みたいな人がいるとは。

人体を作り上げることは、先人たちが挑戦したあと、誰もしてこなかつたことなのです！まさかそれに挑んでいる研究員がいたとは、私は嬉しいですよ。

まあ、よりによって私と同じ顔のものが全裸でうろついていたことには怒りを感じていましたが、そういう理由ならばむしろ私には**僥倖**です。

……ただ、なぜ顔が私だつたのかだけは教えて下さい。

私はあなたを知らないのですが、どこかでお会いしたことがありましたか？」

アレックスはそれまで無口だったのが嘘のように喋りだした。マリーは啞然とその様を見て、並べられた言葉を聞いていた。とりあえず怒つていないうちが分かつてひどく女堵したが、問われた言葉を思い返して我に返った。

あの非常に恥ずかしすぎる理由を言わなくてはならないらしい。嘘をつくのが苦手なマリーには、正直に言つしか道がない。

「ぐくりとのどを鳴らしてつばを飲み込む。

「あの、その、ですね、あの顔は…………だから」

マリーは羞恥につむきながら、小声で言った。

「何ですか？ 聞こえなかつたのですが？」

「わ、わ、私の好……つたら、たまたまそつくりに……てしまつて」

「あの、すみません、もう少し大きな声で」

マリーは少し涙目になつて、覚悟を決めて言つた。
「私の好みの顔に作つたら、たまたまそつくりになつちやつたんです！」

アレックスはしばらく黙つた後で、引きつった顔で言つた。

「あの、それはつまり」

「……そこまで言わせるんですか！」

マリーは思わずそう怒鳴つてしまつた。

アレックスはまた押し黙つてから何度も咳払いをして、窓の外を見やつた。

「そ、そうですね。

申し訳ありません、愚問でした……さて、問題はあなたの作った人体に悪魔が入り込んでしまつたことですね。

あんなのいうろつかれでは私が困りますし、神学科の方に手伝つて貰つて貰うのが賢明でしょう

「そうですね！」

最低ですよあんな奴、いきなりあんなことするなんて……あんな奴に入り込まれるなんて、さつさと払つて貰いたいです！」

マリーは強く言い放つた。

まだ頭の中が整理できていないが、初めてだつたのだ。

顔は確かに好みかもしれない。

それでも、最初のキスは好きな人だと思つていたマリーとしては、やるせない気持ちだつた。

「……災難でしたね。

しかし、魂を取られていたかも知れないと思えば、良かつた

アレックスはそう言つと、椅子から立ち上がりつてマリーの側まで来て、ぽんぽんと頭を叩いた。

「助教授……」

その仕草に包み込むよつた優しさを感じて、マリーは目を閉じた。

「やばい、泣いてしまった。」

「答えを、聞かせてもらいますか？」

マリーはアレックスの言葉に頷くと、震える声をなんとか整えようときゅっと口づしを胸にあてて、小さく深呼吸し、それから答えた。

「……これから、よろしくお願ひします。」

マリーが言うと、アレックスは嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑んだ。

またマリーの胸がやんわりと痛む。

「良かつた。」

「ちからこな、よろしくお願ひしますよ。」

医学科と協力して人体の開発に力を注いでいるまじゅう

「はい！」

マリーは頷いて、胸がつかえるような感じを押し殺して笑顔を浮かべた。

今まで感じた事のない感覚だった。けれど不快な感じではない。「とにかく、今はあの厄介な悪魔を捕まえないとい、あなたはどうもかなり疲れているようですから、一旦帰つて休んで下さい」

「で、でも」

「休むことも大切な仕事なんですよ？」

はい、帰つてちゃんと食事を摂つて休んで下さい。綺麗な顔が台無しですよ？」

その言葉に、マリーの心臓がどきりとはねた

たくさんの男性に同じことを言われてきた。

けれど、彼らはすぐにマリーの仕事を知ると、声を掛けてくることすらしなくなった。婚約者にも言われたが、最後には君は気違いだと言われて逃げられた。

心に痛みがにじみだす。

それでも、田の前の男性から田を離す事が出来ない。

マリーはぐちやぐちやな気持ちで、アレックスに礼を言つと、軽く頭を下げて部屋を出た。

それから、ほんやりしたまま帰宅して、適当に買つてきた食事をとり、軽く身体の汚れをおとしてからベッドに入る。

実際「彼」をつくるために徹夜続きで疲れていたし、ショックなことが重なりすぎて、疲れていたから眠りはすぐに訪れてくれた。

「なんだてめえ！」

「なんだつていいじやん……っ」

ハウエルズは路上を歩いていた警備兵とおぼしき男を殴り倒した。

「がつ！」

相手は壁に頭を打ち付け、その場にぐてつとのびる。

「とりあえず、着るものがないとな、人間てな面倒だぜ」「

ぼやきながら身ぐるみを剥いで、それを着る。

邪魔な革鎧や、いかにも警備兵ですといったモノだけは避けて、それらしく服装を整える。あまり着込んでしまっても不審なので、せいぜい上着を羽織るくらいにする。

そちらは近くの古着屋から盗んだものだ。
これでいいか。

いくらなんでも全裸でうろつくのがマズいのは知っている。

この国の、この街に来るのも久しぶりだ。まだ存在しているとは思わなかつた。人の世の移り变わりは、悪魔である身にはあまりにも早い。気にいつた人間を見つけても、すぐに死んでしまう。

かつて、気にいつた人間がいたことがある。

それも女だつたが、気付いた時には彼女は死んでいた。

自分と同じ世界に連れ帰り、人でなくしてしまえれば、永遠に自分の中出来ると考えていた間に、人と人との間に起きたささやかな諍いに巻き込まれたのだ。

「と、言つても、まだ気になる程度だしな……。

とりあえず、残り香を辿つてみるか」

ハウエルズは、目を閉じてそつとあの赤毛、確かマリーと呼ばれていた女の匂いを辿つた。

それは街の中心部から発しているようだつた。あの大学院からさ

ほど離れていない。

「よし、見つけた。

行つて見るか

そう言うと、ハウエルズは人間には決して追いつけない速度で移動を始めた。

空間を飛んでいくような移動方法だ。

あつという間に、匂いのもとへとたどり着く。

そこは、集合住宅のある場所だった。雑多な人間たちの匂いにまじって、マリーの匂いがする。そもそも「匂い」と現すのも正確ではない。その人独特の、魂の色……とでも言えばいいのだろうか？とにかく、そうした匂いを追つて、ハウエルズはマリーの部屋を探し当てる。

そこは大学院の敷地内にある寮のようだった。

まだ夕方であり、帰宅しているものは少ない。

ハウエルズは足音を立てず、そつと扉の前に立つ。がつちりと施錠された扉をあっさりとすり抜けて部屋に入る。そして、とりあえず黙つたまま部屋をよく見る。

あまりモノがない部屋だと思った。女性らしい飾りもないし、服をしまうための箱も簡素だった。家具もとても少ない。ベッドとテーブル、椅子だけ。そのテーブルの上には、食べかけのパンがきちんと紙に包まれて乗っていた。

他の人の部屋がどうなのか分からいため、判断のしようがないが、贅をつくした城に住んでいるハウエルズにしてみれば、ただの空間にしか見えない。

ただ、ひどく懐かしい感じがした。

それがなぜなのかは分からぬ。

けれど、ベッドに目をやり、寝息を立てているマリーを見ると、どうしようもなく連れて帰りたくなる。自分のものになつて欲しいと思つてしまふ。

「馬鹿な……人間なんて、あの人以外ただの食い物だ」

混乱した気持ちで目を眇める。
マリーはハウエルズの訪問に気付かず、健やかな寝息を立てている。

どうやら、この身体を作るためにかなり無茶をしていたらしい。
相当疲れているようで、食事もそこそこに眠ってしまったのだろう。
つ、と唇に触れる。

本当はそのまま食つてしまおうと思つたのに……。

食べなかつた。腹は減つていたのだ……けれどそれよりも、もつ
と、もつとあの唇を味わいたいと思つてしまつた。

「まあいいか……」ここまで俺を執着させる理由は、ゆっくりと説明
すればいい

言いつつ、ハウエルズはベッドの端に腰を下ろした。

マリーは横向きになつて眠つている。この女は男に人気がないら
しい。この身体が持つていた記憶を読み取つたから、多少は知つて
いる。

だが、とてもそれは見えない。

眠つている顔は、ひどく綺麗だつた。

その顔に、懐かしい面影が重なり、ハウエルズは熱い湯に触れで
もしたかのように手をひとつこめた。

似てゐる、と思つてしまつた。

あの人に……。

人の一生は一瞬で、その中でも輝けるのはさらにまばたきほどの一
間くらいしかない。その時の輝きを持つたまま死んだ人のと、こ
の娘はよく似ている。

「はつ、そんなことある訳がない」

そうだとも。

さつさと食事して帰ればいい。そしてまた怠惰な日々を過ぐすの
だ。

そうすれば、余計な感情が沸き起ることもない。

ハウエルズはかつて、魔界の者たちに悪魔らしくない、まるで人

間になってしまったようだとなじられた。その時はそんなことはないと思ったが、取る行動があからさまに妙なので、後で納得した。だが、変わらうとしてきたのだ。

なら、確かめてみよう、この女を使って。

悪魔の誘惑に勝てる女はまずい。この女を陥落させ、自分の下僕にした後、魂を食らえば元の自分に戻れるかもしない。

「そうしよう」

ハウエルズは薄い唇をゆがめて笑った。

そうだ、これはいい機会なのだ。

すやすやと眠っているマリーを眺めながら、ハウエルズはどうするか考えた。まずは、この女の弱みを握りつ……それには、交友関係から調べるのがいいだろう。

この女を誘惑するのはその後だ。

ゆっくりと、ゆっくりと籠絡させてみせよ。

そう決めると、そつとその場を後にした。

目が覚めると、まだ外は暗かった。

「あれ、まだ夜かな？」

しかし、閉められた窓を見やると外はほの明るくなっている。

早朝のようだった。空氣もやや肌寒く、マリーは上掛けを身体に巻いて、畳を凝らす。

本当にない部屋だなと思つ。

それはそうだろう、寝ると荷物置き場くらいにしか使っていないのだから。

ここにいるのはただ単に、両親だけでなく親戚や知り合いに結婚の事をうるさく騒がれるのが嫌でたまらなかつたからだ。

以前は家から大学院に行つていたのだが、いつ辞めるのかとか、いい人がいるのなら紹介しあうとか、社交の場にはちゃんと出て来いとか、帰るたびに言われるのだ。

そうやって、いいなりになつてしまえば、こんなことをするのを止めてしまえば、きっと辛くないだろうとも思つ。

それでも止めないのは、意地というより、ただただ楽しくて仕方ないからだ。

結婚適齢期ももうすぐ過ぎてしまう。

過ぎてしまつたらおしまいだと嘆かれても、止めたくなかった。こここの匂いが好きだ、変な器具や怪しい書籍を愛している。

だからまだここにいたい……。そのためだけに、妙なことになつてしまつたけれど。

とそこまでぼんやりした田覚めていない頭で考えて、思いだした。

「そうだ！ ク里斯のこと忘れてた！」

アレックスに見つかってしまったことがショックで、頭が真っ白になつてしまつた。そのつえ許してもらえた安心感から、色々なことを忘れてしまつていたらしい。

「なんてことよー」

「どうしよう、まだ探してるとかそんなことないわよね……」

マリーは慌ててベッドから抜け出て、姿見の前に立ち、着の身着のまま寝てしまつたことを後悔した。ローブは脱いだが、下に着ていた服がしわくちゃだ。

なんとか着られそうなものをと服をしまつた箱をあさり、淡い黄色のワンピースを取り出して着替える。

後でここの大寮の管理人さんのところに洗濯物を頼みに行かなくては……。

あのひとのことは苦手だが仕方ない。

マリーはため息をつくと、急いで部屋を出た。

大学院へは寮から歩いて数分のところにある。

今日の天気は少し曇りらしい。もうすぐ、暑くてウンザリする夏がやってくると思つと、気分はやや落ち込んだ。

マリーは夏が嫌いだ。

暑くて研究に集中できないからか、ミスを連発したことがあるのだ。

いつかは鍊金術で氷を大量に作れないかと頑張つたが、涼しくなるところつ、と忘れてしまうのでまるで进展しない。

今年は早めに取り組もう。そう決め、大股に歩きだすと、ふと前方に見た背中を見つけた。

アレックスがいた。

マリーは挨拶をしよう、と思ってそちらへ足を向けた。

だが、アレックスの傍に誰かいる。服装からして、女生徒のようだつた。

頬が上気して赤くなつてゐる。嬉しそうに楽しそうに話すその姿を見て、マリーは思わず足をとめた。

(あれ、足が動かない……)

ただ近づいて、挨拶してくるだけなのに、どうしても足が動いてくれない。

マリーは理由のわからないままで、しばらく立つてして様子を見ていた。

アレックスと女生徒の方は、マリーに気付かず、何か話している。助教授なので、講義などもしているはずだが、彼はまだ来たばかりだ。

女生徒の目的は、きっとアレックスと話すことだろう。
鍊金術に興味がある振りをして近づこうとしているのかもしれない。

あれだけ整った顔立ちの人物はそうそういないからだ。

そういう女生徒は、今までもたまに見てきた。その時はただ微笑ましかったのに。なんだうう、すごく、もやもやする。

(早く行かなきゃ……クリスが待ってるかもしれない)（元）
マリーはアレックスへの挨拶は後回しにして、先にクリスに謝ろうとして、なかなか動いてくれない足を叱咤して歩き出す。

その時、マリーの視界に入つたのは、アレックスが優しげな笑顔で女生徒の頭をぽんぽんと優しく叩く光景だった。

「……っ

胸にナイフが突き刺さったかのような鋭い痛みが走る。

昨日、マリーの頭を優しく叩いた時と同じように、アレックスは優しく微笑んでいる。

マリーは不意に泣きたくなり、走り出した。

嗚咽をこらえて、涙が流れないように唇をかむ。泣きたくなかった。こんなどうでもいいことで泣くような自分なんて嫌だった。
必死で抑えていると、涙はやがて引っこんで、マリーは学内を走っていた。

そして、いつもの小さな研究室にたどり着くと、大きく息をする。理由がよく分からなかった。

なぜ逃げだしたのか？ なぜ泣きそうになつたのか？

マリーにとつて、アレックスとはただの上司だ。しかも理解のある、顔が好みの、優しい上司。

それだけ、それだけのはず。

「そうよ、それだけ」

けれど、もしかしたら、これが「恋」というもののなのだろうか？ マリーは今まで「恋」というものを経験したことがなかった。友達に説明されてもよくわからなかつた。だからずっと「恋」することに憧れてきた。

ただただ、楽しそうなカップルが羨ましかつた。幸せそうな若夫婦を見ては温かな気持ちになつた。なのに、もしさうだとしたら、なんでこんなに胸が痛いのだろう？

もっと、浮き浮きするものだと考えていた。

マリーはため息をついた。

もうこのことについて考へるのはやめよう。それより、今はクリスを探して謝らなければ。

考へても分からぬ感情に振り回されるのはいやめんだった。気持ちが落ち着いたところで研究室を出て、マリーは知り合いや通りががつた人にクリスを見なかつたかと聞いて回つた。

やがて、休憩室でぶつ倒れてるよといつ返事が返ってきて、マリーは慌てて休憩室に急いだ。

部屋の戸を開けると、ソファでひっくり返っている人物に目がとまる。

マリーは申し訳なさそうにその人物に近づいた。

「寝てるの……？」

そつ小さくつぶやくと、寝ている人物、クリスがぱつ、と目を開けた。

そしてマリーを見ると、怒りの形相のまま起き上がる。

「あれ？ 寝足りないのかな？ 目の前にしつきが見えるんだけど……？」

「い、ごめんなさい！」めんなさい！

一回寮に帰つて寝てきたの……彼もちゃんと見つかって、まあ逃げられたけど

「……ふ～ん、つまり、僕のことは忘れてたって訳だ？」

「ちや、ちやんと埋め合わせするから！」

本当にめんなさいっ！

マリーは謝りに謝った。

クリスはしばらく何も答えなかつたが、少しして言つた。

「お腹すいた」

マリーははつ、として、

「じ、じゃあ何か買ってきてあげる。何がいい？」

「甘いパン、なるべくたくさん

「分かった！ 行つてくるから待つてて」

マリーは急いで休憩室を出ると、大学院入口近くにあるパン屋に向かつて走り出した。

なんだか今日は走つてばかりな気がする……。

焼きたてを買い、大学院へ戻るときは流石に歩いた。ジャムを入れたものや、高価な砂糖やバターを使うケーク類は結構高いが、埋

め合わせと思えばそんなに気になるほどではない。

現在では精製技術が発達して、昔より上質の小麦粉や砂糖が手に入るようになつたから、値段も庶民に手が届く範囲になつている。

といつても、マリーの実家は上流階級だから、庶民ではない。

けれど、マリーはひとりで自活しており、収入もさほど多くなく、日頃買うものは庶民と大差ない。

ちなみに、クリスは酒屋の次男坊で、稼業は兄が継いだため、自分は興味のあつた鍊金術の研究をする道を選んだのだと教えられたことがある。

大学院内に戻り、休憩室へ行くとクリスはもうそこにはいなかつた。

室内にいた助手仲間に訊ねると、第一研究室へ行つたと返事が返つてきた。マリーがそちらへ向かうと、クリスは中で何やら探し物をしていた。

「なにしてるの？」

「あ～お帰り。

いや、マリーに手伝つて貰おうと思つてた研究の資料が見当たらぬいんだ。

確かにここに置いたはずなのに」

と言いながら、机の下や、引き出しを片端から開けていくクリス。マリーは適当な台の上にパンの入つた袋を置いて言った。

「手伝うわ」

「ああ、でもそろそろ教授挨拶の時間だ。探しものはそのあとだな……たつぱり手伝つてもらうからな！」

「分かつてゐるわよ。徹夜でも何でもお付き合いします。迷惑かけちやつたんだもの」

マリーはそう答えてから、パンの袋をクリスに渡した。

「はい、後で食べて」

「おお、焼きたてか～、ラッキー。

「こいつは取られないように僕の荷物に入れとかないと」

クリスはパンを手にして嬉しそうに笑った。

いつもの第一研究室へ行くと、助手や研究員たちが集まつてきていた。リサもいる。彼女と田が合つて、マリーは苦笑いを浮かべた。リサはマリーを見つけると傍までやってきて、こそりと耳打ちしてきた。

「後でいいから詳しいこと教えてね」

「う……うん」

マリーは内心の動揺を隠されないようにじょじょにして、笑顔を浮かべた。

すると、教授室の扉を開けて、ワイアー教授が現れた。

いつものようにもつたいつけた動作が気にいらない。

「諸君、今日はまず発表したいことがある」

突き出たおなかを撫でながら、ワイアー教授は笑つて、後ろのアレックスに合図した。

アレックスは持つていた書類を教授に渡す。

「このたび、新しい論文を発表出来る機会に恵まれた。

内容を聞いて欲しい」

そう言つと、咳払いをひとつして、喋りだす。

マリーは最初はまたか、と黙つて聞いていた。

教授は様々な論文を書き上げて、学会に発表しているが、その大半が大したことない、どちらかといえば、上層部に媚を売つているような研究ばかりだ。

大半は足蹴にされ、ほとんど検討もされないまま終わる。

そのあとやつてくるハつ当たりが迷惑なのだ。

だが、今回はいつもと違つた。

内容もきちんとしている。しかし、なんだろう、どこかでこの内容を見た気がする。

嫌な予感がして、よくよく周囲に田をやると、クリスが青ざめているのが分かつた。

マリーは瞬時に理解した。

かつて、同じ田にあつたことがあるからだ。

まだマリーがここに入りたての頃、まわりの圧力でやめさせられた
そうになつたのだが、その時教授があるものと引き換えに救つてくれたことがある。

それが、マリーの研究内容を記した論文を、教授が書いたもの
ように発表することだった。

まだ研究員として未熟だつたため、その発表は一蹴されたものの、
マリーは残ることができた。そのあとで認められる内容のものを提
出したため、マリーはきちんと残ることになつたのだ。

しかし、これはそれとは違う。

噂では聽いていたけれど、信じたくなかった。

けれど、教授が読み上げる内容を聞けば聞くほど、手伝わされま
くつた時の記憶がよみがえる。

クリスは強く拳を握っている。

ここで逆らつたらもう一度とこゝへは戻れないからだ。

(そんな、こんなことつてないよ……)

マリーは強い憤りで、胃のあたりがぎゅっと痛むのを感じた。
他の仲間も気づいたらしく、時々氣の毒そうな視線をクリスに送
つてゐる。

(このまま黙つていいなんて………)

マリーは自分のことを考えた。ここで声をあげたら、終わりだ。
けれど、胸にこもつた憤りはどうしても黙つていてくれない。感情
のままに行動してはだめだ。

そう言い聞かせる。

しかし、マリーは我慢が出来ず、口をひらいた。

「あの、それは本当に教授が研究したものなのですか？」

研究室に、気まずい沈黙が流れる。

クリスが首を何度も横に振る。それ以上何も言ひなと言つてているのだ。

しかし、マリーは見なかつたことにして、言葉を続けた。
心臓の鼓動がひどく大きく聞こえる。今にも飛びだしてしまいます。
うだ。けれど、ここで言つておかないときつと後悔する。

その一念だけで、マリーは言葉を続けた。

「私はその内容を知つているのですが、別の研究員の行つていたものと同じなのは何故ですか？」

「な、何を言つているんだね。

これはちゃんと私がまとめたものだよ？

助手に手伝つて貰つたことなうあるからね、きっと暫もその時見たんだろう」

教授はそういい逃れると、また咳払いした。

「盗んだんじやありませんよね？」

マリーは言つた。

教授の顔がみるみる赤くなつていくのが分かる。

クリスが泣きそうな顔をしているが、マリーは笑つて見せた。

言つてしまえばどうなるのかは分かつっていたのだから、気にしないでいいのよ……。

そう言つてあげたかったが、それは後だ。

「それ以上言つたらどうなるか分かつているのかね？」

「はい。それは別の研究員が書いたものです。

私はそれを手伝つていたので間違いありません、元の持ち主に返して下さい」

マリーは言つた。なんだか涙が出そうだ。

「そりが、しかし残念だがこれは私の研究だ。

言いがかりはよして貰いたい……後で私の部屋に来るよつこ、分かっているね？」

「分かつています。

でも、それは返して下さい！」

「まだ言つのかね……もつ君はここに来なくていい！」

ついに教授も声を荒げた。

マリーの目から透明なしづくが流れ落ちる。分かつていただ、やはり、こみ上げる感情の渦に流されてしまつ自分をとめられない。

「認めて下さるまで、言い続けます！」

マリーは涙声で叫んだ。

教授が、恥々しそうに言葉を発しよつとした時、静かな声が割つて入った。

「少しよろしいですか？」

アレックスが無表情のまま言つた。

その場の全員がアレックスに視線を集中させる。

「なんだね？」

「発言してもよろしいですか？」

「かまわんよ……言いたいことがあるなら言いたまえ

「ありがとうござります。

それでは……」

アレックスは表情を変えないまま口を開いた。

「私の記憶によると、その研究を行つていたのはクリス・クローネという研究員です。

教授はここしばらく、集まりなどにお出かけになつており、ひとつも研究をしておりませんが、間違いありませんか？」

アレックスが言つと、教授は目を丸くした。

「と、突然何を言い出すんだね君は……」

「いえ、時期尚早かとも思ったのですが、良い機会ですからここで言わせて頂きます。

私は、学会の方から貴方の不正の証拠を探すように頼まれていたのですよ」

アレックスの言葉に、教授の顔が強張った。

しかし、それには構わず、アレックスは淡々と事実を述べ続けた。「確かに、貴方は学会とそれに連なる方々にとつて有益となる研究を優先してくださるありがたい存在なのですが、それ以上に、学会の上層部は汚点を嫌うのです。

今まで積み上げてきた権威を貶めるような行為が、いつまでも出来るとお思いでしたか？」

そう告げて、アレックスは懐から一枚の紙を取り出した。

「これを御覧ください。私が嘘を言つていないことは分かるはずです。

少々早いのですが、貴方には刑罰の執行がなされるでしょう。

今までしたことも全て公にさらされます」

アレックスは紙を教授に渡すと、ため息をついた。

「では、本日からこの教授は私となります。

皆さん、よろしくお願ひします。

ワイヤー教授ではありませんが、有益な研究は優先的に学会へと回しますので、励んで頂きたいと思います……それでは、私は挨拶のような時間の無駄は嫌いですので、本日以降行いませんが、何か質問があれば遠慮なく訊ねてきて下さい」

アレックスはそう締めくくった。

マリーは涙にぬれた顔をぬぐうことも忘れて、今の状況はなんだらうと考えていた。

頭が真っ白で、なかなか理解できないが、まわりの研究員たちが、ざわつきはじめ、しばらくしてちょっとした歓声が上がった時、やつと我に返った。

慌てて顔をそででぬぐって、クリスを見る。

彼はマリーより呆然として見えた。

身動き一つしないで、ほんやりと中空を眺めている。

そこへ、アレックスがやつてきて、教授が手にしていた研究書類をクリスに返した。

「さあ、改めてきちんと最後まで仕上げてから私に渡して下さい。

期待していますよ」「

「…………あ、は、はいっ！

あの、あ、あ、あ、ありがとうございます！」

クリスの目に、光るものを見めて、マリーもなんだかまた泣きたくなってしまった。

クリスは戻ってきた自分の研究書類を大切そうに撫でた。

「あの、僕頑張ります……」

「ぜひそうしてくれたまえ。

その内容は実に興味深い…………まさかこんなに早く彼を追い出すことになるとは思わなかつたが、それだけの価値がその研究にはある。楽しみにしていろよ」

「はいっ！」

クリスは嬉しそうに返事した後、またしばし書類に見入っていた。マリーはただただ嬉しくて、その様子をじっと眺めていた。すると、アレックスがそれに気づいて、マリーの傍に歩み寄ってきた。

心臓が勢いよくはねた。

「よくあの状況で彼をかばつたね。すごい勇気だと思うよ……やはり、君を助手に選んで良かつた。その熱意と誠実さをずっと大切にするんだよ」

アレックスはそう言つてほほ笑むと、マリーの頭をぽんぽんと叩いてくれた。

その瞬間、マリーは理解した。

ああ、そうか、私はこの人が好きなんだ……と。

あの時逃げだしてしまったのは、嫌だつたからだ。自分以外の他の女性に対しても、同じことをしているのを見るのが、彼の、特別でありたい。

マリーはまた涙をうつすりとじませながら囁いた。

「あの、私……頑張ります。

クリスのこと、ありがとうございました」

「なに、遅かれ早かれこうなっていたんだ。

死期を早めたのは教授自身だよ……まあ少し休んでから、仕事に取り掛かるう

「はい！」

マリーは頭に置かれた大きな手が嬉しくて、笑顔で返事した。いつか、この人に認められるような研究をして、役に立とう。他に出来ることになんて、自分はない。

マリーは、自分が女性としてはどうしようもなくダメだということはよくわかつていた。だから、せめて仕事で彼の役に立てればいい。

そう思つた。

微かな胸の痛みには目をつぶる。

気にしていても、先には進めない。

この厄介な感情に振り回されるのは嫌だった。

以前、そういう思いをしたことがあるから。

マリーはアレックスが頭から手をどけた後で、軽く会釈してから休憩室に引っ込んだ。

ハウエルズは、ソファでしじけなく横たわる女を見やり、嘆息した。

流石に少し疲れたような気がする。

疲れなどといったものを悪魔が感じることはないが、この虚しさのようなものは恐らく人間に当てはめたら、心が疲れた、ということになるのだろう。

それでも、大体のことは分かつた。

この弱みを攻めれば、マリーは墮ちるだろう。

身体を手に入れるもよし、飽きたら魂を食らえばいい。

その頃には、あの強情な娘も調教済みだらうから、たやすく食える。しかし、そうしたとしても恐らく心が浮き立つことがないのは分かつていた。

ハウエルズは、暗い赤色をしたビロードの重苦しいカーテンに手を伸ばした。

柔らかいソファの上に立ちあがり、窓の外を見やる。早朝の少し前くらいのため、まだまばらに人がうろついている。大体は酔っ払いだ。

時々だが、ケンカでもしているのか、罵声が聞こえてくることもある。

横の女はよく寝ている。

彼女はマリーの友人で、既婚者だ。

夫は愛人宅に足しげく通うようになり、息子は乳母にとられ、寂しさから遊び相手を求めて歓楽街にいたところを捕まえた。

甘い言葉を囁いて、悪魔の持つ誘惑の瞳を使つたらあっさり落ちた。

マリーはそこままでしても落ちなかつたが、ここまで簡単だとバカしくなつてくる。

これで何人ものマリーの「友人」が落ちた。

行為に及ぼうと思えば出来たのだが、そこまでしなくともペラペラと過去の友人の秘密をよく喋ってくれたので、秘蔵の香と酒を与えて快樂に酔わせるだけにした。

なんとなく、この借り物の身体を汚すのがためらわれたからだ。皆、マリーほどの美しい魂は持っていない。魂だけではなく、外見までも、醜い。

不細工というほどでもないが、化粧がたっぷりされていて、心の貧しさから肌荒れしているのがありありと分かるのがなんとも侘しかつた。

ハウエルズは、焚きしめた香が逃げないようにそっと窓を開け、まだ夏の暑さがじわり、と残る外へと飛び出した。そのまま屋根に飛び移り、街を一望する。

大学院は比較的大きな建物で、しかも変わった造りをしているためすぐに見つかる。

「さて、後はどう料理しますか」

「やりと笑い、ハウエルズは考えた。

正攻法で行こうか、それとも不意に訪ねて驚かせてみようか。

どちらにしても、マリーは終わりだ。

ゆづくつと、この懐の中に落ちてくる姿を思い浮かべ、ハウエルズは騒つた。

夜、寮の部屋へ帰つてきて、マリーは不意に床に座り込んだ。

「なんだろ、氣力がわかないや」

そう呟いて、ふと衣装がしまわれた箱からはみ出している布地を見た瞬間、心に鋭い針が撃ち込まれたみたいな痛みが走った。

「まだ……あつたんだ」

それは淡い緑色のドレスだった。

かつて着ていた服の大半は捨てたはずなのに、まだ一着残つていたらしい。

昔は、こんなふうな研究者になるのではなく、どこかの家に嫁いで妻となり母となるのが当然と思っていた。あれはその頃の残滓だ……。

それとともに、思いだされる光景がある。

心を突き刺すような言葉を耳にするとも知らずに、人々のざざめきの中を縫つよう歩いて、小さい頃からこの人と生きていかなければならないんだと教えられた人物を探す。

彼の事はどうやらかというと好きだった。

美男子だし、階級も同じ。

賭博や女性との浮ついた噂もあまり聞かないし、女学校の友人たちには羨まれていた。

社交の場でも、彼は理想の存在だった。

その時も彼を探していたのだが、その姿を見つける前に、言葉が聞こえてしまった。

「何が羨ましいものか。

あんな冷血女と結婚しなくちゃならない僕の身にもなつてくれよ
笑い声が上がった。

「そいつはないだろ？あんな美人なかないないじやないか」

「いや、話してみれば分かるよ。言葉こそ穏やかだけど内容とかす

「いきついんだ。男がどれだけデリケートか分かつてないんだよ。あんなの奥さんにしたら胃がもたないぜ。女としては失格だよ」なんてひどいことを言つ人だらう、やつ思つてそちらを見て凍りついた。

それからのことはただ悲しくて苦しくて速くそこから去ることしか頭になかった。家へ帰つて泣いた。それからしばらくは勉学に打ち込むことで色々なことを忘れた。

気づくと、勉学の方が楽しくなつていた。社交の場では、どうしても、という場合しか顔を出さなくなつた。それでも、言葉は容赦なくマリーを痛めつけ続けた。

（私は、女としては失格……）

その言葉は、今でもマリーの心に突き刺さつたまま抜けないトゲになつてゐる。

思えば、マリーには男性もあまり声をかけてこない。…… そう、つまりそういうことなのだ。

それなら、もうなにも望むまい。女としての幸せは、所詮私には手に入らないものだつたのだ。そういう間に聞かせて、心をなぐさめた。折しも、鍊金術と出会つたころだつた。

しばらくした後、彼が駆け落ちしたという報せが入つた。

親や親類にはあんな男と結婚しなくてよかつたとなぐさめられたが、噂ではマリーから逃げだしたのだ、とか、婚約者に魅力がないからだとか、借金があつたのだろうとか、色々と言っていた。

マリーはますます社交の場から遠ざかるようになり、その時に大学院へと進んだ。

もう結婚とか恋とか愛とかはつんざりだつた。

それでも寂しくて、恋人を作るなどとバカげたことをしてしまつたのだ……。

そんなことをしなければ、こんな思いをまたしなくて済んだだろうか？

マリーは不意に我に返つた。

時々、こんな風にして痛みの海に溺れてしまうことがある。その度に、こんなことではいけないと思うのに、心は言つことを聞いてくれないのだ。

「なんとかして、忘れなくひき」

マリーはため息をついて立ち上がり、テーブルの上のわざわざくに灯をともす。

食事は済ませてきているし、アレックスの研究内容を教えられ、クリスにこき使われ、くたくただ。シャワーを浴びて早く寝ようと思った。

けれど、なんだか気が落ちつかない。

マリーの視線は自然とテーブルに向かう。
あまりモノの置かれていらないテーブルには、ブランデーの瓶と小さなグラスが置かれている。

マリーはそれに手を伸ばした。

すると、不意に窓があき、誰かが入ってきた。

「……な、何！」

マリーは驚いて思わず床に尻もちをついた。つづづく自分の運動神経のなさが嫌になる。痛む尻の抗議は放つておいて顔を上げると、整った顔が月光に照らされてこちらを覗き込んでいた。

「……ハウエルズ」

忌々しげにその名を呼ぶと、彼はなぜか嬉しそうに笑った。

「名前覚えててくれたんだ」

「当然よ。私の傑作を持ち逃げした忌々しい悪魔の名前だもの、忘れるわけないでしょ」

そう答えると、ハウエルズは窓からマリーの部屋へ入ってきた。きちんと施錠したはずなのに、なぜか鍵がきかないらしい。

悪魔だから、と言えばそれまでだが、なんとも腹立たしい気がした。

「それで、何の用なの？」

「あれ、絶対にこの身体を取り返してやるとか息まいてたのに、何もしないんだ」

ハウエルズはからかうように言つた。

マリーは眉間に縦じわを刻んだまま口を曲げる。

全く、いつたいなんだつてこんな時に現れるんだろう。

今マリーは弱っている。こんな時に来られたら、対抗できる自信がない。

唇を奪われた時の事を思い出し、マリーは胃が痛くなつた。

「帰つてよ、今日はあなたの相手してる気分じゃないの」

「ふうん、もしかしてさ、ハロルドつてのが関係してる?」

「……！」

マリーはその名前を聞いた瞬間、思わずハウエルズを睨んだ。

「私の前で、その名前を言つのはやめて!」

思わず声を荒げてしまい、マリーはハッとして口をつぐむ。

ハウエルズは笑っている。

その口元に浮かぶ魅惑的な笑みに、マリーは思わず見入ってしまった。

「復讐したい?」

深い、耳触りのよい声が鼓膜を震わせる。

「俺だつたら叶えられるよ、何でも、君が望むものをあげられる。一緒にいようよ……俺はお前が欲しい」

弱ついていた心の隙間をくすぐるようになり、言葉が脳を揺らす。

「どうして、私なんかにそんなにこだわるの?」

そこまではなくとも、魂をとつて食らえる人間なんかたくさんいるでしょう?

他の人の所へ行つてよ

そう言つてから気付く。

他者に押し付けることで田の前の存在から逃げ出したい自分がいることに。

ひどい人間だと思う。

このまま流されたほうが楽なのは理解できる。それでも嫌だった。最後のプライドだ。

「そうだね、自分でも変だと思う。

俺はただ、君のことが知りたい……それには、俺の所へ来てもらうのが一番だからさ」

ハウエルズはそう言いながら、ゆっくりとマリーの近くへ歩み寄つてくる。

マリーは尻もちをついた姿勢のまま、後ずさりした。

ちゃんと人間の服をまとつて、堂々と立つ姿は、自分が造形したことなどと信じられないくらい、存在感があった。月の光に浮かび上がる輪郭が綺麗だと思った。

声こそアレックスとは違うが、頭の中が混乱するほど、心が騒ぐ。

「君は恋人欲しさにこの身体を作ったんだろう？
なら、俺が魂の代わりをつとめてあげるよ、悪くない話じゃないか。

お互に欲しいものが手に入るんだ……なのに、なぜ君は頷かないんだ？」

「そ、それは」

そうだ、考えてみればそうだった。

今まで色々なことがありすぎて、じつくじと考えてみる暇などなかつた。

マリーは嘆息して、床の上に座りなおした。板張りの床は冷たかつたけれど、それが頭を冷やす役に立つた。床の上にはうっすらとほこりが積もっている。寮母さんが掃除してくれているとはいえ、自分ではなにもしていないので、ほこりは溜まっていく。

除去しない限り、そこに積もり続ける。

まるで心の中の痛みのように……。

「私は、あなたのことは好きじゃないのよ。

恋人の代わりとか、そういうのは嫌なの、ちゃんとそこに愛が欲しいのよ」

マリーは疲れたように呟いた。

それを聞いたハウエルズは怪訝な顔をした。

「誰かに愛を求めて裏切られるかもしれない。

それが嫌でこの身体をつくったんじゃないのか？」

ハウエルズの言つとおりだった。裏切られて傷つるのが嫌で、もう一度同じ思いをしたくなくて、マリーはあの「身体」を作ったのだ。

それを恋人のように扱うことで心の隙間を埋めたくて。
けれど、マリーはアレックスに出会ってしまったのだ。

「そうよ、でも気付いたの。

そんなことをしても、自分を苦しめるだけだって……だから、身體を返して。

魂が欲しいなら、それを望む人の所へ行けばいい、どうしても私でなければダメだというなら、しばらく待ってくれればいつかあげるから」「から」

マリーは真っ直ぐにハウエルズを見て言った。

ハウエルズは、なぜか傷ついたような顔をした。

「いつまでも、自分の失敗を残しておきたくないのよ。お願いだから……返して」

「何で……」

「え？」

「何で俺じゃダメなんだ！」

唐突にハウエルズが叫んだ。

マリーは何故目の前の悪魔がそんなことを叫ぶのか分からなかつた。

しかも、その表情はまるで人間のようで、悲痛にゆがんでいる。

「あいつもそうだった……アミーリアも、同じことを」

ハウエルズは独白するように言い、それからハツと我に返った。慌てて口元に手を当て、悔しげにマリーを見ると、次の瞬間身をひるがえし、風のように窓から出て行ってしまった。マリーは突然のことにただただ呆気にとられるばかりだった。

まるで嵐が過ぎ去ったあとのように、思考がなかなか戻つてこない。

開け放しの窓から吹き込む風が、ゆったりとカーテンを揺らしているのを眺める。

その風はひどく冷たくて、身体の芯まで冷やすようだつた。

「何だつたのよ……もつ」

唐突に戻ってきた静けさは、今しがたの言い争いをマリーにせざまざと思い起こせる。

「……俺じゃダメ、か」

額に手を当て、髪をかきあげる。うつすらと汗ばんでいるのが分かつた。

マリーは重い身体を起こし、とティーブルに手をかけ、なんとか立ちあがる。それからふらつく足でベッドに向かい、倒れこんだ。うつ伏せに倒れこんだまま、ぼんやりと考える。

何故、ハウエルズはあんなことを口走つたのだろう？

再び開いてしまつた自分の心の傷から目を反らしたくて、ハウエルズのことを考えた。

「……アミーリア、つて誰なのよ」

女性の名前であることは間違いない。

もしかしたら、とマリーにある考えが浮かんだ。

それを弄ぶように、さまざまな事を勝手に想像してみた。

もしかしたら、あの身体に入り込んだ悪魔は、かつて人のように人に恋してしまつたのかもしれない。悪魔に性別があるのかどうか定かではないが、一応名前や言葉づかいからして男だと思う。「アミーリア」とはその恋した女性の名前なのではないだろうか？

そしてあの様子からすると、彼の思いは叶わなかつたのだ。

悪魔であるハウエルズがいつ生まれたかなど分からぬが、少な

くともマリー達の何倍も生きていって、寿命らしきものがないのだから（悪魔祓いに消されたり天使に消されたりはするかも知れないが）その「アミーリア」という女性はすでにこの世の人ではないだろう。「そつか、だとしたら、あいつも色々失ってるのね」

「言つてみて、マリーは違うなと思つた。

そもそものはじめから、マリーはハロルドが好きだったわけではない。恋ではなく、ただ好意だけ抱いていただけだ。友人ですらなかつた。

恋は、そんな生易しい感情ではない。

だから、マリーは失つてはいけないのだ、まだ……思いを伝えていないのだから。

今になつて、ようやく気付いた。

相手がただただ欲しくてたまらない……気持ちを押し殺すのは本当に辛い。この思いを暴走させるとはきっとたやすいのだ。けれど、それでは自己満足に過ぎないし、マリーのプライドも許さない。

『女としては失格だよ』

マリーの心をずたずたにした言葉が脳内をまわる。

それでも、アレックスの役に立ちたかった。

言つてしまえば色々と終わる気がした。

だから、殺すのだ、忘れるのだこの痛みを……。

マリーは嘆息してむぐり、と起き上がり、そつと酒の瓶に手を伸ばした。

朝日がまばゆく、清浄な色をともなつて研究室に差し込んでいる。アレックスはそんな気持ちのよい空気の中で、器具の手入れをしていた。

少しでも不純物が混ざらないよう、定期的に手入れをしなければならない。鍊金術に使われる器具は皆纖細なのだ。少しでも怠れば、鍊成に失敗してしまうこともある。その時に稀代の鍊成が出来ていたら取り返しがつかない。

特に入り組んだ構造をもつガラスの器具は、掃除するにもコツがいるのだ。

「今日は金属を扱う予定だつたな……」

つぶやいて、黒板に書かれた内容に目を走らせる。

アレックスにとって、一人でその日のことについて考えを巡らせるこの時間は、とても落ち着く、安らげる数少ないひとときだった。教授の座にいた邪魔者を追い払って以来、研究員や学生たちにも活気が戻り、毎日が充実していると感じる。

新しく見出した助手のマリーの能力も申し分ない。

彼女に自分の研究を手伝つてもらえば、アレックスにとっての悲願が達成される日もそう遠くないようと思えた。

だが……。

アレックスはふと手を止め、研究室の戸に目をやった。

ここ数日、マリーの様子がいつもと違うことに、アレックスは気付いていた。

顔色も悪いし、目の下にはいつも隈が出来ている。まともにものを食べている姿も、そういえば見ていない。あまり眠れていないうだ。ある日など、酒のにおいをさせていた。

が、彼女の性格からして、昼間から飲んだりはしないだろうから、昨夜飲んだものが残つていてるに違ひなかつた。

何か、悩み事でもあるのだろうか？

だとしたら、その力になつてやりたい。

彼女は優秀だし、やる気もある。ここで身体を壊したら、なにもかもが潰れかねない。

それはとても惜しいことだとアレックスは思つた。

不意に、なぜ自分そつくりの身体など作ったのかと尋ねた時の様子が思い出された。

その時の彼女はとてもかわいらしかつた。

思わず口元がほころんだところで、戸が開いた。

一瞬マリーか、と思ったが、入つてきたのはクリスだった。眠たげにあくびをしながら入つてきた彼を見て、アレックスは思わず失笑した。

一方のクリスはアレックスの姿に気づくと、慌てて口をふさいだ。

「すみません、いらっしゃるとは思わなくて」

「いや、気にしなくていいよ。

少しばかりだらしない姿を見たからと言つて、いちいち咎めたりするのは変な話だと思うんでね。

ただ、やるべきことまでだらしないのは良くないが……」

アレックスは苦笑気味に言つた。

個人的に、目の前の青年には好感が持てる。

所作がだらしなかつたり、軽口をたいたりしていくても、決してそれが嫌みではないからだし、何より研究に対する熱意が、アレックスにはとても好もしい。

鍊金術はもともとの怪しい印象と、目立つた成果が挙げられていないせいで、学問の中ではかなり扱いが低く、人によつては薬学や鉱物学と混同している者すらいる。

だからこそ、有用性を強めるために、優秀な人材はいくらいても良いと思っていた。

そのクリスは、マリーとは仲が良いのか、よく一緒に研究をしている。

最近では自身の研究が手詰まりなのか、よくマリーにアレックスの研究室へやつてくるようになり、彼にも手伝ってもらっているのだ。

今では毎日のように顔を出すため、すっかりなじみの顔となっている。

「そりゃ……そりですね」

クリスはニヤリと笑つて見せ、それから今日やる」とここで確認作業などを始めた。

アレックスはふと、彼なりマリーの不調について知つているかもしれないと思い、器具を磨ぐ手を止めて訊ねてみた。

「そうだ、君なら分かるかな」

「はい？」

「いや、最近マリーの様子が変だと思つんだよ」

そう言つと、クリスは「ああ……」とうめくような声を出した。
「多分、またいつもの発作みたいなものだと思ひますよ。
あれ、でも変だな」。

春はまだまだ先だつていうのに、何かあつたかな……？

クリスは説明しようと口を開いたが、途中でなにやら考え込むようなしぐさをして、首をかしげた。

「発作？ 発作ってどんな？ 何か病気を持っているんじゃ……？」

アレックスは心配になり、やや身を乗り出して訊ねた。

「ああ、違いますよ、トラウマってやつです。

あいつ、昔婚約者に別の女と駆け落ちされたんですけど、その時
かその前かにひどいこと言わいたらしくって……内容は忘れちゃっ
たんですけどね。

ほら、マリーの家つて上流階級でしょ、シーズン中には色々な
催しに呼ばれるんですよ。

そのたびに周囲の人間から氣の毒そうに見られたり、あからさま
に陰口叩かれたり。

そのせいでもよく夜眠れないっていじぼしてましたよ

クリスはやや憤慨したように言つた。

「何が嫌であんなイイ女振ったんだか分かりませんけどね。
リサとか、仲のいい友達がなぐさめてもどつにもならなかつたみ
たいで……。

正直、あんな幽霊みたいなマリー見るの寂しきも辛いです。
でも、まだそんな時期じゃないはずだし、最近は行かないようにな
してゐつて言つてたんで、ちよつとは大丈夫かな、とか思つてたん
ですけど……やっぱり何かあつたのかな?」

最後はぼやくようにクリスが言つた。

アレックスはクリスの話した内容を聞いて胸が痛んだ。

おおまかことしか語られていないが、マリーの心中を察すると、
ひどく強い怒りが込み上げてくる。

「そうか、辛い思いをしたんだね」

「ええきっと辛かったらうなつて思いますよ。

ほり、マリーってああ見えて自分を責めちゃうようなところがあ
るから心配なのよ、つてリサも言つてましたしね。

とにかく、僕としてはそんなクズ男をつと忘れて欲しいところ
ですよ。

何より、マリー自身のために、ね

クリスは肩をすくめて、悲しそうに言った。

そんなクリスを見て、アレックスはなんとなしにつぶやいた。

「君はマリーのことが好きなんだね」

「そりゃあまあ、マリーがいなければ僕はここにいられなかつたですし……つていっても、恋愛感情とかじゃないですけど。

どっちかというと危なつかしいんだけど、でも時には頼れる妹、みたいな存在ですよ。

「どのみち身分違いでし……」

クリスは苦笑交じりに言つたが、後半ふと言葉を濁した。

「……どうしたんだい？」

「ずいぶんと、その、マリーのことを貶づか'んですね」

「え！ い、いや、最近とにかく具合が悪そつだつたものだから氣にしていてね……」

ささいな病でも、大病に化けることがあるから気をつけないと。せつからく出来た優秀な助手を失いたくないんだ、私は」

アレックスはややうろたえた。

返した言葉は、我ながら滑稽なほどつじつまがあつていないうつに思われる。

なぜこんなに慌ててしまつたのだろう？

「それもそうですね、余計なこと言つてすいません」

クリスはそう言つてアレックスの言葉を肯定したものの、納得した様子は感じられなかつた。

アレックスは小さく嘆息して思つた。

どうやらクリスは先程の発言で、私がマリーを好きだと思つてしまつたようだ。

しかし、そんなはずはない。

そもそも、アレックスには結婚どころか、恋愛をする気など全くなかつたからだ。

かつてアレックスの姉が、恋愛を経験したことにより身も心もボ

ロボロになつて亡くなつたのを見た時に、決めたのだ。

恋愛が、何もかも全てを失つてしまつ病のようなものならば、最初から避けるべきだと。

あのような最後をとげたくなかつた。

アレックスには成し遂げたいことがあるのだ、そのために、リスクと思われるものからはなるべく身を守つていたかつた。

だが、なぜこいつも胸が痛むのか。

その時、戸が小さな音とともに開いて、マリーが顔を出した。アレックスはそのやつれた顔を見た瞬間、彼女を捨てたと言ひ男を殺してやりたい気分になつた。

「おはよう、今日は珍しく早いのね」

「うん、なんか掃除するとかなんとかでたたき起しそれちゃつて、部屋から放り出されたんだ……というかマリー、まだ眠れてないんじやん。薬学部に知り合いでいるから薬貰つてやるつて言つてるだろ？」ひどい顔だよ

「失礼ね～まだそこまでひどくなつわよ。もつとひどい時あつたんだから」「…………」

マリーは少しむくれて言つた。それからアレックスに気付くと、笑顔を向けてきた。

「教授、おはよう」やれこます。こつも早いですね

「ああ、おはよう。その、本当に大丈夫なのかい？」

「え？ 平氣ですかこんな。まあ、今日はなにをするんでしたっけ、ああ、そうか……昨日の金屬の続きでしたよね。

えつと……」

「…………マリー、そつちぢやなくてこいつち」

クリスが、見当違ひの場所を探し始めたマリーに言つた。

「あ、ごめん」

それから一人はいつものようにやりとりをしながら準備を始めた。いつものように。たゞ、変わりなく。

それがクリスの優しさなのだろう、いつもどおりに接することが。だが、アレックスには出来なかつた。と、いうより、どういう訳か口が恐ろしく重い、言葉を発せられる自信がない。

そうか、と妙に腑に落ちる思いがした。

かつて恋人を失つたことで亡くなつた姉が言つたとおりだ。

どんなに逃げても追つてくる、決して避けられない、そして、天国か地獄を与えて去つていく。それが人を好きになることなのだと。気付かないふりをしていたのだ、自分の心すら偽つて。そうやつて自分の心を守つていたのに、クリスが何気なくした話でアレックスが築いた防壁はもろくも吹き飛んでしまつた。

（どうか、私は彼女が好きなんだ。女性として……）

その事実は、妙に優しくアレックスの心に突き刺さつた。

しどしどと雨が降っている。

マリーはため息をついて窓の外をじっと眺めてから再びベッドへ戻った。

今日は学院は休み。

いつもは休みだろうとなんだろうと、勝手に研究室を使って何かしていたものだが、今は特にやりたい研究もないのに、久しぶりに寮でじっとしていた。

本当はなにかに集中してみたいのだが、近頃まともに休めていなかつたから、身体の調子がかなり良くない。

今日もなんとなくだるくて、熱っぽかつた。

仕方なく、昨日のうちに学院の図書館から貸出可の本を何冊か持ち出して来て読んでいる。

「全然内容が頭に入つてこない」

ややうらめしげにぼやいて、ベッドに倒れこんだ。

部屋はけつこう寒い。

外を見れば、まだ木々に緑は残っているのだが少しづつ赤や黄に染まつてきている。

あれが赤茶けて散ればもう冬だ。

ハウエルズに身体を持つていかれたのが夏だから、ずいぶんと時間が経つてしまつたな、とマリーはぼんやり思った。

「たまには、こんな日もいいか」

つぶやいて、マリーは久しぶりに心が休まっているのを感じた。しばらくそのままして呆けていると、不意に戸がノックされた。

マリーは、ハッ、としてからすぐに首をかしげた。ここしばらくこのものの、マリーの部屋を訪れたのは、あの悪魔以外にいない。もしも彼であれば、まずこんな風にノックしたりしない。いきなり窓から侵入してくるだろう。

「マリーは誰だかさっぱり分からず」、とつあえず声をかけた。

「あの、どちら様ですか？」

「ここには大学院関係者しか入れないようになつてゐるはずなのだが、マリーにはここを訪れる理由のある人物が全く思い浮かばなかつた。

少しだして、返ってきた返答の主はは思ひがけない人物だつた。

「私だ……ハーストだ」

返ってきた声に、マリーの心臓はひっくりかえつて激しくうちらはじめた。

「き、教授っ？」

マリーは転げるよつてベッドから出で、慌てて戸を開けた。開けてしまつてから、自分がひどい格好をしていることに気付いたが、もうおそい。

戸の向こうには、マリーが今最も見たくなかった人物が雨に濡れて立つっていた。その手には、何やら大きな布のかたまりがあさまつている。

「やあ。

いきなり訪ねてしまつて済まない」

「いえ、あの……どうぞ」

マリーはどう答えたらいいのか分からず、とつあえず中に入るよう勧めた。

寒い外に立たせつぱなしにしてはおけなかつたからだ。

本当なら、未婚の女性が男性を部屋に招き入れるなどしてはいけないことだ。

けれど、今のマリーにはそのことに気が付いても、追い返すなど出来なかつた。

「いいのかい？」

「そのままじや、風邪をひいてしまいます。

教授に、風邪をひかせるわけにはいきませんから」

アレックスの問いに、マリーはややうわのそらで答えた。

彼は、そつかと口元でつぶやいてから、少し恥ずかしそうに、大きな身体をかがめて部屋に入ってきた。そして、しばらく驚いたよう立ちつくした。

「……これは、何と言つか

「どうかしましたか？

あ、教授は椅子にかけて下さい、私はベッドにすわりますから

「あ、ああ」

アレックスは持っていたものをテーブルに置くと、言われた通りに椅子にかけた。

それから、包みの中のものを次々と取りだしてならべはじめた。戸を閉めて、アレックスの髪などを拭くための布を取り出してからそれを見たマリーは、啞然とした。

彼が持ってきたのは、珍しい南国の果物、パンのかたまり（そうにしか見えなかつた）、調理済みの肉や魚や野菜の缶詰、チーズのかたまり、ハムにソーセージ、バターなどの大量の食べ物と怪しげな薬の包みに、お守りらしき不気味な飾り物に、毛布だった。

「あの、なんなんですかそれ……？」

最後に小脇に抱えてきた薬草などが漬けられたワインの瓶を置いたアレックスに問う。

「見ての通りだよ。

最近なんだか具合が悪そうだし、あまり食べていいようだつたからね、栄養をつけてもらおうと思つて……。

ああ、説明が必要なものもあるね、これはよく眠ると評判の薬屋の薬。

このワインは滋養強壮に良い薬酒。

「これは今流行の魔よけだといつことだよ」

アレックスは、なにやら玉玉や生首がたくさんぶら下がっている謎の飾り物を手にし、じりく真面目な顔で説明した。

殺風景もいいところだったマリーの部屋に、これほどの色彩があふれたのは、良く考えてみなくて初めてのことだった。

「マリーはまさか不眠と不調の原因は目の前の貴方です、などとは言えないのに、口元を引きつらせて笑みを作つて見せた。

「あ、ありがとうございます。」

あの、まさか今日ほこのためだけにわざわざ……？

「大事な研究も控えていることだし、君に倒れられては困るからね」アレックスはこともなげに言つた。

その言葉はマリーの胸をするどく貫いた。

けれど、涙だけは見せたくなかつた。

「私は、大丈夫ですよ。

気づかいは嬉しいですけど、体力だけはあるんです私。

風邪だつて滅多にひかないんですよ」

顔を見られたくなくて、マリーはつづむきがちに、早口で言つた。

「そう言つ訳にはいかないよ。

まだ平氣に思えるのは若いからだ、強いからではないんだよ？もつと自分の身体をいたわつてやりなさい」

アレックスは心から心配してくれているようだった。

マリーは少し顔をあげ、その心配げな優しい顔をまともに見つめつた。思わず、感情があふれてきて、泣き笑いのような表情になつてしまつ。

「そんなの、無理ですよ

疲れたように、マリーはつぶやいた。

そう、もう本当に疲れていた。

強情を張ることも、自分の気持ちを隠すことも……。

「それはどうして？」

「悩みがあるなら私に相談してはくれないか？」

いや、私などで役に立てればの話だが、言つてしまえば楽になることがある

マリーは不意にポンと来た。

「……もしかして、もうご存じなんですか？」

マリーはやや剣呑な気分で訊ねた。

アレックスの言い方からすると、すでに知っているはずだと思つた。案の定、アレックスはやや困惑つたように、マリーから田をそらした。

「そうですか……別にいいですけど」

いつたん口を開じて、マリーは外の雨音を聞いた。

散々悩んできて、なぜこんなに苦しいのかは分かつていた、

それは、ハロルドの言ったことを否定できないからだ。

自分が情けなくて、悔しい。

それでも、最初の頃はそんなんじゃない、私はそんな女じゃない！
と言いたくて、自分を変えようと努力もした。けれど、どれだけ

欠点を克服したかに見えて、周りの見る目は変わらなかつた。

そうして、結局はいつもこの自分に戻つてしまつ。

もう彼の言葉を覆せない。

心にそんな諦めが染みついた時に、ほとんどヤケクソでの身体を作つたのだ。

そのマリーの前に、アレックスは現れた。

最も自分のことを女性として見て欲しいひとが現れてしまつたの
だつた。

「昔言われた」とを、こまでも引きずりてゐるなんて、馬鹿ですよね
……私

マリーが言つと、アレックスはハッとしたよつて顔をあげた。

「……そんな」とは

「いいんです。

いつものことですか? 教授の研究にじり迷惑をおかけしません」
マリーはそう言つと、深呼吸した。

落ち着かなくては……そう自分に言い聞かせる。

「そのひが、復活すると思いま……」

言葉は最後まで続かなかつた。

気がつくと、マリーはアレックスに抱きしめられていた。
あまりのことに堪も出せず、身体はちいさく震えた。

「そんなに、無理をするな。

私にとって、君は大切なひとなんだ」

耳元で、囁くように放たれたことば。

それを額面通りに受け取れたなら、こんなに幸せなことはないの
に……。

息を吸うと、彼の匂いがする。

研究室のものと、彼の身体の匂いとが入り混じつた匂い。

マリーにとって、いま一番好きな匂いだった

そして、思わず言つてしまつた。

「それは、どういう意味での“大切”なんですか?」

マリーは言つた。

もう、黙つたまままでいることは出来なかつた。

背中にまわされたアレックスの手がこわばるのがわかつた。
やはり、彼も他の男と変わらないのだろうか?

マリーは、女性として見てもらえない存在なのだろうか?

小さく息を吐いて、マリーはついに言った。

「私は教授が好きです。もちろん、教授として尊敬しているという意味でも好きですが、ひとりの男の人として、あなたが好きです」アレックスは驚いて、マリーから身体を放すと、じつと顔を見つめた。

マリーはその視線がいたたまれなくて、うつむいた。

「返事は無理にできません。ただ私が言っておきたかっただけなので……」

ローリーもいながらもぞぞ言つ。

とにかく恥ずかしくて仕方なかつた。それ以上に、どんな言葉が返されるか怖かつた。

けれど、言わないで後悔するより、言つて後悔したいと思つたのだ。たとえ、そのことで傷つくなつたのだと纵しても。

今のマリーには、そう思えた。

やがて、アレックスが口を開く。

「いや……嬉しいよ。

といつよい、先を越されてしまつたな

アレックスは茫然として言つた。

マリーは耳を疑つた。

いま、アレックスは嬉しいとか言わなかつただろうか？
驚いてマリーは思わずアレックスを凝視してしまつた。

「まさか、咲に言われてしまつとは思わなかつた」

彼は同じことをくり返して言つた。

しかし、ただ喜んでいるのではないよつて見えた。アレックスは

口元を手で押されて、マリーを見た。

「ちょっと……予定が狂つたな

「……え？」

「いやね、君が私を好いていてくれるだなんて思いもしなかつたものだから……。

けど、言おうと思つていたことに変わりはないか

アレックスはひとりごちるよつに言つ。

両想いになれて嬉しい状況なのに、マリーは小躍りでもしたいくらいなのに、アレックスはまだ何か思い悩んでいるふうだった。それがなぜなのか、早く言つて欲しかつた。

マリーは彼が次の言葉を発するのを、ただじつと待つた。心臓が破裂しそうな気分だ。

やがて、アレックスは言つにくそつに告げた。

「マリー、私はまだ結婚を考えていしないんだ」

腹をくくつたように、すべるよつに言葉がつづく。

「君のことが好きだ。

結婚する気はないから特定の女性に思いをよせまいとしたんだが、だめだつた。

君を、自分以外の誰かにとられるのは絶対に嫌だ。

これは本當なんだ……だが、同時に思つたんだ。この激しい感情はいつまでも続くものではないと。そして私はいま、何よりも研究が大切なんだ。

つまり、私はいま君と婚約出来ない

アレックスはすまなそうにマリーから田をそらす。

「それでも、こんなひどい私でもいいなら、君の恋人にして欲しい」絞り出すよつに、アレックスは言つた。

まるで、懇願するようなその姿に、マリーはどう答えを返したらよいのかわからなくなつてしまつた。

そもそも、マリーは結婚や婚約などについては考えもしなかつた。そこまで考えが至らなかつたのは、マリーの方も、アレックスが自分のこと好きだとは思つていなかつたからだ。

もちろん、かつてそういう人生の一大事について考えてみたことはある。

あるのだが、ハロルドの一件のせいでの、マリーはそれを自分自身の身に起ることとして考えるのをやめてしまつていた。

だから、いまのマリーは結婚ということの手前で止まつてしまつ

ている。

改めて問われて、マリーは気付いた。

自分は、結婚していく友人たちが羨ましくて仕方なかつたのだと。だから、本心をアレックスに言つたなれば、「ちやんと婚約してくれなければ嫌だ」と言わなければならぬ。

けれど、田の前に立つてゐる愛しいひとは、まるで歯にぬれた子犬のような顔をしていた。

雨のしづくがまだ髪や肩を濡らしている。

田をそらそらとして、それでもそらせはれ、時折マリーをまつす

ぐに見る。

マリーはそれを見て、自分が傷ついてなどビビりでもいい、と思

なにかにすがるよつて……。

ただ、手を差し伸べたくてたまらない。

心は決まつた。

「私は、かまわないです」

言つてみて、マリーはすぐに心が傷つくのが分かつた。

それでも痛みをこらえて、微かに笑つて見せる。

「教授の言つたいこと、なんとなく分かります。

こつか消える炎なら、お互ひ傷が少なく済むよつて……でじゅう

？」

マリーがそう言つと、アレックスは安堵したよつて息をついた。

彼はこう言つたかったのだ。

ひとつこののはいつ気が変わるかわからない。

だから、もしもそらなつた場合を考え、互いを縛るのよつて。

つまり、いつ終わらせてもいい関係でこよつて……。

それは、永遠を、少なくとも死ぬその時まで愛を誓つて樹を望むマリーにとって、この上なく残酷な言葉だった。

けれど、そんなことはおぐびにも出すまいとマリーは決めた。

（それでもいい、それでも、好きだと言ってくれた……）

「本当は、こんなことは言いたくない。

だけど、私はひとの心を信じることが出来ないんだ、一番信用で
きないのは自分の心かもしねない。

けど、君は理解してくれるんだね、嬉しいよ

アレックスはちょっと悲しげに言つて、再びマリーを抱きしめた。
彼の腕の中は、大きくて温かく、他の女性より身体の大きなマリ
ーですら、すっぽりと包んでくれた。それなのに、ちつとも心が安
らがなかつた。

むしろ、心の一部が死滅してしまつたかのような気分だつた。
痛みや苦しみがマヒすると同時に、優しくて熱い思いもまた、な
くなつてしまつたような感じだ。

それからしばらくして、アレックスは持つてきた食べ物とワイン
で、マリーと一緒に軽く食事をしてから帰つて行つた。食欲はなか
つたが、マリーが食べるところを見ないと気が済まない、とアレッ
クスが強く言つるので、無理やり食べた。

そのせいで、なんとなく胃が重い。

部屋にひとりになつたマリーは、テーブルに乗つていたもの全て
をひとつめにして、布に包んで部屋の隅に置いた。それからアレ
ックスの声がしそうで、見ていたくなつたのだ。
(誰かが持つていってくれれば、この心の重荷も軽くなるかしら?)
ベッドの上にうずくまり、マリーはぼんやりとそんなことを思ひ
ながら、なんとかその日を過ぎたのだった。

お互ひの告白から五年ほどたつた。

あいかわらず、マリーは毎日もやもやしていた。

というのも、あの日以来アレックスが何も言わないからだ。

あの雨の日の出来事が本当にあったのかどうかすら、なんだかわからなくなってしまっている。

しかも、時々ちょっとしたことに気付いて、思考の邪魔をする。（キスひとつしない……のもやつぱり、婚約が出来ないととかと関係ある、のかな……？）

大切にされている、といえば聞こえはいいのだろう。

けれど、なんとなく不満がくすぐるのだ。

本当に好きなら、こんなふうにならないはずだ。

他のカップルを嫌な程見てきたマリーには、互いが恋人同士という気がまるでしないこの状況に混乱していた。

「……はあ」

思わず出たため息に、近くにいたクリスが嫌そうに眉をひそめた。

「おいおい、今日何回目だよ？」

聞いてる方がうんざりするからやめてくれ……。

待てよ、もしかしたら薬が強すぎたりとか……はないよな？」

「ううん違うの。

「めんなさこいつとうしくじ。

薬の効き目は丁度いいわ、お友達にお礼言つといでね」

「そつか、ならいいけど……あのセシマー、具合悪いならたまにはうことにしていた。

「んー、でも研究してた方が気がまぎれるし」

マリーは金属の粉を秤にかけながら言った。

結局、マリーは痩せ我慢するのをやめ、クリスの友人から薬を貰うことにしていた。

眠れないまま体調を崩すのは良くない、アレックスにも心配をかけてしまつ、と思い、はじめてみたのだが、これが意外と良く効いてくれた。

おかげで嫌な夢もみないで、すとんと眠れる。

あまり長く続けるのは良くないと言われてはいる。

だが、気持ちの整理がつくまでだし、と考えて気にしないことにした。

長引いたら長引いたまでのことだ。

「まったくマリーは……」

クリスは呆れたように肩をすくめた。

マリーは彼の言いたいことは分かつていただが、あえて無視して作業を続けた。

すると、ふいに戸が開いて、リサが顔を出した。そういえば、研究内容が違つてしまつていてるため、あまり話ををしていなかつたのだ。マリーは久しづびりに友人の顔を見られたので嬉しくなつてすぐに声を掛けた。

「リサ、どうしたの？」

もしかしてリサもこっちの研究に回されたとか……

だが、リサはそんなマリーを困惑した表情で見つめた。

それから言いにくそうに切り出した。

「ねえマリー、教授とあなたがその……男と女の関係になつてつて本当？」

マリーは思わずもつていたさじとビンを落としそうになつた。

「ちょ……何で急にそんなこと…」

リサの心配そうな顔に、マリーは背筋が寒くなつたような気がした。

まさか……見られていたのだろうか？

「いまね、ちょっとうわさになつてゐる……寮のあなたの部屋に入つていく教授を見たつ、て。

それで、ほら、色々な憶測が飛びかつて……」

「……そう、なんだ」「

マリーはリサの言葉にやつぱり、と思つた。

あの日は雨ふりだつたにもかかわらず、見ていた人がいたのだ。それが口伝えに伝わり、うわさになつてしまつたのだろう。

実のところ、アレックスはあんなふうで、女性のこと対してはあまり積極的ではない。

だが、実際は女生徒や女性研究員たちのあこがれの的になつている。

あの容姿に加え、若さ、教授という地位、研究者としての能力の高さ、実績、そして名門貴族、ハースト家の出であることなど、女性たちが惹かれても仕方のない魅力を持ちすぎるほど持つてゐる。

そんな感じで注目的であるアレックスが、一女性研究員の部屋を訪ねたとあつては、うわさにならないほうがおかしかつた。

「それとね、その教授があなたのこと呼んでる」

リサはちょっと興味がありそうな様子で言つた。

マリーは思わず顔をこわばらせてしまつた。

なにか言わなくては、と思つのに、のどがかすれてうつまく声が出せない。

「……なあ、やつぱり何かあるんじゃないのか?」

クリスが作業の手を止めて訪ねてくる。心配そうな声色だ。リサもうなずいて、

「私もそう思う。

ねえ、マリー……それは私たちにも言えないことなの?」

と訊ねてきた。

ふたりが本気で心配してくれてゐるのに、何も教えられないのがマリーにはたまらなかつた。

「うん、そつなんだ、ごめんね。

いつか話せる時が来たらいいんだけど

マリーはそつとつて、ため息交じりに研究室を出て行つた。

「……本当にもう一、もう少し私たちを頼ってくれたっていいじゃ
ない！」

リサは眉をとがらせて、不満げに言った。

「だよね、なんでああやつて一人で抱え込むんだろう？」

それとも言えない事情つてのがよほどのことなのかな？」

やや諦めたようにクリスは言つて、作業に戻った。

「大変そうだし、力になつてやりたいけど、マリーの方があれじゃ
あなあ。

だからといつて、ムリヤリ根掘り葉掘り聞くのもちょっとなあ」「
わだかまりが残るのか、ぼやくようにクリスはつぶやく。

それを耳にしたリサは眉をつりあげた。

「じゃあ私たちは何もできないっていうの！」

クリスも意外と薄情なのね、マリーに何度も助けてもらつておいで

「そりは言つてないだろ！」

マリーは言えない事情があるつて言つてただ。

色々聞きだそうとするのもマリーを苦しめる」となるつてこと
だよ、僕はこれ以上マリーの負担を増やすような真似はしたくない
いつもは穏やかなリサが歯みつってきたことに困惑いながらも、
やや憤慨のみにクリスは言つた。

リサは言葉につまり、次いで肩を落とした。

「もう。

友達が苦しんでるつて言つて、何も出来ないで見守るしか出来
ないなんて、なんだか自分が情けなくなっちゃうわ。うう

こうなつたら、教授の方を問い合わせる

「おじおじ

クリスは驚いてリサを見た。

目が据わっている。クリスはそんなリサを見て閉口した。止めた方がいいのは分かつているのだが、あんなつてしまつたらリサはとまらない。止めようとしたらひどい目にあった。

その記憶がよみがえり、クリスは小さく身震いした。

「じゃ、ちょっと言つてくるわね」

「ほじほどにね」

「多分無理」

リサは怖いくらいの笑顔で言つと、研究室を出て行った。
恐らく陰でこいつそり教授とマリーの話が終わるのを待ち、それから突撃するつもりなのだろう。

面倒にならなければいいんだけど、と思いながら、恐らくあり得ないと確信しつつ、クリスはまた作業に戻った。

教授室の前に立ち、マリーは「くつとのじを鳴らした。今まで生きてきて、たかがドアをノックするのこんなに勇気が必要だったためではない。

（と、とにかく何かの話をするだけよ。

別に、大したことじゃないかもしないじゃない……よし）マリーは腹をくくり、ノックするために拳を握つて振り上げた時、ドアが向こうから勝手に開いた。

図らずも、部屋の中の様子が田に入る。

田の前では、マリーの知らない女性が「ひらりを驚いたように見ていた。

それも、相当な美人だ。これほど綺麗な女性はなかなかいない。歳の頃はマリーとあまり変わりないよう見えた。

最新流行が取り入れられたファッショングで全身を飾つており、その洗練された風情から、アレックスと同じ階級の人間だとすぐに知れた。

だが、その女性はマリーを田にすると、一気に美貌が台無しになるような顔つきをした。

（えっ！ な、何で……？）

マリーが理由も分からずに固まつていると、女性は部屋のほうを振り返つた。

「もしかしてこの方が？」

柔らかな女性らしい声で彼女は訊ねた。

「……もう話は終わっていますよ、イーディス」

すると、穢やかだが、どこか剣呑としたものを含んだ声が返ってきた。

それを聞いて、女性……イーディスと呼ばれていたのでそれが名前だらう……は小さく鼻を鳴らして去つていった。

マリーはただ呆然とその背中を見送った。

「ああマリー、来てくれたのですね……入ってきて下せー」

「あ、はいっ」

呆気にとられて頭の中が真っ白になっていたマリーは、慌ててノックしようと振り上げたこぶしをしまつと部屋に入つてドアを閉めた。

そういえば、こうして一人きりになるのは久しぶりだ。

「その……すみませんでした」

アレックスは唐突に謝った。

マリーは今まで放つたらかしにしていたことだと分かったが、何も言わなかつた。

そのまま黙つていると、アレックスが困惑したよひにマリーを見た。

「あの、何か言つてくれませんか？」

マリーはやはり何を言つてよいものか考えあぐね、場に沈黙が流れる。

「えと、何か私に用があつたのでは？」

とりあえずマリーは訊ねた。

正直に言つと、あの女性はなんなのか、誰なのか。なぜこんなに長く放つたらかしにしたのか。など、聞きたいことは山ほどある。けれど、この場所でそういう話をするのは何か場違いな気がした。アレックスは、少々気にはいらなかつた、傷ついたような顔をした。

た。

そして、ひとつため息をつくと、言つた。

「……君は、ここ数日、学院内で広まつてゐるつわさについて知っていますか？」

「はい。

先程リサに教えてもらいました

マリーは答えてうつむいた。

「申し訳ありません、こきなりご迷惑をかけることにになつてしま

つて

「いやそれは違う。

私が勝手に訪ねたのだから……君のせこじやあつませんよ。

それで、考えたんです、このままこのつむぎを放つておくれのはお互いにとつて良くないと」

アレックスはマリーの言葉から何かを察したのか、急に表情を明るくした。

「それで、少しの間だけ、君に私の助手を外れてもらつことにしました」

マリーは耳を疑つた。

「……そんな！

それだけは嫌です！」

思わず声を大きくしてマリーは言つた。

アレックスの役に立つことが、マリーにとっての全てなのだ。

他に残せるものや、望めるものがないのだ。

研究に役立つことをし、手助けすることだけが、この思いを形に出来る唯一の場なのに。

ここで外されてしまつては、何の役にも立たない……。

「私とて嫌なんですよ。

けれど、このまま一緒にいれば、ますますふたりとも身動きがとれなくなつてしまつでしょう。

私はそれだけは避けたいのです……申し訳ありませんが、分かつてください」

マリーは並べられた言葉のひとつひとつが胸に刺さるようで、いつもたつてもいられなかつた。

唇を噛んで、感情を散らすけれど、それもあまりうまくいかない。このまではまた泣いてしまってそうだ。もう泣きたくなどないのに。今までだつて、十分すぎるほど泣いてきている。

マリーは、抑えきれずに胸の中の嵐を吐き出した。

「……そんなことになるなら、教授は告白なんかするべきじゃなかつたんです。」

「いいです、分かりました……。」

「どうせ何も始まつてはいないんですから、最初からなかつたことにします。」

「そうすれば、何も証拠は残りませんし、あつたことすら誰にも分からぬでしょ?」

「言いつつ、きっと今の自分がひどい顔をしているだらうと思つた。すぐに意見をひるがえしてごめんなさい。でも、やっぱり私には辛すぎます」

「そう言い捨てるよ!」と、部屋を飛びだす。

「待つ……！」

呼びとめる声が聞こえた気がしたが、マリーは足を止めなかつた。ただただ苦しくて、息をするのも辛かつた。こんな状態ではまともにものを考えられない。

（やっぱり、私に恋なんて向いてないんだ……）

そんなことを思いつつ、マリーは自分の個人研究室に逃げ込んで、ドアの鍵をしつかりかけた。そのまま、ドアの前にくずおれるように座り込む。

「……何を言われても、平常心を保てると想つたのに」

マリーはぼやいた。

「本当の心は、隠し通せるものではないといふことなのだろうか？」「自分の心に、裏切られるなんてね」

あの時、アレックスの心に寄り添いたいと思つたのは本当だ。だが、マリーが本来望む恋人像は、いまのアレックスの真逆の存在なのだ。

「もう、どうしたらいいか分かんない」

ひざをかかえて座り込み、マリーは痛みを訴え続ける心を抱えて、ため息をついた。

その時、前方から声が降ってきた。

「……なんかお取り込み中のところにいたんだが、マリーはびっくりして顔をあげた。

窓のところにいたのは、街をふらふらしている若者が着ているような、派手な色彩の服をまとったハウエルズだった。

何やら意味不明のことを言つて消えてからは音沙汰がなく、静かでいいか、と思っていたら、こんなタイミングで現れるとは……。

「何か用なの?」

悪魔などの相手をしている余裕のないマリーは、むすっとしたまま言つた。

「いや、ちょっと聞いてもらいたいことがあつたんだが……。その様子じゃ無理そうだな」

ハウエルズは初めて見せる、本氣で残念そうな顔をして言つた。

「何よ話つて……魂ならまだあげないわよ」

「いや、ちょっと大切な話だから今はいい。

急いでないしね、それより、お前の方が何かあつたみたいだな。とんでもない顔してるぜ」

そう言いながらハウエルズは窓から下りて部屋に入つてみると、マリーに歩み寄つた。

「……今あなたの顔は見たたくないの。どうか行つてくれない?」

マリーが剣呑に言つと、ハウエルズはにやつと笑つた。

「あの教授と何かあつた訳だ。

じゃあ……忘れさせてやるうか?」

ハウエルズは、アレックスが決してしないだらう妖艶な笑みを浮かべた。

炎が宿つているような瞳を閃かせて、マリーのあごに手を掛ける。

□元から、牙がのぞいていて、それがひどく艶めかしい。

拒否しようと顔を横に振るが、すぐにまた正面に戻される。さりに抵抗する力は、マリーに残つていなかつた。

「……ずいぶんと大人しいな。

なんか、調子が狂つ

「しょうがないじゃない。

もう、何もかも分からなくて、こんな状態の自分が嫌でたまらないのよ

マリーは思わず本音をこぼしていた。

「こんなことになるなら、告白なんてして欲しくなかつた。ただ、憧れたままでいられれば良かった……こんな、先の見えない、いつ終わるのかも分からなくて、あの人に振り回されるだけの関係なんて、やっぱり私には無理だつたんだわ。

まだ、なにも始まっていないのに……絶望感しか感じられないなんて……！」

マリーの瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちはじめた。ハウエルズは、思わずマリーの背に腕をまわし、抱きしめていた。小さく震えてくる肩が、支えを求めているように感じじられたからだつた。

(馬鹿な……。

悪魔であるはずの俺が、いったい何を……？)

いま、悪魔としてのハウエルズがとるべき行動は、マリーをなげさめながら甘い言葉で淫行をそそのかしたり、墮落への道をそつと歩かせるのははずだ。

決して、なぐさめるために抱きしめるなどといつひとではないはずだ。

(アリーリアに会つてからだ……)

原因はなんとなく分かつっていた。

今日は、そのことにについてマリーに相談してみよつと思つてやつてきたのだ。

この、どことなくアリーリアと似たところのある娘なれば、これ

がなんなか分かるような気がしたからだ。

だが、肝心のマリーがこれでは……。

ハウエルズはそこを動くことも出来ず、遠慮がちにマリーの背をさすった。

なぜか、マリーが辛そうな姿をしていることは、ひどく胸をしめつけた。

その時、ドアが激しく叩かれた。

「マリー！」

「ここにいるのか、いたら返事してくれ！」

ドアの向こうから、心配そうなクリスの声がした。

マリーはびくつ、と身じろぎし、驚いたようにハウエルズを見て、やや慌てながら身体を離そうともがいた。ハウエルズは、少し意地の悪い気分になり、先程より力を込めて抱きしめた。

「マリー！」

「……ここにもいないのか」

「い、いる！」

「いるわ！ ちょ、ちょっと待つて、いま開けるから」

マリーは必死になつてハウエルズを押しのけて立ちあがる。

ハウエルズはおとなしく離してやつた。

そんなハウエルズを少し睨みながら、マリーは田もとをそぞろぐつてからドアを開けた。

「あ！ いた、良かつた。帰っちゃったのかと思ったよ」

開けるなり部屋のなかにはいつてきたクリスは、もう一人の存在を認めて固まつた。

「あれ、え、と、マリー……アレは？」

そう問われて、マリーははつ、としてハウエルズを見た。

気が動転していてすっかり忘れていた。そういえば、マリーにはすっかり彼の存在が当たり前になつてしまつているが、クリスは動いている彼を見るのは初めてなのだ。

「初めてまして。

とりあえず俺、あの笑わない教授様じゃないんでよろしく

言ってハウエルズは、クリスに歩み寄ると妖しく笑った。

「俺の名前はハウエルズ……なあ、何か望みはないか？

何でも叶え……つぐつ！」

「な、なに言つてんのよこのボケ魔魔！」

いきなり契約を持ちかけようとしたハウエルズを、マリーは思わず手近な、重い本でどついた。

それからすぐにクリスの様子を見て、背中に嫌な汗が伝うのを感じる。

「あのや、もしかしてあの時の……？」

クリスは顔をひきつらせたまま、ハウエルズを指差して訊ねてきた。

マリーは、もうびつじょうもなくて、とりあえずうなずいた。
「ま、まさか、いまマリーが教授とうわきになつて、こいつのせいだつたり？」

違う、とマリーは言いたかったが、それではアレックスと何かあつたことが分かつてしまつ。気が咎めたものの、マリーはクリスにうそをつくことにした。

ばれたら色々面倒だらうし、クリスを巻き込みたくなかつた。
もしもばれてしまつた時はひたすら謝りつ……そう誓つて口を開く。

「えつと、そ、そなんぢやないかな。

何かね、今は時々くる野良猫みたいになつてゐるよ

「へえ、そうだつたんだ。

確かに良く見てみると全然教授と違つね。雰囲気とかさ。
あ、僕はクリス。

あなたのおかげであの時はおいしいパンをたくさん食べられたし、とりあえずよろしくな

クリスはマリーが拍子抜けするほどあつさつとハウエルズを受け

入れてしまったようだ。

「ちょ、ちょっと、いいの？」

そんなんで……そいつは私のつくった身体だけど、中身は悪魔な
のよ？」「

思わずマリーが言つと、クリスはビックりあきらめにも似た表情で
嘆息し、

「君の友人やつてればいちこちこの程度で驚いてなんかいられない
よ。

今までだつてずいぶんとんでもないことをしでかしてきたじゃな
いか。まあ、ここまで突き抜けるほどとんでもないことははじめて
だけど」

と言つて、改めてハウエルズをまじまじと眺めた。
「本当に本当に悪魔が入ってるんだ……」

クリスは心底興味深そうにつぶやいた。

一方マリーはクリスに言われたことに反論が全く出来ず、渋い顔
で口をつぐんでいた。

そんなマリーを置いておいて、ハウエルズは殴られたダメージか
ら回復したのか、やや楽しげに軽口を返す。

「そうだぜ。

身体とは契約で縛られてしまつてはいるから、本来の姿を見せられ
ないのが残念だけどな

「それは確かに！」

悪魔だったしさ、男にも女にも変身できるんだろう？

それは見てみたかつたなあ

「ふふん、当然その程度はお安い御用だ。

この身体を出られてからだが、俺と契約すればどんな願いでも叶
えてやるぜ。

お代は分かつてると思つけどな

「ははは、知つてゐる知つてゐる。

まあ悪魔にお願いしたいことなんか針の先程もないけどね

クリスの言葉に、ハウエルズは引きつり笑いを浮かべた。

「あ、そうだマリー」

「な、何?」

「忘れてた。話があつて探してたんだよ……リサのことなんだけれど

」

そう言つとクリスの表情が曇った。
マリーはなんとはなしに嫌な予感がして、いいあぐねているクリスに言葉の続きを促せなかつた。

それでも、クリスの表情が気になり、落としていた視線をあげる。ふと、開けっ放しにしたままのドアの向こうからこちらに急ぎ足で歩いてくる人物を見つけ、思わずあつ、と声をあげた。

マリーは慌ててドアを閉めようと駆け寄るが、時すでに遅く、その人物……アレックスはすでに部屋の中にはいつてしまっていた。アレックスは入ってくるなり、いきなりハウエルズの腕をつかんだ。

「まだ存在していたのですね……あれ以来姿を現さなかつたので、私はてっきり、マリーのことは諦めて別の誰かのところに消えたのだと思つていましたが……」

「そいつは残念でした。

俺はまだまだマリーを諦めるつもりはないぜ」

ハウエルズは腕をつかまれたまま、歯を剥いて笑つた。

尖つた牙がのぞき、マリーは思わず「ぐくり」とのどを鳴らした。真っ白なその牙は、ハウエルズが宿つてから生えたもので、まさに彼が悪魔なのだと知らせるもののように思えたからだ。

もしかしなくとも、その力を振るえば、ハウエルズは簡単にアレックスを引き裂いてしまえるのではと思つて背筋が寒くなつた。

さらに、マリーはアレックスの姿にも驚いていた。こんなにふつに激しく怒つている彼を見るのははじめてだったからだ。

「何にしても、彼女の様子がおかしい理由が分かりましたよ……そのまま去つてくれていれば、もう追う気はなかつたのですが、そちらがあくまでもその気なら仕方ありません。

使えるものはすべて使い、あなたを消します」

いつもは温かな色を帶びているアレックスの金色の瞳が、暗く翳つて冷たい色に変わつている。

それを受け止めるハウエルズの赤い瞳も輝いて見えた。

「フン！」

出来るもんならやってみな！」

ハウエルズは静かに激怒しているアレックスをせせら笑つた。

そして、自分の腕を折らんばかりの力でつかんでいたアレックスの手を、あいしている方の手を使つてもぎ放すと、すぐ近くで立ちすくんでいたマリーの胸をがつちりとつかんだ。

「え……？」

あつけにとられた身動き出来ないでいるマリーの身体を力強く引き寄せ、ハウエルズはそのまま窓へとと飛んだ。

まさか、と思つた時にはすでに窓の外だつた。

冷たい風が全身に吹きつける。

「……待て！」

アレックスは窓の様にとりついて必死に手を伸ばしたが、マリーがのばした手をつかむことは出来なかつた。手はむなしく空をかき、そのまま、ふたりが落下していくのを歯がみして見送る。

「……くそつ！」

こんなことになるべからなら、ちゃんとあの時退治しておくんだけつた

人でも殺せそうな凄まじい顔で、悔しげにアレックスは言った。それから小さくため息をつくと、部屋の中を振り返り、呆然として、なりゆきについていけないようなクリスに問う。

「君は……このことを知つていたのですか？」

「このこと、とこつのは恐らくハウエルズのことだろ。」

クリスはもし知つていて黙つていたなら許さない、と言いたげなアレックスに言い知れぬ恐怖を感じつつ首を横に振つた。

「いえ……僕も、今日……といづかついわつたばかりです」「そうですか……」

「……あのう、ちょっと訊いてもいいですか？」

「何ですか？」

「教授とマリーってその……なんとか、えーと」

クリスが恐る恐る、言いくそうに言葉を並べる。

彼の言いたいことは察しがつく。ここまで見られてしまつた以上、変に隠してしない方がいい。そう思いつつも、アレックスは全く

余裕のない自分自身の行動を呪わずにあれなかつた。

「君が思つてゐる通りです。

ただ、このことは誰にも言わないで下さい」

アレックスが言つと、クリスはすぐにつなずいた。

と、同時に疑問が浮かんだ。

マリーは自分に嘘をついたし、アレックスもまた黙つていて欲しいと言ひ。お互に好き合つてゐるのに、変な話だなどクリスは思つた。

「でも、それならどうして婚約しないんですか？」

黙つていられずに問うと、アレックスは困つたような顔をした。

「いや……色々と込み入つた事情があるんですよ」

「そうなんですか、まあ、事情については突つ込みませんけど、早く厄介ごとがなくなるといいな。

マリー、辛そうだし……」

ぼやくようくクリスは言つた。

アレックスは、ふと今まで疑問に思いながら聞けなかつたことを口にした。

「いい機会だから訊いておきたいのですが、君とマリーとはどんな関係なんですか？」

「え？ 何でまた急に……前にも言つたとおり……」

「君たちはいつも一緒にいるじゃないですか？」

ただの友人で済ませるには妙な気がするんですよ」

アレックスの言葉に、有無を言わせぬものを感じ、クリスは思わず苦笑した。

「まあ、確かにただの友人とはちょっと違いますね」「では一体……？」

「あんまり言いたくないんですけどね本当は。マリー……というか、マリーの父親のヘイスティングス卿が恩人なんですよ」

クリスの言つている意味をつかみかねて、アレックスは眉根を寄せた。

「まあ、そういうことです。

「どうか、僕の事なんか気にしていいんですか教授……？
あの悪魔とマリー、追いかけるんじゃ……？」

言われて、アレックスは少し笑つた。

先程までは神学科の誰かを捕まえてから、追いかけてやるつもりだった。

「もちろん、これから悪魔学研究と神学の研究が行われている場所へ行き、専門家に相談したうえで、確実に祓える方法を見出します。それに、あの状況でマリーは私に手を伸ばしてくれた。
だから、信じますよ……彼女のこと。

悪魔などの甘言に屈するようなことはないでしょう。

そういうマリーだから、好きになつたんですね。

なにより、身体能力が違いすぎますからね、今から追いかけても、このパディントンの街を一周するだけで終わつてしまいそうです。

こういうとき、人の肉体の限界が悔やまれますね……」

クリスは思わず笑いを噛み殺しつつ言つた。

「……何だか、聞いている僕の方が恥ずかしくなってきました

「いえ、私だつて十分恥ずかしいですよ。

でももう君には色々見られてしまつていますから今さら取り繕つても仕方ないじゃないですか？」

それより、教えて下さい。

ヘイステイングス卿とはどういう関係なんですか？」

「分かりましたよ、お教えします。

でも絶対にマリーにも他の人にも秘密ですよ。

まあ、別に大した話じゃなくて、良くある話なんですねけど」

「分かりました。決して言いません」

アレックスは請け合つた。

「僕はそもそも労働者階級出身なんです、本来ならお金がなくてこんな学問の最先端を行くような場所にいられるはずがないでしょう。でも、卿がお金を出して下さったおかげでここにいるんです……代わりに、マリーの近くについて、様子を見張つて時々報告をするようになります」

「ああ、なるほど」

アレックスは納得した。

「だが、それでは君は自分の好きな学問を選べなかつたのではありますか？」

「いえ、卿は元々マリーと同じ学問に興味がある優秀な子どもを探していたんですね。それで僕が選ばれた、という訳なので僕としてはただただ有り難いだけでした」

「いつも一緒にいるのにはそういう訳があつたのですね……」

教えてくれてありがとうございました。

さて、これでお互いにお互いの秘密を握つた訳ですね」「そうなりますね」

クリスは少しこいたずらっぽい笑みを浮かべた。

小さい頃、すぐには声をかけられなくて、遠目から眺めていた。なんとかして友人になろうと、同じものに興味があるフリをしたりした。

声を掛けることが出来るまでは苦労もした。

けれど、そんな努力はすぐに必要なくなつた。お互に興味を抱

くものがほとんど同じだったし、同じ田舎でものを見られるのはお互いだけだったからだ。

興味の赴くままに色々なもののことを追及していくうちに、気が付いたら友になっていた。

本当を言えば、淡い恋心を抱いたこともある。

マリーはとても綺麗な少女だったし、あのハロルドの件の時も側にいたのだ。

なぐさめてやりたかったけれど、彼女はそれをばねにして研究を続けた。

クリスはついていくだけで精いっぱいになっていた。

気がつくと、恋心は尊敬の念に変化していた。

「では神学研究所の方から行くことにします。

もし忙しくないようなら一緒に来てくれませんか？ 人手は多い方がいいので」

「もちろん一緒に行きます！

あ、後でマリーの部屋にも行くでしょう？
その時もついていきますよ。

僕が一緒に方があるわざが変なふうに広がらなくて済むでしょうし、リサのことも教えてやらないと

「ああ、そういえばそうでしたね」

「あれ、ご存じだったんですね？」

「知り合いにウエ斯顿家のものがいましてね、その人から聞いたんですよ」

「へえ～、そうだったんですね？」

貴族同士つて知り合いになる機会多そうですね」

「気楽な次男ですから、そんなに色々な催しに参加してきた訳ではないんですけどね」

「ああ、苦手そうですよねそういうの」

クリスは苦笑した。

「その通り、苦手です。居心地が悪いんですよね何だか」

そう言つとクリスは楽しそうに笑つて、それ以上はなにも言つてこなかつた。

だが、ふいにアレックスは表情を曇らせた。

貴族という言葉に、イーデイスのことを思い出したのだ。
彼女は昔から思い込みが激しく、気にはいらぬ時にはひどく攻撃的になる娘で、どういうわけかアレックスを好いているらしく、よく話しかけてきたものだ。

その時は本当に困つた。

ヤグディウムの大学院へ移つてからは会わずにすんでいたのだが、戻つてしまつた以上、どうにかしなくてはならない。
まさか大学院内まで押しかけてくるとは思わなかつた。
あの穏やかなビック・ウエストン……リサの婚約者である彼の妹とは到底思えない。

度が過ぎるようなら、ウエ斯顿男爵、男爵夫人や、アレックスの父であるハースト子爵夫人などに相談し、自分以外に目を向けてもらつよう取り計らつてもらおつ。

そういうことに関しては女性同士に任せてしまつのが一番だからだ。

そんなことを考えながら、アレックスはクリスとともに神学研究室へと向かいつとも、なんだか憂鬱な気分になつてきた。

(全く……面倒なことになりましたね)

しばらくはマリー・クリスとともに、ゆっくりと研究を続け、自分の心と向き合つて行くつもりだつた。だといつのに、周囲はアレックスたちを放つておいてはくれないらしい。

本当にやりたいことは全て後回しになつてしまつてゐる。

どうしても、焦りと苛立ちがつのつた。

ままならないものだ、と思いながら、アレックスはクリスに分からぬよう、小さくため息をついた。

気持ちの悪い浮遊感のあと、地面に下り立つたのを感じて、マリーは閉じていた目を開けた。

だが、ハウエルズはなかなかはなしてくれない。もがいても、胸にまわされた腕はびくともしなかった。

「ちょっと、離してよ！」

「一緒に来て話を聞いてくれるって約束すれば離してやる

「……どこへ行くつもりよ」

マリーは苛立ちながら言つて、周囲を見回し、安心した。個人研究室の外は、ちょっとした林になつてゐるため、人がいない。

この状況を誰かに見られることは避けられたのが幸いだった。顔を上げて下りてきた窓を見る。

アレックスの姿は見えない。なんとなくチクリと胸が痛んだ。宙に浮いた足を動かすと、ガサガサと音がする。足元には大量の落ち葉が積もつていた。それでハウエルズは無事だったのだろうか？
「落ち着いて話が出来るところさ。

言つただろ？ 聞いて欲しいことがあるつ、て

「話を聞くだけなら寮の私の部屋でいいじゃない」

「それは却下」

「どうしてよ」

「お前の知り合いが来たら困る。

さつきのクリスつて奴とか、あのいけすかない教授とかがさ」「教授は来ないわよ、多分……。

クリス……は、そういえばリサがなんとかつて……あんたのせいで聞きそびれちゃつたじゃないの」

マリーが口をとがらせて文句を言つと、ハウエルズは呆れたよう

に肩をすくめた。

「俺じゃなくて、あの教授が来たせいだろ？」

まあ、明日聞けばいいんじゃないか？

どのみちお前、今すぐには戻りたくないだろ？

全くもってその通りだったの、マリーは言い返せなかつた。

代わりに、歯の間から唸るような声を出してから、ため息をついた。

「じゃあ行くわよ。

でもいかがわしいところ以外でお願い」

「そうだなあ、じゃあ公園にでも行こうか？」

ハウエルズは、少し考えるそぶりを見せてから言った。

「公園、て、人がたくさんいるじゃない。

落ち着いて話が出来るところがいいんじゃなかつたの？」

「だからだよ、人がいるのが当然のところで、知り合いじゃない男女が何か話していても誰も気にとめやしないだろ？

確かにそうかもしれない、とマリーは思った。

それでもなんとなくうなづかないでいると、ハウエルズが顔を近づけてきた。

「異論がないなら行こうぜ」

「わ、分かったわよ」

マリーがそう言つと、ハウエルズは体をはなしてくれた。急にはなされたので、マリーが少しよろめくと、彼はとっさに腕をつかんで支えてくれる。

思わず心臓が大きく跳ねた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

笑顔を返してくれたハウエルズに、マリーは複雑な気持ちになつた。

「彼は悪魔なのだ。

わかつてはいても、ハウエルズの行動のひとつひとつが、マリーがアレックスに求めるものであることがたまらなかつた。

田の前の悪魔がアレックスなら、と思つたものの、そもそも本来の彼ならばこじういう行動はとらないだろう。それが、妙に苦しかった。

「……どうした？」

「な、何でもない！」

行きましょう。日が暮れる前には部屋に戻りたいし……」

「ああ」

歩き出したマリーに、どこか疑つてゐるような返事をして、ハウエルズも歩きだした。

マリーはなんでそんなに勘がいいんだと罵りたくなつたが、それは口に出さず、ただもくもくと歩き続けた。

貴族や上流階級の人間たちが走らせる馬車が邪魔だな、と思いつきちゃんとよけて、マリーとハウエルズはベンチを探した。時刻は昼過ぎで、日差しが芝を温めている。外でもあまり寒くないのはありがたかった。

何しろマリーは上着を学院においてしまっているのだ。しばらくふたりは視線をさまよわせて、座れる場所を見つけると、すぐにそこにおさまた。二人の間には、子どもが一人座れるくらいの距離があけられた。

「それで……私に聞いて欲しいことってなに？」

「ああ。

アミーリア、という人間のことなんだ。俺がかつて、魂を狙つたことのある人間だ……彼女は、薬草を調合して、薬をつくつて暮らしていた。

近くの町や村の人間たちからは、癒しの力を持つ魔女と呼ばれていた

魔女……。

その言葉から、アミーリアというひとはずいぶん前に生きたひとなのだとわかつた。

今では学問の世界も、人々への教育も進み、魔女と呼ばれたいにしえの知識をつないできた人々への偏見も、農村部でこそまだ残っているものの、かなりすくなくなっている。

だが、かつて世界に無知だった人々は、彼女たちを恐れた。

もちろん、なかには受け継いだ知識を悪いことに使う悪人もいたが、たいていはただそれ活かして人の役に立ちながら自分も生活しているだけのひとがほとんどだったのだ。

彼女たちは語らない。

ゆえに誤解も生み、迫害されることも多かつた。

「その、アミーリアといつひとを気にいらなかつた誰かがあなたに魂を狙わせたの？」

恐れた人々が、とも考えられたが、ならば神父や牧師を呼ぶだろう。

わざわざ悪魔をよんで殺そうとするとは思えない。他の人々に知られずに害したい誰かの仕業としか考えられなかつた。

「んーまあ、正確にはその地域を所有してた地主のおっさんだよ。愛人にしようとしたのを拒まれて、なら墮落させて殺してやるつてことだね」

「うわー、最低ねそいつ」

マリーは心底嫌な顔をした。

今は多少改善されたとはいえ、かつては立場の弱い女性はかなりそういう被害にあつていたようだ。

「そこで呼び出された俺が行くと、アミーリアは怒つて出て行け、消えろ、この害虫つて言い放つたんだ。たいていの人間はこの瞳を見ると心を奪われるつて言うのに」

「へえー、まあしかたないんじやない。

実際そんなようなものだし」

マリーは言いつつ、ハウエルズの赤い瞳を見てみたが、綺麗だと思いこそすれ、特に何も感じない。

ハウエルズはそれに気付いて顔をしかめた。

「やめてくれ……悪魔としての自信をなくす」

「でも私以外には効くんでしょう？」

「じゃあいいじゃない」

「肝心の人間に効果がなきや意味ないだろうが。

もういい、話を続けるぞ……とりあえず、彼女の魂はすごく俺の好みだつたから、なんとかして落としてやろうと毎日通つたんだ。そのうち、彼女のもとに薬を買いに来る人間があらわれた」

一旦言葉を切り、ハウエルズは小さくため息をついた。

「それは小さいガキの母親でな……医者にも見放されたけど、何と

か助けたいからといつて訪ねてきたんだ。アミーリアはその母親の話を聞いて、薬は作れると約束して母親を帰した。

だけど、その薬に必要な薬草はいま手元になくて、採りに行かなくてはならなかつた

ハウエルズは時々言い辛そうに言葉を切つた。

とても辛そうで、マリーは思わず手に触れたい衝動にかられたが、実際には触れなかつた。

触れられなかつた。

「翌日、俺は呼びだした人間に呼び戻された。

いつまでたつてもアミーリアが墮落する様子がないんで、変に思われたんだろう。

そいつは俺の話を聞くと役立たずと言い、結局地主が自分で始末を付けに行くから用なしだと言われて契約を破棄された。

俺はそれを聞いて、腹が煮えくりかえる思いだつた。

怒りのまま召喚主を殺して、アミーリアを追つたんだ」

ハウエルズは大きく息をついて、言つた。

「けど、間に合わなかつた。

彼女は獵銃で撃たれて、倒れていた。近くにいた地主とその連れや使用者すべてを俺は殺した。

それから、まだ少し息のあつた彼女に懇願されて、家へと連れ帰つた。

家へ着くと、死にかけてるつて言つのに彼女は薬を作り始めたんだ。

俺は止めたけどアミーリアは聞かなかつた……そして、薬が完成すると、召喚主に逆らつたせいで魂と肉体に傷を負つていた俺に笑つて言つたんだ。

自分の魂を食えつて。

その代わり、あの母親に薬を届けてやつて欲しいと、俺は断りたかつたが断れなかつた。

傷のせいで、存在自体がヤバかつたからな……。

だから……彼女の言うとおりにしたんだ

ハウエルズは一気に語ると、少し疲れたように息をついた。

マリーは色々と言いたいこともあつたが、口をはさむのはなんだかはばかられて、黙つていた。

「母親は喜んだよ……俺も嬉しかった。

嬉しかったんだよ。

悪魔が喜ぶようなことじやないってのにだ。

それからさ……アミーリアとの一件以来、俺はまるで人のように感じることが増えたんだ。

どれが怒りだとか、悲しみだとか分かるまでいぶんかかった。

もちろん、まだ理解できていない感情もある……それが何なのか、マリーに聞こうと思つてさ」

「そり、その反応が人間にとつてどういう意味を持つのか知りたいつて訳ね。

いいわよ。

そういうことなら協力する。

あ、でも、どうしてそれを知りたいなんて思つたの？

それじゃあまるで、人間になりたいみたいじやない……

ようやくハウエルズの真意がわかつて、何を求められていたかわかつたマリーは、ふと浮かんだ疑問を口にした。

すると、ハウエルズは驚いたような顔をした。

「……どうして知りたいか、なんて考えもしなかつたぜ。
そうか、理由……この俺が人間になりたい……？」

自問をし、困惑したような顔でマリーを見るハウエルズ。
マリーはやや呆れてため息をつくと、少し考えた。

「あのね、もしかしたらなんだけば、傷ついていたのは体だけじゃなくて、存在そのものだったとは考えられない？」

その状態でひとの魂をとりこんだことで、人間の魂と悪魔の魂が混ざり合ってしまった。

といふことは考えられない……？」

マリーがそう言つと、ハウエルズはすぐにはのみこめなかつたのか、しばらく怪訝な顔をしていた。が、意味を理解すると、眉間にしわを寄せちいさくうめいた。

「待て、もしそれが本当だつたとしたら、これはアミーリアが感じていることって訳か？」

「うわ、ありえそなだけに否定できない」
マリーは思わず、くすっと笑つてしまつた。

惱んでいる彼の姿が、なんだか可愛らしく見えたからだ。
「まあ、ただの推測というか、憶測だから本気にしないで。
それはそうと、教えて欲しい感情があつたんでしょう？
どんなふうだか教えて」

「あ……ああ。

うーん、どう説明したらいいかわかんないんだけどさ、ある人のそばにいるのがただ嬉しくてたまらないんだ。その人に近づく奴がいると、すごく嫌な気分になる。その人が苦しんでいると辛い。なんとか力になりたくなる。

所有欲かとも思ったんだけど、ちょっと違つ氣がするんだよな

「それって……」

マリーにはすぐに答えが分かった。

「どうより、彼がなぜわからないのかが不思議だった。

「わかるか?」

ハウエルズは首をかしげ、下からのぞきむよひにマリーの顔をまつすぐに見てくる。

思わずマリーは目をそらした。

なんだろう? もやもやする……あまりにもわかりやすくてその答えを言いたくない。

不意に胸の中でうずまきだした黒い感情に、マリーは混乱した。

「ね、ねえ、その人って誰なの?」

「ダメじゃなければ教えて?」

知りたい。とても。「那人」が一体誰なのか。

そんな欲求に突き動かされて、思わず口走ってしまったが、マリーはすぐに後悔した。なんて醜いことを言ってしまったのだろう。取り消さなければと思って、口を開きかけたとき、ハウエルズが言った。

「ダメだから教えない」

マリーは殴られたような衝撃を感じた。けれど、それを顔に出すわけにはいかない。そんな自分を見せたくない。

「そ、そつか。そうだよね……変なこと聞いて」「めん

マリーは明るく笑った。

「えーと、多分ね、その気持ちは……」

必死に勇気をふるごとにして、小さく息を吸う。

「恋、だと思つ。ようするに、その人のことがすく好きで、特別

だつてことよ。

ずっと一緒にいたくて、相手の時間も、心も、体も欲しくなっちゃうの」

なんとか言つことができて、マリーは少しほつとした。

ハウエルズは、しばらくの間何も言わなかつた。

マリーも黙つていた。

自分の心がビートがあるのかわからなくなっていたからだ。

もしかしたら、マリーはハウエルズという悪魔の、人間的な部分に惹かれつづあるのだろうか？ それとも、アレックスがああいう態度だから、マリーの心が逃げ場を求めて、ハウエルズに甘えてしまったのだろうか？

今まで本当の意味で恋したことのないマリーには、ただの氣のせい、で片づけることくらいしか思い浮かばなかつた。

「……ねえ、暗くなつてきたし寒いし、そろそろ寮に帰つてもいい？」

「あ、ああ。そうか、そうだな……じゃあ送つていくれよ」

「うん……あ。そういえばあなたつていつもどこにいるの？」

ベンチから立ち上がりかけ、マリーは今まで訊いたり思つていて訊きそびれていたことを口にした。

「ど、ど、つて、まあ色々だけど。

なにしろ暑さも寒さも痛みも特に感じないからビートでもたいして変わりないし。

昨日は酒場について変な奴らにからまれたんでつまみだしてやら、その主人に用心棒やつてくれつて懇願されて、暴れた奴を片つ端からにしてた。

店が閉まつたあとは大学院のあいてる部屋で寝てたよ

「ちょっと……危ないことばほめてよ」

マリーは眉間にしわを寄せてため息をついた。

「なんでだ？ 僕がどこでなにしてようと俺の勝手だ

「確かに、あなたはビートでなにしてようと勝手にすればいいわよ。だけど、この身体は私の最高傑作なんだから、傷つけられたり壊されたりしたら悲しいじゃないの！」

自由に行動したいならこの身体から出てからしてよ

怒りながらマリーが言つと、ハウエルズはにやりと笑つた。

「そのお願いきいたらマリーの魂俺にくれる？」

マリーは呆れて言葉も出なかつた。

額に青筋、口もとにはなまぬい笑みを浮かべ、ベンチから立ち上がると、そのまま歩き出す。

「あ、待ってくれよ！」「冗談だつて」

ハウエルズは慌てて言つと、マリーを追いかけてきた。マリーは立ち止まることもなく、そのまま歩き続けた。

今時間帯、たいていの上流、中流の家はティナーのはずだ。そのため、馬車も人影もまったく見当たらないので、来たときより楽に歩けた。

風もどんどん冷たくなつてきており、マリーは早く寮の部屋に戻りたかった。

が、後ろから肩をつかまれ、仕方なく立ち止まって振り返る。

「まだなにか用なの？」

悪いけど、今日はもう……」「……」

言葉は最後まで続かなかつた。

ハウエルズが後ろから強い力で抱きしめてきたのだ。

突然のことに、マリーは驚いて固まつた。

しかも、なぜか振りほどきたいとは思わなかつた。むしろ、彼の血の通つていないう体の冷たさが悲しく感じられ、温めてあげられたらとすら思つたのだ。

「さつきの話にでてきたある人のことだけど……」

耳もとでささやかれ、マリーはちこく震えた。

「お前のことだつて言つたらどうする？」「……」

「……なによ、それ

ハウエルズの告白に、マリーは泣きたいような、笑いたいような気持ちで言つた。

「もう、からかうのはやめて……」

「からかつてなんかいない……本心だ」

そう答えたハウエルズの声に、冗談や笑いめいたものは混じつていなかつた。

マリーは激しく打ちだした自分の心臓の音に困惑つた。

「で、でも私は……！」

「わかるてる。けど……そばこころへりにならいいだろ?」

「だめだ、とは言えなかつた。

(するいな……私。最低……)

マリーは自分に対して心底そう思つた。

アレックスが好きだと言つた舌の根もかわかないいつぱい、ずっと否定してきたハウエルズに対してときめいてしまうなんて。

それでも、ようどころを必要としていたマリーの心は、悪魔の言葉を受け入れた。

「……帰りましよう。寒いわ」

「それ、そばにいてもいってこと?」

「好きに考えていいわよ。

ほり、帰るんだから離して」

そう言つと、ハウエルズはすぐに離してくれたが、かわりに手を握られた。

マリーは驚いて、振り返つた。放してと言おうとして、ハウエルズの顔を見ると、何も言えなくなつてしまつ。

あまりに無邪気に、嬉しそうに笑つていたからだ。

マリーは慌てて彼から視線をはずした。

(なんだろう?

すごく頬が熱い……)

そのまま手をつないで歩きだす。

歩きながら、マリーはふつとほほ笑んだ。

こんな何気ないことが、ひどく嬉しくて楽しくて仕方なかつた。

結局のところ、自分をなぐさめるためにつくつたはずの『理想の恋人』が、本当の恋人になつてしまふのかもしれない。

ちょっと皮肉げにそう思いながら、マリーは悪魔と手をつないで、のんびり帰路をたどつた。

もうかなり暗くなつてきてくると、マリーはなかなか帰つてこない。

毛皮が裏打ちされた外套の前をかきあわせ、アレックスは憂鬱な気分になつた。隣ではクリスが足踏みしながら、少しでも寒さをやわらげようと奮闘していた。

アレックスは苛立つていた。

こんなことにならうとは、予想もしていなかつたのに。自分はいつたいなにをしているのだろう。それでも、この行動が間違つているとは思えないのが妙に腹立たしい。

かつて見た、悲しくつらい光景。

あんなものはもう一度と見たくないし、自分が同じ思いをするのも嫌だ。だからこそ、そうした事態を招くようなことはしまないと心に誓つてきたのだ。

完璧に閉ざしたと思つていた、封じこんだと思つていた感情を、マリーはいとも簡単にこじあけてしまつたのだ。

最初はその真っ直ぐなところに興味をおぼえた。それから、研究にたいするひたむきや、笑つたときの華やいだ顔などを見ていくうちに、引き返せないとこりまで来ててしまつていた。

マリーも自分のことを男性として見てくれているとわかつた時は嬉しかつた。好きだと言われたときに感じた幸福感は、たとえようがないくらいだつた。

だからこそ、彼女の誤解を解かなければならぬ。

アレックスはマリーを失いたくなかった。

正直、彼女が怒るのもわかる。アレックスは、自分の心を守るために、彼女にすいぶんとひどいことを言い続けてきた。彼女に甘えていたのだろう。

(マリーに謝つて……イーディスのことももちろんとけじめをつけよ

う。

のために、なんとか説得しなくては……）アレックスはさらに深みを増してきた夜のとぼつと、そこに無数に浮かぶ星のまたきをほんやりと見つめながらとつとめもなくそんなことを考へていた。

「……マリー、遅いですね。食事してくるつもりかな」クリスが鼻をすすりながら囁いた。

「そうかもしませんね。

でも、私はここで待ちます……クローネ君は、食事してきても構いませんよ？」

「……え、います。

「……なつたらマリーに食いものたかるんで、それにこんなに暗いんじや、ますます僕がいたほうがまじじゃないですか」

「それは……そうですね」

アレックスは苦笑した。

クリスの言つとおりだと思ったのだ。

アレックスはともかく、これ以上あのうわさに油を注ぐよつまねをすれば、マリーの名譽は地に落ちるだらう。それを黙つて見ていることは出来そうにない。

もしそうなつたとしたら、最後の手段に出るつもりはあつた。

アレックスが心のなかでこつそり決意を固めていると、小さな靴音が聞こえた。クリスにも聞こえたらしく、ふたりして音のした方を見ると、マリーがいた。腕に紙袋をふたつ持ち、驚いたのか目を丸くしている。

「あー！」

やつと帰ってきた！

クリスが呆れたような声を出し、マリーに歩み寄ると、袋のなかをのぞきこむ。

「お、生ハム買つて来たんだ。食べていい？
ていうか、待たせたんだからいいよね？」

待つてゐるあいだにお腹すいちゃつてさ」

「待つてた……つてなんで？」

「なにかあつたの？」

マリーは不安げな様子でクリスの顔を見て、それからアレックスを見た。

「まあちよつとね……それより中で話そうよ。寒くて寒くて」

クリスは大きく息を吐き出しながら言つた。

白いもやが一瞬ひろがつてすぐに消える。

学院の研究員と一部の助教授たちが寝起きする寮は、昔に学生寮として建てられたものを改装しただけであり、石造りでかなりの大きさがあるため、外にいると強い風に吹きさらされる。

その強さは、へたをすると荷物すら吹き飛ぶことがあるくらいだ。

「かまわないけど……火は入つてないから中も寒いわよ。

でも、クリスも教授も鍵持つてるんだから、中で待つてれば良かつたのに」

マリーは不思議そつに言いつつ、合鍵で外の扉を開けて、ふたりをなかに入れた。

「まあ、ちよつと事情があつてさ」

クリスはあいまいに笑つた。

「ふうん、そうなの」

マリーは良くわからないと言いたげにそうつぶやくと、うす暗い玄関広間を抜けて自室へ向かつた。

冷たい風にさらされないぶん、建物のなかのほうがましだった。

それから少し階段をのぼり、マリーは自室にふたりを招き入れた。あいかわらず殺風景な部屋の中をみまわし、アレックスは以前自分が持ってきた食料品の残りを見つけた。食べてくれたのだ、と思うとなんとなく安心できた。

マリーは買つてきた食料品をテーブルの上に置くと、小さな暖炉に火を入れた。

どのみち、すぐには暖まらない。

それでも、橙色の光が見えると、いそばくかはましに感じられた。
「それで……どうしてわざわざ入口のところで待つてたの？」

教授まで一緒に」

マリーが困惑したように言った。

アレックスは、彼女が自分のほうをあまり見ないようにしていることに気がついた。

「しようがないだろ？」

例のうわさをもつとあおるようなことは出来ないし、話をしようとすれば君はいきなりさらわれちゃうし……というか、大丈夫だったの？

あの悪魔になにかされてない？」

「平気よ？」

彼、話があつただけだったの……そんなことより、話をそらさないで

「そらしたわけじゃないよ……心配しただけじゃないか。

話つていうのは、リサのことだよ」

言ひながらクリスはテーブルの上の食料品をあさり、棚からナイフを勝手に取つて、ハムやチーズなどを勝手に切り取つて食べはじめてしまった。

マリーは何も言わないが、アレックスはいいんだろうか、と思つた。

「そういえば言つてたわね。リサになにかあつたの？」

でも、確かに今日だけじゃなくて、ここ一、三日姿を見てないわ
「うん、リサが……っていうか、ビックの方が困つたことになつて

て。

まあその辺のことは僕も教授に教えてもらつたんだけどさ「食べものを咀嚼して飲みこんでからクリスは言い、ちがひ、とアレックスを見た。

入口近くで、大きな体をちぢめて立っていたアレックスは、マリーを見ると、軽く咳ばらいした。

「今日、私のところに来客があつたでしょう？」

彼女は、ビック・ウエ斯顿の妹にしてね、そのことを伝えに来たんです。

この寒さのせいか、ビックは強い流感にかかつてしまつたとかで……。

ほら、彼はもともと肺が良くなないでしょ？
体力が持たなければ命が危険ということで

「……じゃあ、リサは」

「彼についていよとしたららしいのですが、うつってはいけないからと追い返され、顔も見せてもらえなかつたそうです」

その時のリサの心痛を思つと、アレックスは気が重くなつた。「と、いう訳でさ、明日一緒にリサのところに行かないかと思つて。学院はちょっと休ませてもらつてさ……まあ、僕らがいたところでたいしたことは出来ないけど、誰か側にいれば、リサも少しさは気分が違うだろ？」

クリスは肩をすくめつつ言った。

リサは今、おばの、氣難しい準男爵未亡人とともに、パティントンの町屋敷で暮らしている。それ以外のリサの家族は領地で暮らしていた。

「そうね、わかつたわ。

じゃあ明日行きましょう

「よし、決まりだね。

それを聞きに來たんだ……ねえ、もう少しもらつていい？」

言いながら食べものを指差したクリスに、マリーは苦笑しつつ、「

「いいわよ」と返した。

「……私も」一緒にさせてもらいます」

アレックスは、少し遠慮気味に言った。

すると、マリーだけでなく、クリスも目を丸くした。

「ビックは私にとつても大切な友人なんです」

言い訳じみた言い方をしてしまったな、と思いつつ、アレックスはふたりを見た。

「寄宿学校時代、同じ寮だつたんですよ彼とは、

色々面倒を見てもらいましたし、その逆に見たりもしました。子どもの時はお互いの領地にもよく遊びに行つていましたしね。

ただ、私が研究者になってからは会つていません。

それに、もしかしたら私も一緒に行けば、リサさんも彼の顔をひと目見るくらいは出来るのではないか、と……あ、いえ、ご迷惑ならば私はひとりで行きますが

「そんなことありません！」

もしそう出来たら、リサがどんなに喜ぶか

マリーは勢い込んで言つて、嬉しそうにアレックスを見た。

その表情を見たアレックスは、言つてよかつた、と思つた。

「それなら良いのですが……では、明日の朝、この寮の前で集まる、といふことで良いでしょつか？」

訊ねると、マリーとクリスは「はい」と返した。

「では……私はこれで失礼します」

アレックスはそう言つと、ふたりの返事を待たずに部屋を出た。少しずつ、少しずつでいい。マリーを傷つけたせいで出来た溝を埋めるには、きっと時間が味方をしてくれるはずだ。

寮を出て自分の部屋のある通りへ向かいながら、アレックスは考えた。

今、一番厄介なのは悪魔の入り込んだ自分そつくりのあの体だ。

そもそも、アレックスはああした存在を前にしたのは初めてなのである。

鍊金術、というある意味では正道ならぬ学問を研究する立場としてみれば、それは興味深い対象なのだが、個人的には邪魔で仕方ない。

それに、なにしろ存在の定義があいまいすぎる。例えエクソシストなどに依頼したとしても、本当に追い出せるのかどうかが分からぬ。

何しろ、とりついている体自体に魂が存在していない。それはつまり、侵入してくる存在に抵抗できる精神がない、ということである。

なにはともあれ、あの体から追い出せさえすれば良いのだ。

「……農はすでに仕掛けたことですし、後はどれに引っかかるか、しばらく見物させていただくとしましょう」

アレックスはひとり、暗い笑みを浮かべて通りへ出た。

大学院はパディントン市の最も東にあり、近くに市街地もないためとても静かだ。だから、こうして通りまで来ると空気がまったく変わってしまう。

人通りも増え、あらゆる階級の人々が入り混じる独特的の喧騒に包まれる。

このなかに、あの悪魔もひそみ、とけこんで、人々の魂を狙っているのだろう。

だが、マリーの魂を欲して大学院まで来た時が、奴の運の尽きだ

……。

無表情を装いながら、アレックスは心のなかで笑った。

マリーはひびくやりきれない思いでお茶のカップを口に運んだ。
「なんていうか、どうしようもないことって結構あるのね」「
本当だよ……僕もう帰ろうかな。

なんだか疲れた。徹夜したのと同じくらい疲れた～

クリスがうめくように言った。
彼はマリーのななめ前のソファにぐったりと寝そべっている。
時間はまだ正午の前だったが、マリーとクリスとアレックスは、
大学院の研究所がある棟の一階部分のラウンジで意気消沈していた。
昨日の約束通り、三人は朝、寮の前で集まり、リサの家へと行つ
たのだが、彼女はふさいで寝込んでおり、とても会える状態ではな
いと執事に告げられたのだ。

しかたなく、せめてビックの様子だけでもとウエ斯顿家の屋敷
もたずねたのだが、やはりウエ斯顿夫人もうつってはいけないか
ら、と会わせてくれなかつた。イーディスは何かの集まりに出でい
るとかでいなかつた。

どうしようもなくなつた三人は、結局大学院に戻つてきたのであ
る。

「申し訳ありません……何のお役にも立てなくて」

アレックスはうなだれて言った。

「いえ、教授が謝ることじゃないですよ。

こうこともあります」

マリーは慌ててそう言った。

こんなアレックスも初めて見る。いつも穏やかで、心の乱れなど
とは無縁に思える彼だが、こんなふうに落ち込むのだ……。

マリーはとにかく昨日のことを謝りたかつた。けれど、それはそ
れで自分勝手な気がして、自然と口が重くなる。

もつと、気がまぎれるようなことでも言って、この場の空氣をや

わらげたいのに。

「でも、少し困りましたね……」

「どうかしたんですか？」

クリスが少し興味がわいた様子で聞いた。

「いえね、もうじきクリスマスでしょう？

ふつう私たちは領地にある屋敷に帰つて、家族と一緒に過ごすものなのですが、中にはここにとどまる方々もいるんですね……そこで、タンブリエ伯爵末亡「人が、ささやかなクリスマス・ダンスパーティを催す」ということで、私も招待を受けているのです。

私も教授になつたことですし、みなさまに顔を覚えていただく良い機会かと思い、参加するつもりだったのですが……。

「ひとりで参加しちゃダメなんですか？」

「いえ、かまわないはずです。同伴者をともなつて、とは書いてありませんでしたし……ですが、私はどうも口下手で、社交界も久しぶりですし、そうだ！

こんな時に頼むのも気が咎めるのですが、マリー、一緒に来て下さいませんか？」

マリーはそれを聞いてお茶を吹き出しけた。

「…………わ、私ですか？」

「はい、予定があれば仕方ありませんが」

マリーはどう答えを返したら良いのか迷つた。

もちろん、予定など何もない。

全くと言つていいくほどだ。

家族にはクリスマスくらいは帰つてきて顔を見せて欲しい、と言われてはいる。

けれど、帰れば地元の人々や、独り者の貴族などや親戚が招かれていたりすることもあり、嫌でも顔をあわせることになるだろう。そういう人々のなかには、すでにホコリをかぶつているような過去の話をわざわざほじくりかえすのを好むひともいるのだ。

そんな場所に帰るくらいなら、ひとりで静かに過ごしたかった。

「……予定は、まったくありません……でも」

マリーは言葉をにじした。困惑してしまったのだ。

なにしろ、アレックスの真意がわからないのである。

「なにか他に不都合が？」

「……その、着て行くものがまずありませんし、お金もないですし……」

「そんなことなら大丈夫ですよ。

私が面倒なことを頼むのですから、必要なものがあれば言って下さい。

そうだ、これから仕立屋へ行つてドレスを注文し、他にも足りないものがあれば買つてしまよ。

どうせ今日は休むことになつてゐるのですから

満面の笑顔をうかべ、アレックスは言つた。マリーはさすがに何も言えなくなつてしまつた。ここまで言われてしまつては、断るにも断れない。

それに、とマリーは思つた。彼に謝る良い機会になるかもしれない。

何より、アレックスと一緒にクリスマスを過いでせるなど、夢のようだ。

それが嬉しくないはずはなかつた。

「わかりました。私でよければ一緒にさせていただきます」

マリーがためらいがちに言つて、アレックスは嬉しそうなずいた。

「良かった。ありがとうございます」

「いいえ、お役にたてれば嬉しいんですが、何しろ、もう一度と社交界には顔を出さないと決めてしまつていたので、作法とか、色々と忘れてしまつてなければいいんですけど」

マリーは、嬉しそうなアレックスを見て、少し申し訳なさそうと言つた。

「冗談抜きで、彼に恥をかかせてしまつたらと考へると怖い。

「はは、それは私にも言えることです。少しくらい不作法者がいても、クリスマスなんですからきっと許して下さいますよ。

「そうだ、クローネ君はこのあとどうしますか？」

「んー、僕はお邪魔だと思つんで、部屋に戻つて掃除でもします」クリスはふたりの様子に苦笑しながら答え、ソファから立ち上がつた。

それから、マリーの方を見てにやり、と笑う。

「うまくやれよ、マリー。じゃ、教授、また明日」

クリスはものすくなく楽しそうな顔でふたりを交互に見やると、そそくさと立ち去つた。

彼の言いたいことはわかつたが、マリーはいたたまれず、怒鳴るうと思つたら、クリスはもういなくなつてしまつていた。

ものすくない早さだ。その早さをもつと違うところに活かせばいいのに、と思うが、それを言つべき相手はもういないので、軽く唇をかむことくらいしか出来ない。

恥ずかしい。とにかくものすく恥ずかしい。

「では行きましょうか？」

なにともなかつたようにアレックスは言い、立ちあがり、手を差し伸べてくれた。その顔に浮かんでいる笑みが優しいものだったので、マリーは少し安堵しながら手をとる。

けれど、一応言つておかなければならぬことがあつた。
「……あの、私たち婚約者でもなんでもないのに、ふたりだけで出かけたりしていいんですか？」

さきほどからずつと気になつていたのだ。

こんなところを見られてしまつて、彼は困らないのだろうか？
だが、アレックスは軽く笑つた。

「なに、そんなに気にするほどのことでもないでしょ。もし悪いわざがたてられてしまつた場合は、ちゃんと責任をとりますから安心して下さい」

彼はほがらかにそつまつて、マリーの手を自分の腕にからめさせると、歩きだす。

マリーは想像もしていなかつた展開に、思考がついていけない。

責任をとる？

それはつまり、いざとなつたら結婚をするといつ意味にとつても良いのだろうか？

こんなふうにHスコートされる日がこよづとは、夢にも思つていなかつたというのに。こつたアレックスに何が起つたのだろう？

「あ、あの……教授！」

「……ふたりだけの時は、名前で呼んでもらえませんか？」

恐ろしく優しい声で言われ、マリーはますます混乱する。「で、でもまだここ院内ですよー」

何だか、アレックスがアレックスではないよづだ。ひとが変わつてしまつたみたいに感じる。

もしかしてこれは夢だろうか？

それとも、ハウエルズがいたずらでもしているのだろうか？

昨日までの彼と、あきらかに何かが違つてゐる。マリーは「いつたい何があつたの？」と問い合わせたい気持ちでいっぴになつた。

何があつたんですか？

と聞きたい気持ちで、マリーの心の中はいっぴになつた。

「……かまわないんですよ。もう、ね」

アレックスは晴れやかに笑つて言った。

マリーは、のどに何かがつかえたような感じがして、声を出せなかつた。

そのまま、アレックスに連れられて、ラウンジを出たと、院内を歩く。

今日のマリーは、いつもの研究員としての服装ではなく、地味なドレス姿だ。昔買ったオーソドックスな訪問着で、デザインは流行遅れになつてゐるもの、生地が美しく、マリーに良く似合つていた。

一方のアレックスも、オーバーコートを着て、ハットをかぶり、手にはステッキという一般的な服装だったため、学内をふたりで歩いていても、奇妙に思われることもないはずだ。

大学院は日によつては一般にも立ち入りが許可されており、今日はちょうどその日にあたるのも幸いだつた。

だが、そんなことよりも、マリーは今の状況が信じられず、心臓は早鐘をうち、頬が熱くてしかたなかつた。

誰に声を掛けられることもなく、学院の外に出たふたりは、しばらく通りを歩いたのちに、乗合馬車を見つけ、街の中心へと向かつたのだった。

大量の荷物とともにとともに部屋に戻ったマリーは、色々な意味で疲れ切っていた。

「楽しかったけど、大変だったな……」

つぶやいて、荷物を見つめる。

ここに持ってきたものは、「ぐ一 部で、大半はアレックスにあげてあつたり、まだ仕立てあがつていなかつたりする。それを思つと、なんだか頭がくらくらしてきた。

もう一度と、華やかだけれども、自由も尊厳もまったくないあの場所には寄りつくまい、と決めていたのに、結局アレックスの笑顔に負け、かなり色々と買いこんでしまった。

マリーは、催しなどに必要なもののほとんどは手放してしまっており、一応残したものも、父の領地にある実家に置いてきてしまつたので、いや舞踏会に出席するとなると、わざわざまなものが必要だつたのだ。

ボンネットに、傘、扇子、手袋、靴……無味乾燥だつた部屋のなかに、突然あふれたあざやかな色彩に、なんだか目がくらむ。特にドレスやガウンを選ぶときが大変だつた。

何しろ、ここじばらく流行のことなど考えたこともなかつたし、そもそも色やデザインで服を選ぶこと自体久しぶりだったので、すべて仕立て屋のマダムに聞かなければならなかつたのだ。

その際に、あなたはこんなに素敵なにもつたない、とか、こんなに美しいものを隠すなんて犯罪よ、などと、非常に恥ずかしいことを言われ、いたたまれなくてどうしようもなかつた。

しかも、アレックスまでもが、その通りですよ、本当に綺麗です、よく似合っています、などなどと世辞を並べるので、マリーはますます恥ずかしくて困つたのだった。

「今まで、私のほうがアレックスを振りまわしていると思つていた

けど、違う、違うわ。

絶対にそうよ。

私のほうが彼に振りまわされてる
ふいに、名前で呼ぶことが普通になつてゐるのに気づいて、マリーは赤面する。

こんなに簡単になじんでしまつとは、思つてもみなかつた。

マリーは小さくうめいて、荷のひとつに手をのばす。

それはとても小さな包みだ。けれど、中味はとても高価なもの。そつと紙を開いて、中から出でてきた箱を開けると、大粒のサファイアがきらきらと輝いた。

マリーは、身を飾るアクセサリーもひとつしか持つていない。
それも実家に置いてきたのだ。わがままを言つて大学院に入ったのだ。せめて、金銭面での迷惑はかけたくないという覚悟で、高価なものはすべて置いてきた。

だから、今マリーが持つているのは、真珠のネックレスひとつのみ。

祖母が贈つてくれた大切なものだから、これだけは手放したくなかったのだ。

そのことを告げたら、アレックスはさつそくマリーを宝石商のもとへ連れて行き、目の前で輝くネックレスとイヤリングを買つてくれたのだ。

マリーは買うことに反対したのだが、押し切られてしまった。

「さすがに、あとで返さないとね

そう言つたものの、返したら彼が傷つくなつとう氣もしていた。

だから、あずかついていてもらつ、と言つて返さう。それなら、また何かの機会にこれを借りつけられるだろうし、アレックスも受け取つてくれるはずだ。

「どうして、こんなことになっちゃったのかな。
すごく楽しそうだったし……少し前に告白してきたひとと同一人

物だなんて……とてもじゃないけど思えない

少し前まで、結婚はできない。だから婚約はできないがそれでも

いいか、と言つていたのに。これでは完全に婚約者扱いだ。

嬉しいといえば嬉しいのだが、納得がいかないのも事実だつた。

「とにかく、これは明日研究室に行くときに持つていって、あづかつてもらつの。私が持つてゐるのつて、なんだか怖いし

言つて、箱を閉じると、大きく息をつく。

澄んだ冷たい空気が肺に入りこみ、心と頭を冷やしてくれた。

「ハウエルズ……どうしてるかな？」

話をしても、手をつないで帰った夜から、彼は姿をあらわさない。なぜ知つていたのがわからぬが、彼はマリーが妙なうわさに困惑していることを承知していた。だから、一緒に寮までくることを拒んだのだ。

あの日の夜、マリーはハウエルズとともに、市場を見てまわった。雑多な階級のひとびとが、さまざまなものを売り買いしている場所。あのような熱気と喧騒のなかを歩いたのは初めてだった。珍しい食べものを買い、ひとびとの暮らしをまのあたりにしたことはマリーに新鮮な驚きを与えた。

そのときには、買った品物を置いた棚に目を向ける。

殺風景そのものだつたこの部屋に、少しずつものが増えていく。ほんやりとそれらをながめていると、ふいに胸が痛んだ。心を決められない弱い自分が嫌でたまらなかつた。

けれど、必要とされることの喜びは、たとえよのないほど魅力的だつた。今だけ、今だけだ。こんなことはこの先、もう一度となりだらう。クリスマスなのだ。少しだけ夢を見よう。ほんの、少しだけ……。

マリーは小さく笑顔をこゝれ、買つてきたものを整理はじめた。

クリスマス当日は家族だけで過ごすものであるため、舞踏会はその翌々日に開かれた。

マリーには、着付けを手伝ってくれるメイドなどの使用人がいないので、当日はアレックスの住んでる屋敷に招かれた。

久しぶりに淡いブルーのドレスに着替えて、つややかな赤褐色の髪を、流行のかたちに結い上げてもらひながら、鏡にうつる自分の顔が、こころなしか青ざめていることに気づいた。

やはり怖い。今からでも、行くのをやめようか。
けれど、ここまでお膳立てしてくれたアレックスを裏切ることはできそうになかった。

それでも、マリーはかすかに震えた。

首都からは離れたパディントン市だが、上流階級の集まりともなれば、知り合いに会わないとも限らないというのに。舞いあがつて失念していた自分を、マリーは心のなかでののしつた。

それでも準備を終えてエントランスホールに出て行くと、すでに準備のととのつていたアレックスが驚いたようにマリーを見た。注がれた視線にこもった感情は、否定的なものではなかったので、マリーはすこし安心して、軽々なうつくりと階段を下りていく。

すると、アレックスが慌てて階段を上ってきて、手を貸してくれた。

「すみません、こういう格好は久しぶりにするので……」

「いいえ、それより、すごく綺麗ですよ。……そのネックレスも、とても似合ってこます」

「あ、ありがとうございます」

首もとを見るアレックスの視線が、どこか熱を帯びているような気がして、マリーは頬が熱くなるのを感じた。思わず、ぎゅっと唇

を噛む。落ちつかなくては。舞踏会が終わるまでいいのだ。それまでは、平静さを失いたくない。いくら心がおどっていても、それを顔にだすのは、はしたないこと。それが上流階級。たとえ、今回のようにささやかな集まりであったとしても。

マリーはそのままアレックスにエスコートされ、用意されていた馬車に乗り込んだ。

タンブリーハウスはさほど遠くないので、会場へはほどなく到着した。

ひとりごとのざめきを耳にして、マリーの緊張は嫌でも高まる。馬車を降り、建物の中に入ると、想像していたよりも、多くのひとが集まっていた。

身なりなどからして、この周辺で暮らす地主階級や、将校たちもまざつているようだ。顔も知らなければ、名前も聞いたことのないひとびと。

マリーは少しだけ安堵した。

アレックスにつながされるまま、舞踏室に足を踏みいれ、主催者にあいさつする。

緊張のせいで、立つていられるか心配だったが、アレックスのためなのだから耐えなければ、と言い聞かせた。幸い、未亡人はマリーのことを知らず、ただ興味ぶかげな目を、扇子越しに向けてきただけだった。

それから会場に招待されているほかの主要な客たちへのあいさつまわり。それが終わると、マリーは心底ほっとした。

アレックスはマリーを気づかうように言った。

「疲れてしましましたか？ なにか飲みましょう。私が飲みものを持つてくるあいだ、こここの椅子にかけて待っていてください。もう少ししたらダンスもはじまりますし、せめて私と踊つてもらう体力は、残しておいて頂かないと」

そう言つてほほえむと、アレックスはどこかへ行ってしまった。

嬉しいのだが、色々と恥ずかしくもある。なにを言えばいいのか

混乱した頭で口をひらいたときは、彼の姿はもうなく、マリーはため息をついた。

「ああ、もう……アレックスってあんなひとだつた？」

小さくぼやいて、マリーは壁際にならべられた椅子のひとつにかけた。

なんだか落ちつぐ。

ここは基本的に「壁の花」と呼ばれる女性たちの雑談場所だ。そのため、ここを注意して見るものは少ない。なにはともあれ、最も大事なことは終わった。少し緊張もゆるみ、マリーはようやく落ちついて会場を眺めることができた。

さほど大きくはないフロアでは、いつダンス音楽がはじまるのか、と楽隊の方ばかり見ている若者たちや、雑談に興じているふくよかなレディたち、用意された食事にワインを楽しんでいる紳士たちが思い思いに過ごしている。

久しぶりに感じる空気だ。

マリーは顔をあげて、シャンティリアを見た。そのかがやきを見ると、懐かしさと痛みが同時にこみあげてくる。次いで、近くに置かれた、南国より取り寄せたと思われる色鮮やかな花々を見る。それらの花々は、どこか官能的で、かぐわしい香りをはなち、女性たちの香水の香りといりまじって、複雑な香気が会場を満たしていた。すべてがきらびやかな夢の世界のようだ。

それを眺めながら、ぼんやりしていると、ふいに声をかけられた。

「あれ、マリーじゃないか」

夢の世界から、一気に冷たい現実にひきずりもどされた、そんな気がした。

呆然とするマリーの前に、かつての婚約者、ハロルドが笑みを浮かべて立っていた。

彼に腕をからめてほほえんでいる女性がちいしゃへ会釈してきた。マリーも人形のように会釈をかえす。

「久しぶりだね。ここしばらくずっと姿を見ていないから、どうしているんだろうと気になっていたんだけど、元気そうで良かつたよ。ああ、知つていろとは思うけど、そういうれば会うのは初めてだつたね、妻のサマンサだ」

紹介されるまでもない。もちろん知つている。本当のところ、余うのが初めてとこつわけでもない。あいさつだけなら、したことがあるからだ。

サマンサは、きれいな金色の髪をかわいらしくシードンにし、淡いブルーの瞳をした、細身の女性だ。社交界では、もっととも称賛される容姿。さらに、彼女にはかなりの資産もあったから、持参金はかなりのものになつただろう。あの時、ハロルドには賭けでつくりた借金もあつたが、それですべて返済できたはずだ。

彼はあいもかわらず、身だしなみにはひとの倍は気をつかつているらしく、ブーツはぴかぴかで、服装も流行の先端をいくものばかり身につけている。

「はじめまして」

マリーは、早く立ち去つて欲しいと願いながら、礼儀を守つてあいさつをした。

「はじめまして。お話を聞いていたとおり、とてもきれいな方ね」「そんなことありません。奥様の方がずっとおきれいですよ」むりやりに笑顔をつくつて言つ。

ああ、苦痛だ。マリーは、やはりこんなところへ顔を出すべきではなかつた、と強く後悔した。

「いやいや、そんなことないよ。昔より、今のほうがきれいになつたくらいだ。

マリー、せっかく再会できたんだ。僕たちに、ちょっとしたつぐないをさせてくれないか？

あの時のことば、本当に申し訳なかつたと思つてゐるんだ。僕が、このサマンサを愛してしまつたばかりに。でも、君なら僕などよりもっと良い紳士と結婚することが出来るはずだよ？

こんなにきれいな女性を放つておくはずがないさ

よくしゃべる、とマリーは思つた。そういうえば、以前からそうだった。

彼はひとりで言いたいことをまくしたてて、マリーは黙つてそれを聞くだけだ。話しご相手、というより、ただあいづちを打つだけの相手。彼が欲しかったのは、そんな役割をこなしてくれるかわいらしい人形みたいな女性だつたのだから。サマンサはつづつつけだつたらしい。一度、反論を口にしてみたら、遠まわしに非難されたものだ。女性がそんなことを言つながらがましい、といつた意味合ひの……。

「やうですわね。マリーさん、わたくしに任せてくださいな。次のシーズンにはたくさんのお若い紳士方を紹介いたしますわ。わたくしは彼を選んでしまつたけれど、以前親しくしていただいた方とは、今は友人なんですよ」

「ああ、それがいいね。サマンサはとても顔が広いんだ。彼女に任せておけば、次のシーズンには、必ずいい相手を見つけることが出来るよ」

「その必要はありませんよ」

ふいに割りこんできた声に、マリーは地獄から救われたような心地がした。

ハロルドとサマンサの後ろに、シャンパンのグラスを持ったアレックスが、穏やかだが、どこか剣呑な笑みを浮かべて立つていた。

「マリー、待たせてしまってすみません。

……ところで、この方たちとは？」

「あ、はい。

「コーフ男爵に、レディ・コーフです。昔からの知り合いの……」

そう言つと、アレックスは片方の眉をはねあげた。
名前を聞いて、彼らが誰だかわかつたらしい。

マリーは、全身をこわばらせながらようすを見守った。

「ああ、そうでしたか。お会いするのは初めてですね。

アレックス・ハーストです。これを機会に、顔と名前を覚えていただけると嬉しいのですが

にこやかに、なめらかに言いながら、アレックスは手に持つてい
たグラスをマリーに渡す。名前を聞いたハロルドの顔に、ゆっくり
と驚きが広がっていく。

「あなたはもしや……なかなか社交の場に出でこないことで有名な、
あの……」

「そのようですね。有名になど、なるつもりはなかつたのですが」

「やはり！ いや、これは嬉しいな、こひらひそ、お近づきになれ
て光榮ですよ」

嬉しそうに言つたあと、ハロルドは怪訝そうな顔をしてマリーを見
た。

「それで、マリーとはどのようない関係なのでしょう？」

アレックスはその質問に眉根を寄せた。あまりにもぶしつけだと
思つたからだ。

マリーはひやひやして様子を見守っていた。

アレックスが気分を害したようなのが、とても気にかかる。当然
だ。こんなふうに、あからさまに詮索されて、気分を害さない方が
おかしい。なのに、ハロルドはその変化に気づかないのだ。それも

また、彼のもつ、いくつもの欠点のひとつだった。

「彼女は私の優秀な助手です」

アレックスが低い声で言うと、ハロルドの顔が、なるほど、とも言いたげな、あざけりをふくむ笑みにゆがむ。隣のサマンサも、まるで理解できない、異物を見るような目つきになつた。

マリーは、目頭が熱くなつてくるのを感じた。やはり、このような場所に来るべきではなかつた。ここ数年そうしてきましたように、静かにひとりで過ごしていればよかつたのだ。

が、次にアレックスが発した言葉で、マリーの心境が一変した。

「それに、大切な恋人もあります。

そろそろ婚約を、と考えているのですが、忙しくてなかなかまなりません。仕事が忙しいのは、鍊金術という学問が認められてきた、という意味でもあり、嬉しくもあるのですが、私生活を犠牲にしなければならないところが、つらいところですね」

あまりにも唐突な告白に、思わずグラスを落としそうになる。手もとを見ると、指が震えているのがわかる。

いま、彼は何と言つたのだ？

「あ、ああ、やはりそうなのではないかと思つていたのですよ。そうですか、いや、おめでとうございます。正直、彼女のことはずつと気にかかっていたので、これで幸せになつてくれると思つて、僕も嬉しい。……良かったね、マリー」

「あ、ありがとう」

マリーは、気力をふりしぼって精一杯幸せそうに、ややはにかみながら、ほほえんでみせた。だが、ハロルドの目は全く笑つていなかつた。むしろ、苛立つていて、マリーは気がついてしまつ。けれど、そんなことはどうでも良かつた。

サマンサの祝福の言葉も、ほとんど耳に入つてこない。機械的に会釈をかえし、お礼を述べるが、何を言つたのかもよく覚えていない。

その時、楽隊が音楽を奏ではじめた。ハロルドとサマンサは、ダ

ンスのためにふたりから離れていた。離れていくとき、ハロルドは小さい声でつぶやいた。

「まあ、色仕掛けでもしたのだろうね。でなければあんな大柄で、頭の中に聖書でもつまっているような女、彼が相手にするはずもないわ」

小声だったのに、聞こえてしまつた。

マリーは落胆した。彼は、なにひとつ変わっていないのだ。結婚することにならずに済み、良かつたとは思う。だが、彼の放ったナイフのような言葉が、マリーの心に残した傷は、決して消えることはない。そう考へると、出会つたことじたいが、不運だつたのだと感じた。

「彼の言つたことなど、何ひとつ真に受けることはありません。君は私を誘惑してもいないし、とても美しいのですから。ほら、他の男性たちを見てみるといいですよ。君にダンスを申し込みたくて、こちらをうかがつている紳士が大勢いますよ？」

言われたとおりに顔をあげ、フロアを見渡してみると、何人かの独身男性とすぐに目があつた。慌てて目をそらし、シャンパンパンを口にふくむ。なぜかひどくのどが渴いた。

「ああ、あまりたくさんは飲まないでくださいね」

「どうしてですか？」

「酔つてしまふと、踊るのが大変になるでしょう？」

せつかく舞踏会に来たのですから、ぜひ、私とワルツを踊つてください」

その言葉に、マリーは頬が熱くなつてしまつた。

もうずっと、ワルツだけではなく、ダンスを踊つていない。そもそも、マリーを誘うような男性自体がいなかつたのだ。

嬉しさと不安の入り混じつた目でアレックスを見ると、彼は優しくほほえんでくれた。

「実は私、この日のためにダンスの特訓をしてきたんです。せつかくがんばったのに、特訓の成果がむだになるのは悲しいので、どう

か……」

穏やかに懇願されると、マリーの心は明るくなつた。断るつもりはもともとない。けれど、ドジを踏んで、迷惑をかけたくなかつたのだ。けれども彼のほうも、あまりダンスを踊りなれていないと云う。それならば、あまり気に病むことはないかも知れない。

マリーは、半分ほど干したグラスを、近くのテーブルの上に置いて立ち上がると、アレックスに向かつて、ほほえんだ。

「私などで良ければ、よろこんで」

アレックスは嬉しそうにマリーの手をとり、甲に唇を落として「ありがとう」と言った。マリーは心まで躍りだしそうな気分になつた。

ふたりはぎこちなくダンスフロアに足を踏みいれ、ゆっくりと、まわりの邪魔にならないような位置で、ダンスを楽しみはじめた。特訓した、というだけあり、アレックスのリードは、マリーの不安をとりのぞくことが出来るほど、ゆるぎないものになつていた。

久しぶりの空氣に気分が高揚する。

最初のダンスを終えて、もといた場所に戻ると、マリーのもとへ、ダンスのパートナーになつて欲しいと申しこむ男性が殺到した。ほとんどが若い独身男性であり、驚きと困惑のなかでアレックスを見ると「楽しんできてください」と言われたので、ちょっと戸惑いながらも、彼らと踊ることに決めた。

幸い、相手の足を踏みつけるようなこともなく、マリーは、自分の体がステップを覚えていてくれたことに感謝した。途中で休憩や軽食をとりながら、ふたりは舞踏会を楽しんだ。アレックスのほうも、何人かの女性と踊つたようだ。アレックスは誰に対しても穏やかに接し、マリーはそれにかすかな不満を覚えながらも、それすら舞踏会の熱氣にのみこまれて、夜は更けていった。

やがて、パーティもお開きになり、楽隊が片づけをはじめた頃、ふたりは館を辞して帰途についた。

乗り込んだ馬車の中。

まだ興奮を引きずつて、頬の上気したマリーを見ながら、アレックスは切り出した。

「その、あのよつな場所で、突然の告白をしてすみませんでした。驚いたでしょ？」

「あ、はい。驚きました……突然だったこともありますけど、それ以上に……」

マリーがなお、言葉をつづけようとするのを、手を上げてやさしきり、アレックスは息をついた。

馬車の中は暗く、互いの顔が良く見えない。マリーの口には、今アレックスがどうこう表情を浮かべているのかは、まったくわからなかつた。闇に浮かびあがる、アレックスの白い手袋を見て、少しでも心境を読み取ろうとしてみた。けれど、やはりそれは不可能なことだつた。

「……そつだつたろうと思ひます。正直、いきなり意見を変える気になつたことには、私自身が一番、驚きました。でも、あれは、本当の気持ちなのです。

正式には、由を改めてきちんと言ひますが、私は、あのとき、あなたに？なかつたことにしょ？と言われて、とてもつらかつた

「……ごめんなさい」

「いいえ、謝らなければならぬのは私のほうなのでですから、あなたには怒られても仕方ありません。ですが、さつき言つたことは、本当の気持ちです……信じてください。

私は、あれから、自分の気持ちを整理してみたのですが、結論としては、過去にとらわれつづけることせ、悪なのではないか、と感じたのです

「過去……」

マリーはつぶやいた。それは、ずっと気になつていたことだつた。彼は、昔になにかつらに経験をしており、そのため人に愛することに抵抗を抱いていたのではないか。マリーはそう考えていた。

本当は、聞いてみたい。けれど、変な聞き方をしたら、傷つけてしまつような気がして、聞くことが出来なかつたのだ。

「そうです。過去は、変えられません……けれど、これからは、自分の努力しで、優しくてあたたかい未来をつくることができるのだ、とようやくわかつたんです。

そして、その試練に立ち向かうとき、私は、あなたに側について欲しい。

「他の誰でもなく、あなたに、マリー……」

暗がりから、アレックスの手がのびてきて、マリーの両手をそつと包んだ。ふたりは、向こあわせに座つてゐる。すぐ近くで、アレックスが深呼吸したことに気づかないわけにはいかなかつた。

マリーの心臓は、いまにも口から飛び出しそうなぐらにどきどきしていた。

「私と、結婚してくださいませんか？」

少し震えた声で、彼は言つた。

まるで、乞い願うような声で。

マリーは心臓がとまつそつになつた。落ちつかなければ、と思つて、息をおおく吸おうとするのに、のどが震えて、うすく吸えない。

それは、一生聞くことのない、マリーには縁がないと思つていた言葉。

知らず知らずのうちに、マリーの頬を、涙が伝つ。

「……泣いているんですか？　だめならばダメと、ほつきつ」

「いいえ。違うんです……ただ、嬉しくて」

それ以上は、のどがつまつて声にならない。

「……それは、肯定の言葉と受けとつてもかまわないんでしょう？」

「はい」

涙声で、かすれてはいたが、マリーは必死にそれだけ言つた。涙がとまらない。早く止めなくては、館についてしまう。マリー

は、懸命に田もとをねぐつた。

「使つてください」

アレックスが、そつとハンカチを渡してくれた。マリーは感謝しながらそれを受けとつて、涙をふいた。そうしているうちに、馬車は館に到着する。今夜は、このまま館に泊まつていくことに決まつていた。やがて、御者が下りる音が聞こえ、扉が開けられる。

馬車を降りてエントランスホールに入ると、アレックスが言った。「あの、よろしければ、明日すぐに戻つてしまわずに、しばらくここに滞在していきませんか？

色々と話もしたいですし、一緒に、新年を迎えたなら、嬉しいのですが

「でも、ご迷惑ではありませんか？」

「平氣ですよ。前にも言つたとおり、この館の持ち主は、私の姉の夫なのです。彼らは、冬の間はまず戻つてきませんし、私はなにかを催したりしないので、部屋もほとんど開いているのです。使用者たちも、世話しなければならないひとが、ひとり増えんくらいはどうといふこともないでしょうし……」

アレックスの声がすこし弾んでいる。マリーは少し氣後れしながら、その申し出を受けることにした。

こんなことがあつた後、寮の部屋で、ひとり過ぐすのはあまりにも寂しい。それに、サラビックのことも気になる。寮より、こちらのほうが、彼らの暮らす館に近いから、様子を見に行ける、とう思いもあつた。

クリスのことは気にしていない。彼は、いつも新年を研究員仲間と酒を飲んで騒いで過ごすのだ。

「じゃあ、よろしくお願ひします」

マリーが言うと、アレックスは心から嬉しそうに笑つて、「良かつた」と言つたのだった。

翌日、マリーはアレックスの暮らす館をおどされた客人に腹を立てていた。

その客人とは、リサとビックだ。

「もう！ 私は本当に心配したのよ！」

「だから、『めんなさい』てば。でもね、あなたを舞踏会に引きずり出すには、これしかないと思ったのよ。教授つてばなかなか動かないし、ビックと相談して、ちょっとしたお芝居をすることにしたのよ」

謝りながらも悪びれずにリサは言った。

ビックはそのとなりに、どこかすまなさうに、けれど少し楽しそうに座っている。マリーは彼を恨めしげに見た。茶色い髪に、纖細そうな顔立ち。どこかあどけなさも残しており、保護欲をかきたてる。妹のイーディスとは、あまり似ていない。

「ウエストン卿までこんな悪ふざけに加担するなんて……あなたに対するイメージを書き変えないといけなくなつてしまつたわ」

マリーが疲れたように言つと、ビックは明るく笑つた。

「はは、そうかもしれないね。でも、僕らは良かれと思つでしたんだよ。

実際、結果はご覧のとおり、そうだろう？ アレックス

問われたアレックスは、肩をすくめた。

「まあ、心配して訪ねたのに、元気に仕事している姿を見たときは頭に来ましたけどね。

それに、最初に話を聞いたときも、なんだか騙すみたいで、あまり気がのらなかつたのも本です。けれど、話を聞くうちに、良い機会だとは思いましたし、ぼやぼやしていると、いつまでも行動を起こせなかつたといつのは事實だったもので……申し訳ありません、マリー。

ですが、よくイーディスまで騙せましたね？

「なに、イーディスは僕が体調を崩すといつも、いつのを恐れてすぐにおばさんの家へ行ってしまうからね。母と主治医と使用人たちに協力してもらつだけで、すぐに騙せたよ」

「いい気味よ。私、どうしてもあのひとだけは好きになれないの」リサは鼻を鳴らして、あっけらかんと言つた。

マリーはびっくりした。リサが、自分の婚約者の家族をそんなふうに言つなどとは、思つてもみなかつたからだ。畳然として彼女を見ていると、リサはいたずらっぽくほほえむ。

「騙したことで、嫌な思いをさせたなら」「めんね。

でも、私たちはふたりの幸せを思つてやつたの。それだけはわかつて」

「それについては疑つていないわ

マリーはリサのほほえみに苦笑しながら囁つた。

「だけど、ふたりがいたずら好き、といつることもわかつたわ。だから、これからは用心をせてもひりひりとするわね」

「ちょ、ちょっと、マリー！」

「いや、彼女の言つとおりだよ。用心しておいた方がいい。そのついで、君たちをまた罷にはめられるか、方法を考えてみるとよい。寝込んだときの最高のひまつぶしだ！」

ビックはそう言つて、心から楽しそうに笑い声をあげた。

まじなくして、リサとビックは帰つて行つた。

マリーは、心のつかえがひとつれたことを喜んだ。
もうひとつは、ハウエルズのことだ。それだけが、ずっと胸に刺
さつてとれない。

しかし、マリーは、決してそれを表には出さなかつた。
アレックスが嫌がりそうな気がしていいたから。

そのおかげか、マリーはアレックスと、屋敷の使用人たちとともに、穏やかに新年を迎えることができた。市街には雪がたくさん降
り積もり、ひとびとは屋内で暖かく過ごし、用のあるひとだけが、
体をぢぢめて外を急ぎ足で歩いていた。

マリーは久しぶりに、寮の部屋以外で新年を迎えられ、自分で自分
の世話をせずにすみ、あたたかく、ゆつたりと過ごすことが出来
て幸せだった。

アレックスはといえば、性急にことを進めたくない。まずは、マ
リーの父であるヘイスティングス卿にあいさつしてから、数年のう
ちに正式に結婚したい、と語つた。マリーも、まだ研究に少なから
ず未練が残つていたため、その案に心から賛成したのだった。

そうして、アレックスのすすめもあり、結局十日ほど屋敷で過ご
したあとで、マリーは寮へ戻つた。

学院内の通路には、ここしばらくのあいだに降つた雪が深く積も
つてゐる。真ん中だけ、管理人が雪をかいたあとがあり、マリーは
そこを通つて寮へ向かつた。

この時期、たいていの学生たちは例外をのぞいて帰郷してゐるた
め、どこもかしこも閑散としているが、マリーはこのときの学院の
雰囲気がとても好きだった。

アレックスは寮の入り口まで送る、と言つてくれたのだが、マリ
ーはあえて断つたのだ。この静けさのなかを、ひとりのんびりと歩

きたかつたから。街の中と違つて、さほど危険なこともない。そう言つと、アレックスは残念そうにマリーを学院の入り口に置いて、帰つて行つた。そのときの表情を思いだしたら、なんだかおかしくなつてきて、マリーは思ひ出し笑いをしてしまつた。

歩きながら、考える。

いつか、結婚をしたら、どうするのか。研究をとるか、家をとるか。アレックスは特に訊ねてこなかつたが、マリーは一二数日、そのことばかりを考えていたのだ。

なんとなく、アレックスは研究を続けてもいい、と言つてくれそういう気がした。けれど、本当に結婚すれば、子どもが出来るかもしれない。それだけならともかく、親類縁者との付き合いも発生するだろう。と、いろいろ考へるひつり、ゆづりになつてきてしまつた。マリーがいつたん寮に戻りうつと思つたのも、頭を冷やして、気分を切り替えたかつたからだ。

学院がいつもどおりに業務をはじめるまで、屋敷にいても良かつたのだが、とりあえずは、ひとりになりたかつたのである。

「ちょっと、自分勝手だつたかな」

白い息とともに、思いも吐きだす。

ちょっとだけ、うしろめたい。

だからといつて、アレックスが好きだ、という気持ちに変わりはない。出来るなら、一緒に過ごしたいのだ。だからこそ、この十日間は、ほんとうに、ただ幸せだった。誰かといて、こんなにも穏やかな気持ちになれることがあるなんて、知らなかつた。まあ、マリーからすれば、いろいろと物足りなくはあつたのだが。

アレックスは、きちんと結婚してから、と言つたが、婚約段階ですでに男女の関係になつてしまつカップルはたくさんいる。と言つても、話に聞いただけだが。そつだとしても、キスのひとつもしたつていいような気がする。

ふいに、リサの顔が浮かぶ。

彼女だったら「自分からやつちやいなさいよ」と、実に楽しそう

に言つだらう。

それもいいかもしない。

そう思いながら、表面が凍つてざわざわ音をたてる雪を踏みしめて、寮の中へと入った。

ラウンジは少し散らかっていた。ここに残った研究員たちが、ここで新年を祝つたり、酔つ払つて騒いだのかもしれない。もう開けてずいぶん経つのに、まだどんちゃん騒ぎし足りないようだ。それを見て怒る管理人の顔が目に浮かぶ。

マリーはくすくす笑いながら、浴室へと向かった。

やがて、部屋へたどりつくと、浴室の戸がうつすらと開いていることに気づいて立ち止まる。おかしい、鍵はちゃんとかけてきたはずだ。寮の部屋の戸には、すべて鍵がつけられている。もうもろの犯罪を防止するためだ。良く見ると、鍵が壊れて、戸の取っ手にぶら下がっているではないか。

「……ちよつと、やだ」

マリーは怖くなつて、足音を立てずに後ずさる。なかを確認したいが、ひとりでは恐ろしい。

とりあえず、クリスを探して来よう。もし彼が、どこかに出かけて、部屋にいなければ帰つてくるまで待つていよう。そう決め、マリーはクリスの部屋へと急いだ。

幸い、クリスは部屋にいた。聞き取りにくいう声で、なごごとか言いながら出てきた彼は、やたらと酒臭い。ラウンジでの酒宴に加わつていたのだろう。

マリーはクリスを、ほとんど無理やり引っ張つて部屋へと戻つた。「考えすぎだよ。だいたい、侵入者がいたとしても、もういなくなつてるつて」

ものすごく迷惑そぶりに田舎をこすりながら、クリスはあつさつと部屋の戸を開けた。

マリーは彼の背中にじて部屋の中をのぞきこむ。

「だ、誰かいたりしない？ 荒らされてたりは……」

「どにもなにも落ちてないし、動いてもずれてもないよ

不機嫌な声で、クリスはベッドを指差した。
見つめてから、振り返る。

「……侵入者つてさ、彼のことなんじやないの？　君の最高傑作の
や」

半分寝ているような顔で、クリスはベッドを指差した。
マリーはクリスの言葉に仰天し、あわてて部屋の中に入った。彼
の言ったとおり、ベッドに横になっていたのはハウエルズだつた。
眠っているのだろうか。悪魔に睡眠が必要だなどとは知らなかつた
が、ともかくもほつとした。

「ああ、もう、心配して壇したじゃない。

ねえ、ちょっと、起きてよ、なんでここにいるの？」

マリーはため息まじりに言つて、寝ているハウエルズの顔を一、
二回、軽く叩いた。ちいさなうめき声があがり、ハウエルズが目を開ける。じばらぐねほんやらとしていたが、マリーの存在に気づくと、力なく腕を上げ、何か言おうと口をぱくつかせる。

マリーはかすかに異変を感じとり、彼の全身をじっくりと見た。
やがて、異変の正体を知ると、血の気がひいた。

「なに、これ……どうしてこんな」

ハウエルズの腕や足には、まるで細長い焼きじてを当たのような、
赤いあとが無数についていた。それらすべてが、古に文字のかたちをしており、ツタがからみつくように、全身をめぐつている。

「ああ、やつと引っかかったんだ」

すると、背後から明るい、どこか面白がつてこいるような声がした。
マリーは勢いよく振り向いて、探るような目つきでクリスをにらむ。ひつかつた、とは、いつたいどういう意味なのか。

「あれ、教授に聞いてないの？　僕ら協力して、少し前だけど、学院のいろんなところに、対悪魔用の罠をしかけたんだよ。悪魔学科のひとたちに手伝つてもらつてさ」

「……どうして？」

マリーは怒りをこめて問つた。心臓のあたりが痛くなるような怒

りがわきあがる。そんなマリーを見て、クリスは意外そうに首をかしげた。

「どうして、なんて聞かれるとは思わなかつたな。むしろ君が一番、そいつのこと捕まえたかったんじゃないの？」

マリーはうつむいた。そう、それに間違いはなかつた。

こんな姿を見るまでは……。

もちろん、この体がもじるのなら、それはマリーにとっても本望だ。

なんといっても、この体そのものが、マリーの内面や願望を、あからさまに形にして、現実世界に公表してしまっているようなものなのだ。この体が動いた姿を見て、マリーはそのことに気づいたのだ。

遅いといえば遅いが、制作中は夢中で、自分の思いつきに酔つてもいた。

だから、戻つてくれるのは、本当にありがたいのだ。
けれど、こんなやり方は、いくらなんでもひどい。

マリーはなんだか裏切られたような気分だった。

「確かにそうよ。でもこれはなに？ こんなに傷つけて、痛めつけて、苦しめてまで、私がこの体を取り戻したいと思うの、そんな訳ないじゃない？」

「ああ、そつか。体に傷がついたらことは想定外だつたな。それは良くなかつたね、でもまあ、教授も熱くなつてたし、仕方ないよ。許してあげなよ。君が悪魔にたぶらかされるんじゃないか、つて心配してたからそこまで気が回らなかつたんだよ」

クリスは肩をすくめ、あぐびまじりに言った。マリーは、違う、と思った。そんなことに怒つていいのではない。そう思った瞬間、マリーは自分の思いに気づいた。クリスの言葉が胸に突き刺さる。抱える矛盾が、浮き彫りにされてしまった。

「だいたいそいつ、悪魔だろ？ ひとを墮落させて、混乱におとしいれて楽しむようなやつらなんじゃないの？ それにゃ、少しくらい痛みを感じたんだとしても、どうせ不死身なんだし、気にするこないんじゃない？」

「不死身……悪魔」

「マリーはつぶやいて、顔をしかめているハウエルズを見た。そうだ、おかしい。なぜ、彼はこんなになつてまで、この体から出て行かないのだろう。体から出て行つてしまえば、こんなに苦しむことはないのに。不死身なのだとしたら、傷もすぐに治るはず。」
「そうだよ、今チャンスじやん。その体から、そいつを追い出せるかもしれないよ？」

寮に残つてる悪魔学科のやつ探しでさ」

言いながら、クリスはおおきくあぐびをした。

「もう戻つていいかな？ まだ眠いし、そいつもしばらくは動けそうにないから、少しの間くらいいこなぐても襲われたりしないだろ？」

「あ、ああ、そうね」

考え込んでいたマリーは、クリスの声に我にかえると、急いで言つた。クリスは「それじゃ」と言ひて、さつさと自室へ戻つて行つた。その足音が遠ざかるのを確認して、マリーは息をつく。少し落ち着くと、イスを持つてきて、ベッドのかたわらに置き、腰を下ろした。

荒い息をするハウエルズの顔に手をのばす。そつと額に触れるとい、マリーは気づいた。

「そんな……うそでしょ？」

つぶやいて、自分の指先を見つめる。「くわづかながら、水分がついていた。

しかも、触れた額はほんのりと熱を帯びていなかつただろうか。そうだ、良く考えてみれば、彼がこんなふうに痛がること自体がおかしい。クリスが先ほど言つたように、悪魔はおそらく不死身であり、痛覚などないはず。なのに、ハウエルズは苦しんでいる。

マリーは意を決して、てのひらで額に触れてみた。熱い。「うそではない。体温がある。これではまるで、人間みたいではないか。

うめき声をあげ、マリーは混乱する頭を抱えながら、とりあえず、手ふき用の布をいくつか持つて、部屋を出た。頭を冷やしたい、い

や、冷やさなければ。ついでに、マリー自身の頭も冷やしたかった。
今はとにかく、ハウエルズの体の痛みをやわらげてあげることが
先決だ。

彼が話の続きを状態にならなければ、何があったのか、問い合わせ
すことも出来ない。

マリーはため息をつきながら、看病をはじめた。

痛みと執着

つめたい手が、やせしく肌に触れる。この体に入ったときから、それだけは感じられていた。最近は、それが温度をともなうように変化してきていることに、ハウエルズは気づいていた。

痛みも、感じるようになつてきている。悪魔といえども、体や魂が傷つけば、痛い。

だから、痛い、という感覚は知っている。

しかし、それが長時間つづくというようなことはなかつた。

（そのせいだらうな、あんな単純な罠に引っかかるなんて……）

いつかは何か仕掛けてくるだらうとは思つていたが、こんな簡単な罠だとは。

簡単すぎて、逆に見落としてしまつた。

罠、と呼べるようななしろものではない。

あの教授とその助手がしたことは、研究所のあらゆるドアノブに神の言葉を記した細長い紙を張り付けたり、小さな十字架を飾れるところすべてに置いておいたのだ。

ハウエルズがそれらを避けて行くと、マリーの個人研究室にたどりつく。そこに、悪魔の魂を焼く魔法陣が描かれていたのである。灰色の石の床に、薄い、とても薄い黒で。簡単には消えないよう、石油分を含んだインクを使っていたから、マリーが気づかずに歩きまわつてもそうそう消えることはない。

おそらく、彼女は知らなかつたのだ、とハウエルズは思った。思いこもうとした。

ただ、ハウエルズ自身が、信じたかつただけなのかもしれない。マリーなら、自分を傷つけるような真似はしないだらう、と。そう思つて、個人研究室に逃げ込んだのだ。

そして、ハウエルズは罠にかかつてしまつた。

彼女なら、体を返して欲しければ、真っ向から話し合いで決着をつけようとするはずだ。そう思っていたから。けれどもし、そうでなかつたとしたら……？

それを思つと、つらかつた。

自分のなかに生まれてしまつた人間のこころが言つ。もじこんなことを本当にしたのだとしたら、彼女の大切にしているものすべてを傷つけてやる。ここが手に入らないのなら、その命と体だけでも、むりやりに食らつてやる。

だからこそ、ハウエルズはふらつく体でここまでやつてきた。

暗い情念に、身も心も焼かれてくるような気分で……。

ハウエルズは、もうううとする意識のなかで、ゆっくりと目を開けた。

視界はぼやけている。少し前から、体の表面を冷たいものがなでていく。なでられることに、痛みがほんのわずかやわらいだ。ふしぎに思つて、ぼやけた視界のなかに理由をさがす。

「あ、気づいたのね？ 今、傷に効く軟こうを塗つてるから、じつとして……もしかしたら、しみて痛いかしら？ でも、我慢してね」

やわらかな、ハウエルズにとつて甘やかにひびく声がした。

「……マ、リー？ 聞き、たいことが

「後でね。もう少し、熱と痛みがひいてからじゃないと」

ハウエルズは、たまらなくなつて痛む体を起こした。視界が少し晴れてくる。額から、濡れた小さな布がぽとり、と落ちた。それには目もくれず、ハウエルズはマリーの二の腕を強くつかんで、問う。

「あれを、知つてた……のか？」

「なんのこと？ あれ……つてなに？ そんなことより、今はまだ

起きちゃ……」

「魔法……陣のことだ」

ハウエルズは荒れた声で、マリーの言葉をさえぎるよつて言つた。すると、マリーの目に理解の色が浮かんだ。

「私は知らなかつた。さつきはじめて聞いたの。

私は、私だつたら、こんな方法は選ばないわ。

さあ、休んで、まつたく……悪魔を看病することになるなんて、

夢にも思わなかつたわ」

マリーははつきりと言つた。

信じてもいいのだろうか？

そんな思いがよぎつたものの、それ以上は思考が続かない。
ふたたび横になると、ハウエルズはマリーの手を握つた。
マリーは、びっくりしたような顔でハウエルズを見る。

「手、握つても、いい？」

そう訊ねると、マリーの頬に赤みがさす。彼女は困惑したよう、口のなかでなじごとかつぶやいていたが、やがて諦めたように言つた。

「いいわ

その答えに、ハウエルズは満足して目を閉じる。

痛みと冷たさばかりが満ちていた感覚のなかに、あたたかさと安心がまざりあう。ああ、これが安心する、という感覚なのか、と思いつながら、ハウエルズはふたたび意識を手放した。

マリーはハウエルズの寝顔を見ながら、どうすればいいのだろう、と考えていた。

彼はどんどん人間に近くなってきた。最初のころは、眠りすら必要としていないふうだったのに。今では、こんなにも無防備な寝顔をさらしている。

こんなことが、起こるものだとは、思いもしなかった。

「……このまま、ハウエルズが人間になっちゃったら、どうなるのかな」

ぽつり、とつぶやいてみて、マリーはため息をついた。

悪魔が入り込んでしまったとはいえ、この身体は自分が生み出したものだ。作った時は、しばらく眺めて過ごし、やがて体が朽ちたら、どこか迷惑にならない場所へ、夢や望みや嘆きや、その他、もうもろひの苦しい感情とともに、埋めてしまおうと思っていた。

けれどもし、彼が生きてしまったら?

それは、そもそもどういう存在になるのだろう。

どういつ定義の上に成り立つ生物になるのだろう。

マリーも、悪魔について調べたことはあるものの、何から何まで詳しいことはわからないことだらけだ。とにかく、細かいことに付いては、ハウエルズ自身に聞くのが一番良いだろう。けれど、彼が回復するのにはもう少しかかりそうだ。

その間は、図書館でいろいろと調べてみよう。

そう決めて、マリーは複雑な気持ちを押しこめた。こんなふうに、元気な普通の人間みたいに、弱っている姿を見ると、じろじろが動いてしまう。

う。

アレックスは、決して弱いところを見せようとしない。

そんな彼を、愛しているはずなのに、こんなにも気持ちが引き裂かれるのはどうしてなのだろう。そんなことが頭につかび、マリー

は激しく首を横に振った。思考がやや混乱しているいま、そのことについて考えるのは良いことではない。

いまは、ハウエルズに回復してもいいこと。そして、彼自身がどうしたいのか聞くこと。

そのこと以外は、考えても無意味だ。

そうこころを決めた後、マリーは戸のほうに手をやって、血の気が引いた。鍵が壊れたまま。あのまま放置していく、もしも、誰かが訪ねてきたら困る。それがアレックスだった場合は……。

けれど、いまはここを動けない。ハウエルズの手を、放すことなど出来ない。

マリーは祈った。せめて今日一日だけでいいから、いや、ハウエルズが目覚めるまでいいから、誰も訪ねてきたりしませんようこと。

それから約三時間後にハウエルズが目覚めるまで、マリーはやきもきして過ごすはめになってしまったのだった。

ハウエルズの意識は戻り、少し安堵したものの、まだ痛みが強そうだった。

動かすことは当面のあいだ出来そうにないが、鍵だけは直しておかなくてとは、マリーは思った。鍵が壊れたままでは、安心して部屋にいられない。

そのため、少しの間だけ隠れてもいいことにした。マリーは急いで管理人のおじさんを呼び、すぐにつけなおしてもらつた。管理人のおじさんは、酔っ払いが壊したみたい、という言葉を、すんなり信じてくれたので、マリーはとりあえずほつとした。

「じゃあ、ちょっと図書館に行つてくみけど、じつとしてるのよ?」

「はいはい、行つてらっしゃい」

ベッドの上からひらひらと手を振り、ハウエルズは笑つて見せた。マリーは、ため息をついて、直してもらつたばかりの鍵をかけて外に出た。

外に出ると、マリーはつめいた。

「ああ、今夜どうじょひ」

時間は午後である。帰つて来てから、ずいぶんと時間がたつてしまつた。

別の思索についてやせうと思つていた時間が、すべてつぶれてしまつた、と思ひながら、マリーはすべつて転ばないよう、静かに歩いた。

図書館は、学院の建物のなかにあるのではなく、まったく別の建物である。古い離宮を改装してつくられた学院の本館とは異なり、最近建てられたものだ。そのため、造りがまったく異なつていた。

シンプルで明るく、機能的な図書館を、マリーはとても気にいつていた。

また、図書館は一般のひとも利用できるよになつており、建物

のそばには、まばらだがひとの姿があらはつた。入口まで来ると、寒いので、さっさと中に入った。

薄暗い入り口をくぐると、少しかびくさい紙の香りに包まれる。

マリーは早速、入口のカウンターに座っている司書に名前を告げて、本を探しにかかった。

ハウエルズには言つてこなかつたが、マリーは悪魔について調べるつもりだつた。真つ直ぐに悪魔学の書籍がある場所へ向かう。今まで、鍊金術に必要な範囲でしか、悪魔については学んで来なかつたのが悔やまれるが、たとえ付け焼刃であつても、もう少し知識があれば、彼の役にたてるのでは、とマリーは考えたのだ。

アレックスのことと同じくらい、マリーにとつて、ハウエルズに関わる問題は重要なことだつた。

自分が、生み出してしまつたようなものなのだから。

いや、完全に、ではないかな、とマリーは考えた。あの時、勝手に持ち去つた悪魔学科の者にも責任はある。そのときのことを思い出したマリーは、怒りも同時にのみがえり、大きくため息をついた。怒つている場合ではない。

落ち着け、と言い聞かせ、ずらりと並ぶ背表紙に目を走らせる。

その時、となりに軽くぶつかってきたひどがいた。

「あ、ごめんなさ……」

その人物は謝りかけて、マリーを凝視した。マリーの方も凝視した。

「あー————！」

ふたり同時に、互いを指差して叫ぶ。すると、周囲から避難めいた視線がたくさん突き刺さり、マリーとその人物は口を押された。マリーはうらめしい思いで、その女性を眺める。

黒い髪、華奢な体つき。大きな青い瞳。まつ黒なローブなど着さえいなければ美少女なのに、と思つたことは忘れていない。

「あなた、あの時の……」

そもそも元凶をつくったうちのひとりだ。

「あの時は申し訳ないことをいたしました。勝手に研究物を拝借してしまって……。それで、あの、あなたがまだ生きてらっしゃると云ひとば、あの方は祓われてしまったのでしょうか？」

「あの方、とはよつするにハウエルズのことだらう。」

マリーは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら、答えた。

「まだいるわよ」

しかも厄介なことに、人間の心まで持つてね、と心の中で言い添える。

すると、女性は顔を輝かせた。

「いるのですか！　ああ、良かった滅びていなくて。私が初めて召喚に成功した方なのです！」

あの、あの方に会わせてはもうえないのでしょうか？　お願いします、一目、ひとめっ！」

その女性はマリーの両手をがつちつとかみ、皿をつるませて呪んだ。

ふたたび、非難の視線が集まつてくる。マリーは、慌てて言った。
「ちょっと、静かにお願い。そのことについては、ちょっと話合いましょう、ほり、あつちで、ね？　だから落ち着いて、興奮しないで、迷惑になるから……」

マリーは、図書館の南側にある喫茶スペースを、視線で示してみせた。女性は、何度もうなずいてからマリーの手を放すと、嬉しそうに、本を持ったままそちらへ歩いて行く。相も変わらずのまつ黒ローブ姿に、まわりのひとがぎょ、として逃げて行く。

面倒なことになつた。

マリーはすでに疲労をおぼえながら、彼女のいる席へと向かつたのだった。

女性はジュディと名乗り、自分は悪魔学科で講師を務めている、と言つた。

「あなたは鍊金術科の方でしたか。あのときはすみませんでした。私、初めて儀式を行つて、上手くいっちやつたもので、大興奮してまして、あの体がどういう経緯でそこにあつたかとか、なんにも考えなしに使つちゃつたんです」

申し訳なさそうな顔をしつつ言つたが、声がはしゃいでいる。

マリーは渋面でジュディを見て、ため息をついた。

「まあ、だいたいそんなことだろうと思つてましたけどね。

それで、ハウエルズに会いたい理由はなんなんですか？」

「そんなこと決まつてないじゃありませんか。聞くんですよ、いろいろと。

悪魔、という神秘的な存在が、どんな考え方を持ち、どんなふうに生まれ、どんなふうにひとを墮落させるのか、それに、墮天使という言葉もあるくらいですからね、もともと天使だったのか、天使だったら神とはどのような存在なのか……ああ、たまりませんよね」
ジュディはうつとりとしながら語る。

マリーは頭痛がしてきた。こういう手あいは、大学院にはたまにいる。よつするに、変人奇人の類だ。

頭はおそらく良いのだが、人間性が微妙にダメで、社会性がまったくないタイプであるために、大学院にしか居場所がないのである。

おそらく、彼女もそういうタイプなのだ。

腹がたつていたこともあり、マリーは勝手に決め付けた。

「それで、会わせていただけるのでしょうか？」

ジュディは懇願するような目でマリーを見つめた。

マリーは腹立たしいので、断つてしまおうか、とも考えたのだが、

ふと、考え直す。

「そうだ。わざわざ自分で調べなくても、悪魔に詳しい人物が、目の前にいるではないか。

手伝つてもらつて悪いことはないはずだ。

なにしろ、今現在マリーが悩むはめになつたのは、彼女のせいなのだから。

「いいわよ。ただし、今ちょっと面倒なことになつてゐる……ねえ、悪魔の魂が傷ついた場合に、なにか有効な手段、みたいなのがあるの?」

マリーが言つと、ジュディは表情を一変させた。

「まさか、ハウエルズ様の身に何か!」

ただでさえ白い顔が、ますます蝶のように白くなる。

「うん、まあ、ちょっと……捕縛用の魔法陣に捕まりかけちゃつて、傷ついたの」

「私に、私に見せて下さい!」

「方法があるの? 手伝つからまずそれを教えて」

マリーが問つと、ジュディは少し考え込むよつなじぐさをして、唸る。

「うーん、悪魔の治療といつことにについては、私も読んだことがありません。もともと、悪魔は自己治癒能力が異常に高いのです。少々の傷くらいなら、すぐに治つてしまつはずです。

それが治らないということは、何かが変化したとしか」

ジュディの言葉に、マリーはやはり、と思つた。

「もともと、悪魔は魂だけの存在に近い、といつのは私も読んだわ。それが、ああして実体を得てしまつた、といつことが関係しているのかしら?」

「そう聞くと、ジュディはうなずいた。

「おそらく、そうだと思います」

「……じゃあ、体から切り離せばいいんじゃないかな?」

「多分、そうだと思います。でも、出て行きたければ自ら出ていけ

るはずですけど」

「それがね、そつでもないみたいなの……とりあえず、見てみてくれる？ もしも体と魂を切り離す儀式のようなものがあれば、やってみて欲しいの」

マリーが言つと、ジユーティはちよつと意外そうな顔をしてマリーを見た。

「マリーさん、ハウエルズ様のこと好きになつたりやつたんですか？」
ジユーティは唐突に言つた。マリーは言葉に詰まり、皿を見開いて、しばらく黙りこむ。

「な、何でそんなこと……」「

「だつて、そつじやなきや助けたいなんて思いませんよ。相手は悪魔です、人間ではありません。たぶらかされたふうにも見えないしだつたら、そうだとしか」

ジユーティはすげすげと言つた。

マリーは否定も出来ず、言葉に詰まつてジユーティを睨みつけた。頭をフル回転させ、言つ返せる言葉を探す。

「あなたの思い違ひよ

「ええ、そつは見えないんだけどなあ

「ああもう一いいから、私の部屋に来てよ、彼、今動けないの。会わせて欲しいんでしょ？」

マリーは怒つて言つた。

すると、ジユーティは突然態度を変える。

「はいはい、会いたいです、行きまー

「じゃあついてきて……

目を輝かせはじめたジユーティを見て、マリーは疲労を感じた。

彼女の手を借りようなどとずるい手を考えたのが、間違いだつたかもしがれない。それでも、もう言つてしまつたことは取り消せないので。

マリーはため息をつきながら、ジユーティを連れて図書館をあとにしたのだった。

マリーの部屋に入ると、ジュテイは歓声をあげた。

「あああ、お会いしたかったです」

言いながらベッドに近づいて、瞳をうるませる。

すると、横になっていたハウエルズが、迷惑そうな顔でマリーを見て聞いた。

「なあ、こいつ誰？」

「……自分の召喚者も忘れたの？」

呆れた気分で言つと、ハウエルズはそれでもジュテイのことを思い出せないらしく、小さく首をひねつてゐる。よほどじりどもいいらしく。マリーは、何だか彼女がかわいそうに思えてきた。

「ああ、こんな痛々しいお姿になってしまって。

「どうして、この入れ物から出でてお行きにならないのですか？」
「え？ ああ、なんだろうな。出られないんだよ、出ようとしてみたんだけどね。」

ハウエルズはてのひらをふしきそうに眺めながら言つた。
やはり、分離しようと試みてはみたらしい。

「そつか、そんなことじやないかと思つたわ。

それでなんだけど、ジュテイ……どんな感じ？」

「うーん、あまり詳しいことはわかりませんね、やつてみないことには、なにしろ、実物の悪魔の記録つてなかなか残つてないんですね。誰かの想像の産物じやないかと思われるものとか、薬物中毒症状が悪魔つきと間違えられていたり、あきらかに別の疾患が悪魔の仕業とされていたりとか……」

ジュテイは嬉しそうにしながらも、ちょっと困ったように答えた。
マリーはため息をついて、腰に手を当てた。

「なあ、何の話なんだ？」

「あなたが苦しんでるから、その体から悪魔であるあなたの魂をひ

きはがせねば、傷も治るんじやないかっていう話」「お

問い合わせると、ハウエルズは顔をしかめて、体を起しかつと

た。

だが、やはりまだつらいか、唇が引き結ばれ、顔が苦痛の表情に染まる。

「だめよ、まだ痛むんでしょう?」

「俺は別のところに行く

「何で? 何もしたりしないわ」

マリーは、ハウエルズの両肩に手を置いて、寝台に押し戻そうとした。しかし、彼は苦痛の表情のまま、頑固に起き上がりうと力を込めている。

ジュディは寝台の前にひざをついたまま、おろおろしていた。

「今、ひきはがすとか言っておいて何もしないだと? 言ってる」とがおかしいぜ。

俺は、この身体から出でていきたいとは思っていない。だから、この部屋から出でていく

「やめて、何よ、そんなにこの身体が気にいったの? だつたらいいわよ、もう体から出でていけなんて言わないから、それなら、傷を治してからまた戻ればいいだけの話でしょう?」

マリーが言つても、ハウエルズは横になろうとしない。

「そういう意味じゃないさ……俺は、ただ

「ただ、何なの?」

ねえ、とにかくお願ひ、今は横になつて。そんなに苦しそうな顔、見てるほうもつらいの

マリーが、諭すように言つたと、ようやく彼は横になつた。

「……あのお、もしかしながら、ハウエルズ様はマリーさんのことを好きなんですか?」

ふいに、ジュディが好奇心むき出しの顔で言った。

マリーは固まつたが、ハウエルズは笑つた。

「まあね。マリーのほうは、そうじやないみたいだけど

「え、違いますよ、マリーさんも好きですよ、ハウエルズ様の」」
うわあ、なんだかわくわくしますね、禁断の愛ですか！」

ジユディは、ものすごく楽しそうに言った。

今度はハウエルズも固まつた。マリーは、彼の顔を見られなかつた。しかし、ハウエルズのまゝ、しげしげとマリーの顔を見つめている。

「それ、本当なのか？ だつて、マリーはあるの教授が……」「もう！ やめて、そんな話、今しなくていいでしょ。私だって、自分の気持ちがわからなくて混乱してるの！」

マリーが顔を赤くして叫ぶと、ふたりとも黙つた。

なんともいえない空気が流れる。

ハウエルズは、マリーを見ては目をそらし、ジユディは何やら楽しげに笑いを噛み殺している。いたたまれなくて、マリーは言った。「とりあえず、ハウエルズが決めて。その傷は、そのまま置いておいて治るものかどうかわからないのよ。だつたら、試してみる価値はあると思う。でも、無理強いはしないから」「ああ、わかった」

ハウエルズは、納得したようにうなずいた。

「という訳で、必要になつたら儀式をお願いできるかしら？」

マリーはジユディを見て言った。まだ頬が熱い。

「はいはい、会わせて下さいましたもの。それに、マリーさんと話が出来て嬉しかったです。

私、こんなですから、話相手になってくれるひととか、ほとんどいないんです。同じ学科のなかでも、極めて変人だと思われてるみたいなんですね」

そう言つて、ジユディはえへへ、と笑つた。

マリーは、やや気が咎めた。今だつて内心、ジユディを変わり者だと思っているのだ。けれど、彼女は変なひとではあるが、悪い人間ではない。まあ、思ったことを何でも口に出すのが、こう欠点はあるが。

「その、私でよければたまに話を聞くくらいはかまわないわよ。思つたんだけど、まず、その黒いローブを何とかすれば、もつと

友だち増えると思つの」

主に異性の、ではあるが。それでも、マリーの言葉に、ジュディは顔を輝かせた。

「え、いいんですか、話相手になつてもらつても。

嬉しいです……でも、きっと嫌な思いをさせちゃうと思いますよ?..」

「そこよ、話をしながら、私がどこがダメなのか教えてあげる。あなたはそのままでもいいひとだけ、口に出していくことと悪いこと

とがわかれば、こうじろと違つてくるはずよ、ね?」

手伝つても、うのだから、せめてそのくらいしてもいいだらう。それに、ハウエルズという秘密を共有できる唯一の人物もある。ジュディは驚きに満ちた顔をして、少し恥ずかしそうに「はい」とうなずいた。

かわいい。女のマリーから見ても、どんなにかわいい。やりよつによつては化ける可能性ありだ。

「じゃああの、今日のところは自分の家に戻りますね。もう夕方です」

「そうね。じゃあまた明日、何かお願いしたいことがあつたら、私のほうから声をかけるから」

マリーはそう言って、部屋を出ていく。ジュディを『』の外に出て見送つた。

ジュディは頭を下げながら、ゆっくりと歩き去つていく。

少しのあいだ、そこに立つてぼんやりする。

正直、疲れていたのだ。なにしろ、寮に戻つてきつからといつもの、気の休まるひまがない。

「まあ、協力してくれるひとと知り合えたことだし、今日はこんなものかな」

つぶやいて、部屋のなかへ戻ろうとしたとき、廊下のつきあたりに、人影をみとめて、マリーは驚いた。と同時に、心臓を氷の手で

つかまれたような感覚が襲う。

今日、最も会いたくなかったひと。
アレックスがそこにいた。

彼は穏やかな表情のまま、マリーのそばへ歩いてくる。
「その、迷惑かとも思ったのですが、やはり心配だったので、様子
を見に来てしました。
何ごともありませんでしたか？」

「あ、はい」

マリーはとつさにうそをついた。

今、アレックスに部屋に入られでは困る。

そう考えてから、はた、と思いとどまつた。どうして、なぜ困る
のだろう。むしろ、正直に言つて、アレックスにも協力してもらい、
ハウエルズを体から切り離せれば、そのほうが良いはずなのではない
いだろうか。

それに、どうして相談もなく、ハウエルズを捕らえたワナを仕掛けたのか、問い合わせてもいいはずだ。

なのに、マリーの口から、それらの問い合わせてくることはなかつた。

ジュディの言つた言葉が、頭のなかをめぐつている。「マリーさん、ハウエルズ様のこと、好きになっちゃつたんですか?」「あの言葉が、何度もくり返し浮かんでは消えるのだ。

「そうですか。それなら良かつた……先ほど、部屋から出でていったのはお友だちですか?

今まで見たことのないかたでしたが」

「今日、図書館で会つて、話をしたんです。彼女は悪魔学科のひとりで、いろいろなことを教えてもらいました」

そう言つと、アレックスの表情が険しくなつた。

「悪魔学……まさかとは思いますが、マリー、彼に会つたりしないでしようね?」

「どうしてですか?」

「当然、彼が悪魔だからですよ。あの体が大事だというあなたの気持ちはわかっていますが、悪魔を甘く見ないほうがいい。文献にも、たぶらかされ、堕落させられてどん底の人生を歩むだけでなく、命を奪われるという記述もあるくらいです」

アレックスは、声を強めて言った。

心配してくれているのだ、とわかつて、マリーは素直に嬉しかった。

「ありがとうございます……私は大丈夫です」

「それなら良いのですが、そうだ、少しですが、あなたが館で使っていた服を持つてきました。少しは寒さが違うと思います……なかに置いていきますね」

アレックスはそう言つて、部屋の戸に手をかけた。

マリーは、全身の血が冷たくなる思いがした。どう言つて、部屋に入らせないようにするか、頭がまわらないでいるうちに、アレックスは見てしまった。

どうしようもない気分で、マリーは後ずさる。

そのまま、逃げてしまいたい。けれど、振り向いたアレックスの表情は、それを許してくれそうになかった。驚愕と怒りに染まった顔に、恐怖をおぼえる。

「マリー……どうこのことですか？　会つていない、と今あなたは言いましたよね」

「会つていない、とは言つていません。

今日、戻つてきたらいたんですね……それで、図書館に行つて……

声がかされているのがわかつた。

マリーは、呆然としたまま、言葉をなんとかつなげるよつに声を出す。

「どうして、私に黙つてわなを仕掛けたりしたんですか？」

唐突に、マリーの口から問い合わせがこぼれた。

「決まつていいでしょう。この悪魔を、この世から消すためですよ……この悪魔は、いろいろな意味で私にとつて悪だ。やはり、あな

たはたぶらかされている、もつと早く手を打てば良かった」

アレックスは言いながら、手を伸ばして、ハウエルズのえりぐびをつかんで引き上げた。

ハウエルズの顔が苦悶に歪む。

「は、ついにお優しい仮面を脱ぎますたのかよ。それが、あなたの本性か？」

嫉妬深くて、見苦しいな

「苦しげに、けれど嘲笑しながらハウエルズは言う。

「悪魔のくせに、知ったような口をきかないで下さい。いい機会だ、このまま消してあげましょう。マリーには申し訳ないが、体ごと燃やしてあげますよ。そうすれば感情に焼かれる苦しみもわかるというものです」

そう言つと、アレックスはハウエルズを寝台から引きずり出した。低い声には、深い怒りがこもつていて。

ハウエルズは、痛みからうめき声をあげ、アレックスの手から逃れようともがく。だが、怒りの力を借りてアレックスは、そんな抵抗をものともせずに、ハウエルズを殴り倒した。大きな体が壁に打ちつけられ、あるはづのなかつた血が唇から流れ出る。棚が揺れて、中のものが転がり落ち、ハウエルズに当たる。彼は小さくうめくと、体を丸めてうずくまり、動かなくなる。

アレックスは、ハウエルズを部屋から引きずり出そうと、両腕をつかんだ。

マリーは思わずハウエルズに覆いかぶさつた。

「マリー？ どきなさい！」

「嫌です、こんな……なんで、教授がこんなことまでするなんて変です！」

叫ぶように囁つ。

騒ぎを聞きつけて、近くの部屋の戸がいくつか開く。まだ寮に残っていた研究員たちだ。

アレックスはそれに気づくと、悔しそうに顔をゆがめた。

「マリー、みせ……俺なら、平氣だから
くべもつた声で、ハウエルズはマリーをじろりと、弱々しい力
で、腕をあげようとする。

「そんな訳ないでしょ……だったら、そんなひひひうな顔してな
いはずだわ」

マリーはすがるよううにハウエルズの胴にしがみついた。

嫌だった。この体が失われるのも、宿った心が消えてしまうのも、耐えられないほどつらい。

すでに、マリーのなかで、ハウエルズはひとりの男性だった。目の前で傷つくのを、黙つて見ていられない。このままでは、ハウエルズは殺されてしまうかもしない。

そう思つたら、体が勝手に動いていた。

「どくんだマリー！ 君はただ、その悪魔に魅入られているだけだ」「嫌です！ どいたら殺すんでしょう？ 絶対に嫌っ！」

ハウエルズの背に、顔を押しつけたまま、マリーは囁つ。自然と涙があふれ、ハウエルズの服が濡れる。

アレックスは、マリーの行動と言葉に衝撃を受け、苦しげなうめきをもらした。

「どうして……かばうんですか、それは人間ではない、ひとの魂を食らひるために、純粹な魂を汚して絶望させて背徳を喜ぶ……悪魔なんですよ！」

アレックスは怒鳴つた。

とたん、まわりから悲鳴があがる。

悪魔、と聞いてパニックに陥つたのだろう。それぞれ、部屋のかへ戻るか、逃げだしていく。

だが、黒ローブ姿をしている悪魔学科の研究員たちは、興味深そうな顔で残つている。

そのなかに、啞然としているクリスの姿もあつた。

それでも、ハウエルズから離れないマリーを見て、アレックスの表情が冷たくなつた。

憎々しげに、ハウエルズを睨みつける。睨みつけられたハウエルズは、懸命に上体を起こすと、マリーに向けて言つた。

「ちょっと、力をゆるめてくれ」

「え？」

疑問に感じつつ、痛いのかと思つてしがみつく力を弱めると、ハウエルズの瞳から、赤く暗い光が放たれた。その妖しく輝く瞳が向かれているのは、アレックスだ。

「……つ、何を」

「残念ながら、この？魅了の瞳？はマリーには通じなかつたが、あんたにはどうだらうな？」

言いながら、誘うような笑みを浮かべる。

殴られたために額が切れ、唇も破れて鮮血により紅に染まつた、美しい人ならぬ存在の、妖しく、艶やかなほほえみ。髪の色も、アレックスのものと似ていたはずなのに、なぜか漆黒に染まって見える。

ほとんど、別人だ。マリーはそう思いながら、見惚れていた。

アレックスは、ふらつきながら、つぶやいた。

「そんなものに、惑わされるものか……。私は、決してそんなものには屈しない」

目もとを抑えて、ハウエルズに歩み寄りうとする自分を、押しとどめているようだ。その姿をマリーは胸が張り裂けそうな思いで見つめた。すると、アレックスの視線が、マリーの視線とからみあつ。彼は、嘲笑うよくな笑みを浮かべた。

心を傷つけた相手を傷つけることで、その痛みを癒そうとするとき、ひとはそういう顔になる。

「コープ男爵の言葉の通りでした……あなたは、女性として失格だ」マリーは大きく口を見開いて、口もとを押さえた。

奈落に突き落とされ、ハンマーで殴られたような痛みが襲つてくる。

それでも、マリーは涙だけ流しながら、嗚咽はもらさない。もう資格もないことは、マリー自身が一番よくわかつていた。だから、こらえた。

その言葉は、報いなのだ。

はつきりと心を決めず、ふたりに愛されていくことでいい気になってしまったことへの。

マリーが、嗚咽をこじらせていると、ハウエルズが悲しげな笑みを浮かべるのが見えた。

「それが、好きな人間にに対する言葉なのか？ あんたら人間つていのちは、好きなやつに傷つけられたら、傷つけ返さないと気が済まないらしいな」

大きく息をしながら、ハウエルズが言った。
アレックスは、ハウエルズの言葉には答えず、無言で背を向ける。そのまま、足をふらつかせながら立ち去ってしまった。
マリーはハウエルズを支えるつもりが、すがるような形になつていることに気づいて、離れた。

涙はまだ止まらない。さすがに我慢しきれなくなつて、嗚咽がもれだす。

そんなマリーの背に手を当てて、ハウエルズが苦しげに言った。
「ごめん、俺のせいだ……俺がマリーを頼ったから」
その優しい言葉に、マリーは激しく首を横に振った。
「違うのよ、私が全部悪いの……ちゃんと、けじめをつけなかつたから。だから、アレックスは正しいのよ、こんな女と、結婚しなくて済んで……良かったのよ」

涙声で、ふりしぶるように呟つ。

マリーは、両手で顔を覆つて、嗚咽が鎮まるのを待つた。しばらくは、悲しみの波に揺られる他はないのだ。感情が荒れ狂っているうちには、何も出来ない。なんてはがゆいのだろう。

「……全く、相変わらず面倒ごとを引き起こす天才だよね、マリーは」

クリスの声がした。

その声も言葉も、決してマリーを否定していない。

それが、かえってマリーの胸をしめつけた。

ただ、泣きじゃくるしか出来ない。こんなに泣いたのは、子ども

のとき以来だ。

やがて、マリーたちを見る野次馬も、狭い廊下から去つていった。ハウエルズとクリスは、マリーが泣きやむまで、何も言わずにそばにいてくれた。

やがて、マリーが落ち着くのを見計らつたよつて、ハウエルズはクリスを見て、言った。

「悪いが、手を貸してくれないか……俺は、ここを出ていく」

マリーは驚いて、まだあふれてくる涙を必死でぬぐいながら言った。

「だめよ、ただでさえひどい状態だったのに、出でていくなんて許さない」

「俺はここにいるべきじゃない。それに、場合によつては、実験体のような扱いをされるかもしれない。あれだけ目撃者がいれば、なあさらだ」

目撃した者の数は、ひどく少なかつたが、人の口に戸はたてられない。ハウエルズの存在が知れてしまうのは時間の問題だった。

「それもそうだね。でもマリーが納得しないんじゃ動かせないよ。どこか、かくまえるような場所とかないかな、学院内はかえつて危なそしだしね」

「それなら俺が知つてるから、大丈夫だ、それに……」

ハウエルズは何かを言おうとして口をつぐんだ。

「なに、どうしたの？」

「何でもない」

そんな言い方をされたら気になる。けれど、マリーは彼の表情がひどく曇つているのを見て、問いただすのをやめた。

「……わかつたわ、でも、居場所はちゃんと教えて。急にいなくならないで。……それだけ、私が望むのは、それだけよ」

真っ向からハウエルズの赤い瞳を見つめて、乞うよつて叫びつ。ハウエルズは、戸惑つたような顔をしたもの、うなずいた。

「ああ、ちゃんと教える。だから、今は行く

マリーも、うなずいて、立ち上がった。

クリスは呆れたようにため息をつくと、ハウエルズを立ち上がらせ、肩をかした。

「ああもう、重いなあ

クリスがため息をつきながら、ハウエルズを引きずるように連れていいく。

その背を見送りながら、マリーは深呼吸した。頭が痛い。目がじんじんする。

休みたい。

ふらつく足で、マリーは部屋の中に戻つて鍵をかけると、ベッドに向かい、倒れ込むように横になつた。乱れたままのシーツから、なぜか甘い香りがする。ハウエルズは体臭など持たないはずなのに。ふしきと、心が安らいだ。まるで穏やかな波の上に浮かんでいるよう、そんな感覚に包まれて、マリーはすつ、と目を閉じた。

すでにおぼろげに霞む意識の中で、気づいたことを思い返す。

ハウエルズは、ずっとマリーを一番に考えて行動してくれていた。どうすれば最も幸せになれるか、傷つけずにすむのか。それが、身にしみて痛くて、同時に嬉しかった。

愛おしさが、こみあげて、また涙をこぼす。

これから、出来うる全てで彼を救おう。マリーは強く誓つと、眠りに身をゆだねたのだった。

人として、悪魔として

（あの女を食らいたいんだね？　お前は悪魔だ、契約なんてくそくらえだ！　とつとと魂を汚して、墮として、食らひちまえよ、回復するには、それしかないぜ？）

心が哄笑をあげながら、甘い蜜をちらつかせる。

（そんなことは出来ない。マリーは、俺を信じてくれた。自分の人生を台無しにしてまで、かばってくれたんだぞ！）

「うう。わかつていた。彼女が、あの教授に心の安らぎを覚えていることも、結婚の約束をしたことも。遠くから見ていた。だから、最後にせめて、研究所で生き生きとしていた姿を記憶して、完全に姿を消そうと思った。そのとき、罠にかけられたのだ。

体を引きずるように歩きながら、ハウエルズは痛みに集中した。余計なことを考えるな。そう言い聞かせつつも、手に入れた人間ならではの迷い、悩み、それらの思いが脳内を満たしていく。だから、意識を外に向けようと、自分の入れ物より小さい、肩を貸してくれている青年に声をかける。

「どうして、手を貸してくれる気になつたんだ。お前、教授と一緒に罠をしかけただろう？　俺に、消えて欲しかつたんじゃなかつたのか？」

「え、そりや、手伝つて欲しいって言われたからさ。教授に恩を売つておけば、いろいろと便利なこともあるんだよ。それに、ちょっと勇氣のある普通の人は、友人に悪魔がまとわりついてることを知つたら、排除しとかないと、つて考えるものだよ」「特になんの感慨もないようすで、クリスは言った。

「それに教授、本気でマリーのこと好きみたいだつたし、まあ、悪い話でもないかなと思つてさ。じゃあ応援しようかな、と。まさか今日あんな光景を見ることになるとは思わなかつたけどさ。正直、僕にはマリーの気持ちがわからんいや

「ああ、俺にもわからない」

「つて言つかるさ、女人人がわかんないんだよ。いきなりさつきまで言つてたことと逆の行動をとり始めるんだからさ。思いつきでものを言つし、相談に乗つて、つて言つから話聞いて、アドバイスしてあげたら、私の気持ちをわかつてくれない、最低、とか言い出すんだよ。なんか疲れる」

ぼやくようすに語つたクリスを見て、ハウエルズは言つ。

「そういうものなのか？ その女、もしかしたらお前に気があつたんじゃないのか？」

「……」

クリスは不意に立ち止まり、しげしげとハウエルズを横目でながめた。ハウエルズは、理由がわからず、ただじつと見つめ返す。

「な、何だよ」

「マリーの気持ちがわかつた氣がする」

クリスは唐突に言つて、ふたたび歩きだした。

「本当に悪魔なのかわからなくなるよ、調子狂つ……」

ハウエルズはクリスの言う意味が理解できず、口を閉ざした。なにを訊けばいいのかすら、浮かんでは来なかつたからだ。やがて、ハウエルズがいつもねぐらに使つていた廃墟が見えてきた。

街の中心部から西の方角へ進むと、そこはあまり裕福ではない、貧しい人々が暮らす街区になつてゐる。安宿や酒場があり、時折醉っ払いや、香水のきつすぎる娼婦とすれ違う場所だ。そのため、出て行つたまま放置されている家屋が点在してゐる。ハウエルズはそのひとつをねぐらにしていた。

その家まであと少し、といつところで、ハウエルズは言つた。

「ここでいい。マリーに、俺はある廃墟にいるつて伝えてくれないか？」

そう言つと、クリスは少し意地の悪い笑みを浮かべた。

「そつちこそ、よく僕を信用する気になつたね。今言つたこと、教授に教えてマリーに教えなかつたらどうするつもりだい？」

その言葉に、ハウエルズは苦笑した。

「お前、マリーの父親に雇われてるんだっけか？ 支援が打ち切られるかもしれないのに、彼女を傷つけるようなことが出来るとは俺には到底思えないな」

そう言つてやると、クリスは舌打ちし、小声で毒づいた。

「全く、いらないところでちゃんと悪魔してやがる。はいはい、ちゃんと伝えますよ、けど、マリーとはちゃんと友だちなんだ。だからその立場で本音を言わせてもらうと、彼女には近づいて欲しくない。マリーはあんたが人間の心を持つている、と言つてたけど、それはつまり、悪魔の中に人間的な部分が出てきたってだけだろ？ あんたが悪魔であることには変わりない。いつ本性を現すかわかつたもんじゃないからね。それを言つたために、手を貸すこととしたんだ」

その通りだな、とハウエルズは思つて、口の端をつりあげて、自嘲する。

「なにがおかしいんだよ」

「いや、別にお前を笑つたわけじゃない。全く同意見だなと思つたんだ」

そう言つと、クリスはわけがわからない、と言いたげな顔になる。

「変な奴だな。まあいいや、じゃあ僕はこれで戻るよ、明日あたり、またマリーと一緒に来るから」

「ああ、すまなかつたな」

クリスは、その返事を聞くと、ハウエルズが壁にもたれかかるのを確認してから、ため息をついて歩き去つた。ハウエルズは、痛む体を引きずるようにして、壁の割れ目から廃墟の中へと入り込んだ。かつてここで暮らしていた住人が使っていた家具がいくつか、暗い部屋の中にぽつん、と置かれている。ハウエルズは、寝台がある寝室までふらつきながら進むと、すぐに横たわつた。

薄汚れた寝具の上で、ハウエルズは、目を閉じる。

やがて、訪れる眠りを待ちながら、外の物音に耳をかたむけて、

静かに息をついた。

外では雪が舞い踊りはじめている。

誰もいない部屋の空気は、ひどく冷たい匂いがした。

目が覚めたのは、人の気配を感じたからだった。

横になつてから、まだいいとして時間がたつていなければ、周囲が暗闇に塗りこめられていることからも明らかだつた。

そのとき、ひとり、と首に冷たいものが当たられた。ナイフだと気づくのに、さして時間はかからなかつた。ハウエルズは、特に身じろぎもせずに、闇に目が慣れるのを待つた。少し前であれば、すぐになじんだ闇の中だつたが、今はいろいろと不便だ。

「動くんじゃない。つたく、なんにもねえな……」

「最初から、物とり目的で来たんじゃないよ。いいからそいつを捕まえな」

「はいはい」

侵入した人間は、三人。ハウエルズは、唐突に言った。

「俺をさらに来たのか？」

三人が、驚いて悲鳴をあげたり、床の上にひっくり返るのがわかる。首にナイフを当てている男の手も震えている。

「だ、だつたらどうだつてんだ！」

「別に……どこかの金持ちに売るんだろう？　薬漬けにして。綺麗な顔をしているからな。成人男性であつたとしても、いくらでも捨てるルートがあるという訳だ」

のだから、勝手に低い笑いが漏れだす。ハウエルズは、自分に向かってやめる、と叫んだ。だが、本来の悪魔としての本能が、そんなことで止まるはずもない。しかも、傷を負い、魂が強く飢えているのだ。

瞳が、赤く淀んだ光を放つ。三人が、魅入られたように自分から

田をはなせずにいるのがわかる。

「俺なら、もつといいやり方を教えてやれるがどうする?」

ナイフを持つ男ののどが、『ぐぐり、と鳴る。

「て、てめえ一体何者だ!」

「肉体を持たない闇の化身。この顔と瞳が何よりの証……俺は、悪魔だ。お前たちは手を出してはならないものに手を出したのさ、このまま俺を刺すならば決して逃れられぬ報復が待っている。だが、契約を結べば、お前たちが心から望むものを与えてやろう」

追いつめるように言葉を並べながら、彼らの姿をしつかりと視認した。三人とも、薄汚れて瘦せている。労働者階級の中でも、極めて低い位置の者たちだろう。女は、年増の娼婦だと思われた。年をとると、容も寄り付かなくなる。ついでに、腐臭に近いものをまとっているから、何かの病気を患っているようだ。おそらく性病だろう。

「ただし、全ては契約が済んでからだ。それさえ済めば、俺はお前たちに地上で最も強い快楽を約束しよう……金、酒、女、あふれるほどの食べもの、豪華な部屋で眠り、絹をまとう贅沢をくれてやる。彼らが望むものを片端から並びたて、心が揺りぐのを見て楽しみながら、問う。

「どうする? 試しに契約をしてみるか?」

リスクなどないように見せかける。

「自分たちからあらゆるものむしりとった奴らを、踏みつけにしてみたくはないのか?」

最後のひと押し。彼らは、迷いながらも、ハウエルズに告げた。

「わ、わかった。いいだろ、契約とやらを結んでやる……だが、お前の言葉が助かるための嘘だったら、すぐに金持ちの婆に売り飛ばす」

男の、精いっぱいの虚勢に、ハウエルズは嗤つた。

そして、マリーに会つて以来、決してしなかつた契約をした。久しぶりに、気分が高揚している。なんと楽しいのだろう……こ

れから、この三人をどこまで堕落させるか、考えただけで心が震える。

こみ上げる哄笑を抑えながら、契約書を虚空から取り出す。そのときハウエルズは、マリーのことも、人間としての感情もすべて忘れ去ってしまっていた。

「もう、なんでいないの。ちょっとクリス、本当にここであつてるんでしようね？」

「間違いないって。あいつ、ここだつて言つたし、僕はうそはついてない。見てみなよ、この血痕……多分あのあとここで寝てたはずだよ、それから起きだして、出かけてるんじゃない？」

クリスの言葉に、マリーは顔をしかめて寝台を見た。

「どうして、約束したのに」

悲しみが胸をついて、マリーは口ごもる。

「まあ、半分は悪魔だからね。彼の人間的部分が対抗できるとは思えないよ、もしそうじゃなくとも、服の替えでも探しに行つたんじゃない？ またあとで来てみればいいよ

「……そう、よね」

マリーはため息をついて、廃墟を見回した。一階建ての一回部分。天井はないに等しい。陽光が降り注ぎ、冷たい風がまともに屋内に吹き荒れる。

（こんなところにいたなんて。私が、アレックスの館でぬぐぬぐと過ごしているときも）

由に息を吐くと、マリーはマフラーに顔を埋めるようにして、やつと廃墟を出た。

朝である。結局ものすごい勢いで眠つてしまつたマリーは、クリスに起こされて、ここにやつてきたのだ。早く、生きている姿を見たいと、急く心のまま走つてきたのに、ハウエルズはいなかつた。

「ごめんなさい、責めるようなこと言つて」

「別に、こつものことだ。正直、こんな不安定なマリー見るのは初めてだよ」

「そうよね」

「とりあえず、戻ろう。今日は普通に仕事あるんだしさ、また夜に

来てみよつ

「うん。ありがとう」

マリーは素直に礼を言つて、気味悪がるクリスを小突きながら、寮へと戻つた。

本当は会いたい。不安で、たまらないのに、なぜ彼はいないのだろう、とそんなことばかり考えていると、学院の入り口で、困惑顔のジュディに呼び止められた。

「あの、マリーさん！」

「あ、ジュディおはよつ」

「おはようじゃないですよ、学院内うわさで持ちきりなんですから。まだ始業までには時間ありますよね……その、迷惑じやなれば、私にも何があつたか教えてくださいませんか？」

心から案じてくれているジュディの表情を見て、マリーは嫌とは言えなかつた。

「ごめんなさい。今すぐにはさすがに時間が足りないわ。今日の夕方はあいてる？」

「はい。いつも暇です」

「じゃあ、夕方にある場所へ一緒に行きましょう。道すがら、話をすればいいから」

そう言うと、ジュディはやつぱりまだ不安そつて、それでも得心したようすでうなずいた。

「わかりました、じゃあ後で」

「また、ここで落ちあいましょつ

マリーが言つと、ジュディは「はい」と返事をして、クリスにも会釈して自身の仕事場へと戻つて行つた。

「マリー、今の美人だれ？」

クリスが、去つていくジュディの背中を凝視しながら訊ねてきた。マリーは、無理もないか、と思いながら、肩をすくめて言つた。

「ハウエルズを召喚した悪魔学科の人よ」

「えつ！ あんなに美人なのに……うわあ、何かいろいろと世の中

間違つてるような気がする」「

確かにクリスの言う通りだと思った。けれど、他のことを考える余裕のないマリーは、まだジュディの後姿を見ているクリスはそのままに、さっさと自身の研究室へ向かった。

その日は、研究室の床掃除からはじめた。

魔法陣を、クリスに手伝つてもらい、完全に消す。まずはそれからだ。午前中はそれでつぶれた。午後は、図書館に行つて調べものをしてから、研究室へ戻り、材料があるかの確認作業。

マリーには、どうしても試してみたいことがあった。

ハウエルズが入ったあの体は、ホムンクルス作成の方法をアレンジして鍊成したものだ。あれが成功したのならば、もしかしたら、何かきつかけさえあればホムンクルスを鍊成出来るのではないか、そう考えたのだ。

彼の小人は、あらゆる知識を授けてくれるとされていいる。

それにすがつてみたい、とマリーは考えていたのだ。

ただし、ホムンクルス鍊成は教会法で禁止されている。

熱心な信者ではないマリーは、かまうものか、という気持ちだった。今大切なのは、真実だ。知るということだ。そして大学院は、悪魔学を容認していることからも明らかのように、知識の探求には寛容であるため、これからマリーが行つ行為が、咎められることはない。

真剣に集中し、本をめぐり、どのように鍊成を行つか考える。周囲の雑音すら耳に入らないほどめり込んでいたマリーは、突然の来訪者の声に、心臓が飛び出しそうな思いをすることになつた。

「ちょっと！ どういうことなのマリー、説明して」

「リサ、ええと、ごめんなさい」

午後、大学院にやつてきたリサは、クリスの首根っこを捕まえて、

「マリーの研究室に怒鳴りこんできた。どうせ謝罪の言葉が口からまろびでる。

しかし、目をつりあげたリサが、そんな言葉ひとつで納得するはずもなかつた。

「謝つて済む問題じゃあないでしょーーー。あなた、あの体も悪魔もどこかへ行つちゃつたみたいって言つてたじやない。だから私は安心してたのに……しかも、教授とケンカしたですつて？ 結婚の約束はどうなるのよーー 悪魔に魅入られただなんて、嘘でしょー？」

リサは勢いよくまくしたてた。マリーは黙つて聞いていたが、クリスは少し驚いたようにつぶやく。

「もうそこまで話が進んでたんだ、じゃあいろいろと不味かつたかもね」

「そうよーー 進んでたの、お膳立てしたのは私ビックよ、不味いにきまつてるでしょ！ へたをしなくても話が消滅するわよ、それだけじゃなくて、一生が台無しよ」

クリスはもの言つたげにリサを見るが、何も言わない。マリーと同じで、今のリサには余計なことを言わないほうがいいと判断したのだろう。

「そうね。いろいろとしてもらつたのに、ごめんなさい……私が悪いのよ」

マリーは静かに言つた。

「そんなこと聞いてない。本当に、本当に悪魔に魅入られたのなら、今すぐ教会に行きましょーー 悪魔祓いをしてもらうのよ、あなたは教授と結婚するべきなのよ、ようやく見つけたんじやないの、あなたをちゃんと見てくれるひとを。私はあなたにもずっとそんなひどが現れたらいいって思つてたのよ。それは絶対に教授だわ！ そつと思つたからビックをたきつけてまで応援したのよー！」

リサは泣きそうな顔をして言つた。マリーは、何も言えない。彼女の考え方や、気持ちに報いることが出来ないから。だから、ただうつむいて、田の前に広げた文面をながめた。

「私も一緒に行くから、教授に謝りましょ、それから教会に行くの、ね？」

リサはマリーの腕をつかんで、立たせようとした。

「やめて、リサ。私にはやりたいことがあるの。教会に行く必要なんかいし、教授には後できちんと謝罪するわ、お願ひよ……しばらぐ、放つておいて」

そう言つと、リサはつらそうに顔をゆがめた。

「クリス、説明して。マリーはどうしゃつたの？」

「え？ 僕が説明するの？」

突然話の矛先を向けられたクリスは、当惑した視線をマリーに向けた。

そのとき、戸の向こうから別の声が割り込んだ。

「わたくしにも、聞かせて頂けませんか？」

マリーは驚いて目を見開いた。

そこにはいたのはイーディスだった。

リサは思いきり顔をしかめた。

その顔にはまるで？不快？の一文字が書いてあるようだ。

「アレックスを訪ねて来たのですが、こちらから大きなお声がしましたものつい。そうしたら、彼のことが話題になつているようなので気になつてしましましたの。もし迷惑でなければ、わたくしもお話に加わつてよろしいかしら？」

「よろしくないわよ、あなたには関係ない話なんだから。教授に会いに来たのなら、こんなところに寄り道せずに寛くその顔を見せてあげればいいじゃないの？」

リサがつっけんどんに言ひ。

クリスは怯えた表情をして、部屋の隅へこそそと逃げていく。マリーもここから逃げ出したい気分だった。なんでこんなことになるのだろう。今日から実験を開始するつもりだったのに。これでは無理そうだ。

「わたくしはあなたには訊いておりませんわ。それで、よろしいかしら？」

マリーに向けて問いかける。愛らしげに顔には、冷たい笑みが浮かび、まるでマリーを絞め殺したいと思つてゐるかのようだ。

「は、はい。どうぞ」

小声で返すと、リサが舌打ちした。マリーは猛獸一匹の前に放りだされた小鹿みたいな気分だった。

「ありがとうございます。それでは質問させていただきますわ。さきほど、アレックスの結婚がどうの、と仰っていたようですねけれど……それは、兄の言つていた、あなたと婚約した、というのは本当のことなのでですか？ 今日はそのことを訊きにアレックスを訪ねてきたのですか？」

「すが」

イーディスはやや憔悴してゐるよう見えた。少し前に見たとき

より痩せている。流行の可愛らしい小花柄の服装に包まれているので、余計に痛々しい。おそらく、ショックだったのだろう。もしかしたらそのことで、アレックスを問い合わせにきたのかもしれない。ということは、マリーは彼女にとつての朗報をこれから告げるこことになるのだ。そのことに対し、胸が重く痛む。だからといって、何かが変わるわけでもない。起こったことは元に戻らないし、戻りたいとも思えなかつた。ただし、それを口にするには気力が必要だつた。

マリーは数回ひそり深呼吸をし、なんとか気力を奮い起こすと、言つ。

「……いいえ。おそらく、破談になりました」
イーディスの顔色が一瞬で変わる。

「マリー！」

リサの咎めるよつな声が飛ぶ。

「まだ教授とは話をしていないんでしょう？　だつたら、決めるのは早いわよ！」

マリーはリサの言葉に首を横に振る。それから、力を込めて言つ。「いいえ、おそらく彼は許してくれない。私も、そんな卑怯なことは出来ないので、ごめんなさい。リサ、本当にごめんなさい」「なんてこと、もう知らないから！」

リサは顔を赤くし、そう言い捨てるように叫ぶと、勢いよく出て行つてしまつた。

マリーは悲しみに胸が痛んだが、何度もまばたきを繰り返して涙を追い払う。応援してくれたのに、その逆の行為で報いてしまつたのだ。

「……それは、本当なのですか？」
「はい。私が愚かな行いをしたせいで、彼に嫌な思いをさせてしました。ですので、おそらくそうなると思います」
マリーがはつきり言つと、イーディスはしばらく黙つてから、笑つた。

「そう、やはりそうよね。アレックスが、わたくし以外の女性と親しくなれるはずがないんだわ。彼のことを本当に知っているのは、わたくしだけですもの」

どこか、狂気のにじんだ笑いだつた。マリーはただ、じつと彼女を見る。

「そうよ、だからあなたが何をしたにしても、最初からアレックスはわたくしのもの。なるべくしてなつただけ、だからあなたは全く気に病む必要なんかありませんわ」

イーディスは、優越感を含めたいたわりの言葉を、悦楽の表情で並べた。マリーは、その言葉に傷ついた。早く、ここから去つてはくれないだろうか。そんな思いで、絞るように問う。

「他に質問がないのでしたら、教授に会いに行かれたらどうです？」

イーディスは喜色のにじんだ表情でうなずいた。

「ええ、もちろん……ああ、あなたもお忙しいのですものね、ごめんなさい。でもわたくし、どうしてもあなたに聞いて欲しいお話があるのよ。少しでいいから時間を下さらないかしら？　ほんの少しでいいの」

「何でしちゃう？」

マリーはこれ以上彼女と話をするのが嫌で、ややこしきんぐに答える。

「アレックスがどうして、あなたと結婚したいと考えるようになつたか、ちゃんととこうやつて向き合つてみてやつとわかつたわ。あなたは、アレックスのお姉さまに良く似ててるのよ」

イーディスの言葉に、マリーは首をかしげる。

「いきなり言われてもわからないわよね。彼のお姉さまはね、自虐したの」

「えつ！」

声をあげたのはクリスだ。イーディスは特に気にする風もなく、テーブルの側にやつてみると、粗末なイスに腰掛けてマリーと並んだ。

「お姉さまは、当時まだ学問としても技術者としても異端であった鍊金術師に恋をしたの。彼はもともとアレックスの家庭教師をしていてね、その縁でお姉さまと知り合い、お互いに恋に落ちたのよ。もちろん、ハースト家は由緒ある貴族の家柄、許されるはずもないわ。でも、彼は必死に認めてもらおうと頑張ったの」

イーディスはそこまで一気に語ると小さく息をき、すぐに話をつづける。

「その当時、お姉さまには婚約者がいたわ。心からお姉さまを愛していた彼は、鍊金術師の青年を異端者だと告発したの。そのせいで、彼は国外追放されてしまった。そして外国で、彼は病を得て死んでしまったのよ。絶望したお姉さまは自害してしまわれたわ……だから、アレックスは誓ったの。決して恋などしない。恋は身の破滅を招くから、と。どのみち、ハースト家は兄が継ぐのだから自分は結婚などしなくてもいいのだし、と言つてね。本当に良い方だったのよ。彼のお姉さまは、アレックスをお姉さまを愛していた。彼女は、あなたのように決して自分のことを優先しない、強くて優しいかただった」

イーディスは、じつとマリーを見ながら言った。

マリーは、アレックスがなぜあれだけかたくなに婚約や結婚を恐れていたのか知り、悲しくなった。本当ならこんな形ではなく、アレックスの口から直接聞きたかった。それでも、容易に心の傷をさせないと考えた彼を責めることは出来ないだろう。マリーは、どうしようもない思いでうなだれた。

「わたくしは、ずっとそんな彼を見てきた。近くにいて、恋とはそんなものじゃないと教えてあげたくてたまらなかつた。けれど、代わりにあなたがやつてくれたのね」

イーディスは穏やかに言つ。

優しい声で。毒を含んだ言葉を。言われてすぐに心に突き刺さるのではなく、後で痛むような傷を引く言葉だ、とマリーは思った。そのまま言わずに放つておけばマリーが一生知る必要のなかつた情

報を、わざわざ教えて、後悔させる。

リサが彼女を嫌がる理由がわかつた。

「後はわたくしが引き継ぐわ、どうもありがと。もし、なにかわたくしが力になれることがあれば言つてね？」

そう言つて、聖女のような笑みを浮かべる。

マリーは彼女の言葉を無表情で聞きながら、言った。

「なら、ひとつお願ひします」

「なにかしら？」

「ここで、私たちが話をしたこと、教授の過去を知つてしまつたことを黙つてくれませんか？」

「どうして？」

「私たちが知つたことを、教授は快く思わないはずです。特に、私には知られたくないはずです」

そう言つと、イーディスは納得したようにならずいた。

「ああ、そうかもしれないわね。いいわ、言わないでおくれわね」

「ありがとうございます」

礼を言つたが、自分でも心がこもらなかつたのはわかる。イーディスがそれに気づいたかはわからない。けれど彼女は嫣然とほほえんで立ち上がる。

「時間をとらせてしまつてごめんなさいね。お話を聞いてくださつて嬉しかつたわ。わたくしはこれからアレックスに会うけれど、彼を責めなくて済みそうよ。それじゃあ、ごきげんよう」

イーディスはそう言つと、優雅に身をひるがえして出でいった。

マリーはほつとしながら、同時に胸にじくじくした痛みが残つたことを感じた。

「……嫌な女だな、マリー、大丈夫か？」

嫌悪を隠しもせずにクリスが問う。

「平気よ。でも、教授が氣の毒といえば氣の毒かな」

「そうだね、と言つても僕たちにはやりようがないし、気にしても意味ないよ。さて、と、掃除も終わつたことだし、僕は一日自分の

仕事に戻るよ。夕方にはちゃんと迎えに来るから」「クリスは肩をすくめて言った。こうこうとき、彼のせいぜいした

態度は救いになる。

「うん、いろいろめんね。夕食はおいるから

「お、やつた！ ジャあ僕は行くけど、絶対にひとりで行くなよ？

あいつのねぐらがある場所はめちゃくちゃ治安が悪いんだから」

「わかってる

マリーが笑うと、クリスはじばりく疑わしげにしていたものの、やがて諦めて出ていった。

ひとり研究室に残されたマリーは、自分の頬を叩いた。

「さあ、ほんやりしないの！ やるわよ

今はどんなに痛くても傷ついても、立ち止まっている訳にはいかないのだ。後で、思う存分泣けばいい。その後で、再び立ち上がるがどうかは疑問だつたが、今は、忙しくしていることで気がまぎれる。それだけが、マリーにとつての救いだったのだ。

他のことは、集中するとともに頭から完全に追い出す。すると、心にかかっていた霞も靄もきれいに晴れて、頭がクリアになる。それから夜までのあいだ、マリーは集中を切り替えることもなく工程表を書き、材料を集めて過ごした。

おかげで、イーデイスの言葉は思い出さないられたのだった。

ためこんだ思いを吐きだしたい。

怒鳴り散らして、なんでこんな思いをさせるのか問い合わせ、謝るまで許してなどやらない。そう思うのでなければ、気がおかしくなりそうだ。

マリーはそう思ひながらも、唇を固く引き結んで、衝動に耐えていた。

「今日もいみな、あいつウソついたのかな？」

「それは、否定できませんね……悪魔ですから」

距離を置いた場所で、クリスとジュディが言った。あれから、一週間がたとうとしている。なのに、ハウエルズは全く姿を見せなくなってしまった。

研究の方は、気味が悪いくらい順調だ。クリスも少しは手伝ってくれるし、朝や夕方にはジュディも一緒にいてくれる。リサはあれから口をきいてくれなくなってしまった。

時刻は夜だ。手もとのランプだけが唯一の光源である。やわらかなオレンジ色の光が、暗い廃墟を少しだけ温かみのある場所へと変えてくれているが、マリーの心の中は嵐が吹き荒れていた。

「仕方ない、今日は帰ろう」

今日も、の間違いだらうとマリーは言いたくなつたが、クリスに八つ当たりしても何の意味もない。クリスは何も悪くないのだから。苛立たしげにため息をついて、マリーはうなずいた。

「そうね」

痛みを押し殺して、外に出ようとしたマリーは、ふと前方に影が揺らいだのを感じて、顔をあげた。そして、大きく目を見開いて、口を開けた。

「……あ

ハウエルズが、いた。

「マリーは少し後ずさつたあと、言いたいことが多すぎてのびがつまってしまう。

「マリー……？」

彼は、ひどく驚いた顔をしてマリーを見やる。その目が、今にも泣きだしそうに見えた。ハウエルズは手を伸ばして、まるですがりつくようटマリーにもたれかかり、強く抱きしめてきた。

彼の唇から、震えた吐息があふれて、耳に、首筋にかかる。

心の中を、どうしようもない安堵が満たす。マリーは震える声で訊ねた。

「無事で良かった……今まで、どこにいたのよ」

背中をさすりながら、ランプを手近なテーブルに置き、改めて自分に抱きついている大きな体を見ると、マリーは異変に気づいた。アレックスに殴られたはずの傷も、魔法陣で傷ついたやけどのあとのような傷もない。

こんな短期間で治るような傷ではなかつたはずなのに。驚きに目を見開いていると、ハウエルズの唇から、苦しげな声が低く響いた。

「……お願いだ、マリー、俺を……俺を殺してくれ」

心臓が、大きくはねた。

「な、に……言つてるのよ」

「人を、食らってきた」

マリーは殴られたような衝撃を感じた。後ろのふたりも、息を飲んだ音が聞こえた。ひどい耳鳴りがしている気がする。

どうりで、傷が治つていたはずだ。マリーは両腕で自分より大きな体を力いっぱい抱きしめた。

この気持ちが伝わればいい、と思いながら。

「そんなこと言わないでよ……今、あなたのため出来ることをやつてゐるの。人と悪魔と、ふたつの存在に分けられないか調べてゐるの、だから、結果が出るまでは絶対に自分から死ぬようなことはしないで。お願ひよ。あなたに消えられるなんて、私には耐えられ

ない

マリーは懇願するよつて言つ。彼の苦しみを考えたら、マリーもつらい。けれど、彼が消えてしまつほつがもつと嫌だつた。

今の彼は、人が人を食らわなければ生きていけない状況になつてしまつているのだ。

早く、早く解放してあげなければ……彼の心が壊れてしまう。せめて、研究している時間以外と一緒に過ごせればいいのだが。ここに住むことは、マリーには出来そうもない。

「ねえ、クリスにジユディ、どこかあまり治安が悪くなくてすぐ借りられる部屋を知らない?」

マリーは、すがるような気持ちでそう訊ねた。

「部屋ですか……そうですねえ、あ、そうだ! でしたら私の家に来て下さいよ。結構広いし、開いてる部屋もたくさんあるので」

「……いいの?」

「はい! ハウエルズ様をかくまうんでしょう?」

明るく答えてくれたジユディに、マリーは思わず涙ぐんでしまつた。

「ありがとう

「いいえ、気にしないでください。そもそも、私が勝手にマリーさんの研究物を拝借しちゃったのがいけないんですから」

ジユディはそう言つたが、マリーはそれでも感謝の言葉を繰り返した。

それからマリーは、クリスに手伝つてもらいながらハウエルズを廃墟から引っ張り出し、ジユディの家へと向かつた。

ジユディの家は内科医をしている。比較的裕福な中流の家だ。貴族を多く患者に持つてゐるらしく、自宅はとても大きい。彼女の言った通り、使われていない部屋がたくさんあつた。四人は裏口から

こつそり入り、一曰ハウエルズを部屋に落ち着かせてから、改めて訪問という形をとつた。

マリーは特に歓迎された。

なにしろ、自分ではあまり氣にしていなかつたが、マリーは貴族令嬢なのである。

相談事があるので滞在していくと告げたら、喜んで了承してくれた。

軽く夜食も頂くことができ、マリーは本当に感謝しか出来ない。その日だけは夜も遅かつたので、クリスも一緒に泊まつていいくことになった。

マリーはあえて、ハウエルズと同じ部屋で眠ることにした。寝台に横たわつたまま、呼吸音しかさせない彼を見て、心が痛む。ジユディに借りた夜着姿で、隣の寝台へ歩み寄ると、顔をのぞきこむ。

容姿の変化はさらには顕著になつてきている。

顔は、優しげなものから、どちらかといふと鋭い印象に。髪の毛も、色が黒褐色に変じている。声と目が違うのは最初からだつたが、マリーはこちらの方が確かにハウエルズらしい、と思つた。

マリーは、精神的に参つてゐる彼を見て、自分も同じ部屋で休むから、と告げた。すると、ハウエルズは困惑したような顔になつた。「部屋は……別々の方がいい。俺は、俺がどうなるかわからないんだ。気づかないでマリーを襲つてしまふかもしない」

「……別に、かまわないわよ。それより、今のあなたからは目を離せないもの」

言いながら、ハウエルズの横たわる寝台に腰を下ろす。そつ、と手を伸ばして、目にかかつた髪をかきわけ、目を見る。

（私は最初から……この目に魅了されていたのかもしれない。だから、悪魔としての彼に支配されなくてすんだのかもね）

そう思つてほほえむと、ハウエルズが顔をゆがめた。

「何で、側にいてくれるんだ？ あんなに魂食われるのを嫌がつて

たのに」

「そうね、なんなのかな。自分でもほっきりとはわからないの、ただ側にいたいから」

静かに言つて、マリーは笑う。

「こんなに静かで落ち着いてるあなたはらしくないわよ。初めてのキスを奪つておいて、いまさら私から離れたいだなんて、許さないから」

「許さなくともいい。むしろ、許してくれないほうがいいんだ」

「……何があったの？ 教えて、お願ひよ」

問いかながら、マリーはハウエルズの手をとつて、その甲を頬に押しつける。ハウエルズは、痛みをこらえるような顔をして、ため息をつくと、言つた。

「俺は、人殺しをしたんだ……俺を、売り飛ばそうとして、廃墟に押し入ってきたやつらがいた。俺は、そいつらをそそのかして悪事に手を染めさせ、悦楽の底まで導いて、背徳行為をすすめ、決定的な間違いを犯させて、警察に捕まつて絶望していたところを食つたんだ……、なあ、おぞましいだろ？」

ハウエルズの顔が自虐的な笑みに歪む。

「そうね。でもね、それしたのはあなたじゃないの。あなたと魂を同じくしている悪魔がそうさせたのよ。だからね、私は分離させようとしているの」

「そんなの、無理さ」

「ええ、わかってる。でも、やるだけはやらせて。それでもだめなら、一緒に死にましょう」

そう言つてやると、ハウエルズの顔が驚愕と怒りをないまぜにしたようなものになる。

「本気で言つてるのか？」

「本気よ」

「あの教授とはどうなった……俺は、邪魔しないようにしていたのに」

彼が苦痛から吐きだした言葉に、マリーは微かに口を開いて、震えた。やはり、ハウエルズはそんなことを考えて行動していたのだ。彼の気持ち思うと、恐ろしく胸が痛む。

「もう、終わったのよ。今の私には、あなたしかいないの……だから、私はあなたを死なせたくないし、死ぬなら一緒に。ねえ、どう言えばあなたは私から逃げないと言ってくれるの？」

つぶやくように言つと、なぜか勝手に涙が頬を伝つた。

ハウエルズは、つらそうに顔を強張らせたまま、マリーがつかんでいた手を動かした。マリーは手を放して、彼の好きにさせる。その手はマリーの頬にふると、ゆっくりとさするように上下に動く。その撫で方が優しくて、どうしようもない気持がこみあげた。

「どうして……俺はこんな形で生まれたんだろうな。ちゃんとしたら人間だった、素直に喜べたのに」

「喜んでいいのよ。受け入れてくれれば私は嬉しい……お願いだから、黙つて消えたりしないで」

「わかったよ、それが望みなら俺はそうする」

ようやく、彼はそう言つてくれた。マリーはほほえんで、体をかがめて自分から口づけた。初めて、自分から相手を求めて動いたのだ。

この身体は自分が作ったものだけれど、今は違う。マリーが心から願つた、自分ひとりだけを見てくれる恋人になつたのだ。触れると温かくて、ちゃんと存在している。

ハウエルズの手が、頬を離れて首筋を伝い、腕を伝い落ちていく。眠くなってきたのだろう。

「おやすみなさい」

マリーは囁くように言つた。ハウエルズは微かに口端をあげて笑うと、目を閉じる。

明日から、また戦いだ。マリーは、

不安のこびりついた心のまま、ロウソクの火を静かに吹き消した。

不安だった。ハウエルズがちゃんと、言つたとおりに側にいてくれるだろ？か、勝手に消えたりしないだろ？か。重い気持ちを抱えながら、マリーは研究室に足を踏み入れる。

そうして、毎日毎日、必死に観察と変化を書きとめた。いくつものフラスコを同時に並べて、その中をたゆたう水分に目を凝らす。成果の出ないまま一日を終え、ジユディの家へこっそり向かい、ハウエルズがちゃんとこころに心から安堵する。それが一週間繰り返された。

その翌日に、変化は起こつた。

時刻は夕方で、久しぶりに晴れた日だつた。

外には雪が降り積もり、暖炉がなければ凍えてしまいそうな、張りつめた空気のなか、外から差し込む、透明なオレンジ色の光に照らされて、フラスコの中が揺れる。

「……出来た？」

つぶやいて、よくよく見る。

小さな小さな、豆粒ほどのない大きさの人形が見えた。記録にあるより遥かに小さい。これでは、彼の小人の声など聞こえないのではないか、と思って、唇をかんで考えた。

だが、その悩みはすぐに解決された。

頭の中に、机をひついたような音がしたからだ。

『お前が、我を作ったのか？』

「……え、喋つた？」

マリーは驚いて、思わず訊ねていた。すると、豆粒ほどの「それは、馬鹿にしたような笑い声をあげた。体はものすごく小さいのだが、マリーには耳の側でわめかれているくらいの音量があるため、非常に耳ざわりだ。

顔をしかめると「それ」はびいかあざけるような口調で言つ。

表情の確認が出来ないので、声で判断するしかないのがはがゆい。
『何だ、我に用がないのか？』 であれば、早々に滅びる感じようか
？』

「ま、待つて！ お願ひよ、知りたいことがあるの」

『であれば、訊くがいい。ただし、答えられることと答えられぬことはあるし、我が与えるのはあくまでも知識のみであり、奇跡ではない。そこを履きちがえるな』

小さな全知……それが彼の小人の別名だ。

マリーは、激しい動悸を感じて、深呼吸する。早く訊かなければ、と思うのに、体は言つことをきいてくれない。必死の思いで、現状を説明してから、問う。

「それで、そうなつてしまつた魂を分離することは出来るの？」

『結論から言うならば、どちらも生かすという条件がある限り不可能だ』

小人の言葉に、マリーは落胆して肩を落とす。

『そもそも、魂というのは三層構造になつてゐるのだ。すべてが存在してはじめて、それは魂としての意味を成す。最も表面にあるのが、肉体と魂を結び付ける表層。その後ろにあるのが、肉体を動かし現世の記憶や自我を有する中層。さらに奥にあるのが、その魂自体が発生したときの原初の物質。すべての肉体の記憶や経験を有する、存在の核となる深層。すべての魂を持つ存在が同じものを持っている。そして、ひとつの肉体にはひとつの中、これが絶対原則だ』

小人は淡々と語る。それは、マリーも薄々考えていたことだった。

「では、今のハウエルズの状態はどういうものなの？」

『おそらく、その悪魔が食らつた魂の核がひとつ、消えずに残つてしまつっていたのだ。悪魔という存在は、肉体を持つていたとしてもそれはかりそめであり、魂そのものの存在だ。その核は、魂にこびりついているだけであつたところを、お前が肉体を与えたことで育つてしまつたのだろう。お前の言う人間の心を持つた存在、その魂は核のみであり、表層と中層が存在していない。なのに核はふたつ

ある。しかし、魂は三層構造でなければ安定しない。つまり、どちらかの核しか生かせないのだ』

「何か、方法はないの？」

「すぐれるような思いで、訊ねる。小人はどこがあざけりを含んだ調子で笑う。

『相変わらず人間は愚かなり。危険をおかし、自身が犠牲を負うことでしか望むものは手に入らないということをわかっていない』

マリーは、その言葉から、ふいに希望の匂いを感じ取つた。

「それはつまり、私が何か犠牲を払えば出来るということ？」

『そうだ。だがその行為はお前を一生縛り、自身で伴侶や死を選ぶ自由を失くす……』

「教えて、教えて下さい！」

マリーはフランスコをつかんで叫ぶ。中の液体が、とぷりと揺れた。
『おい、丁寧に扱え。訊き出す前に我が消えるぞ……ああ、変わらぬこの夢さ。ようやく外の世界を見られたと思えばもう終える。ものを知っているがゆえに、お前たちより儚いのが悔しい』
ぼやくようにつぶやいた小人は、言葉をつづけた。

『お前とその者が魂を共有すれば良いのだ。その代わり、お前は体をふたつ持つこととなり、相手が死ねばお前も同時に死に、相手と距離が離れすぎても死ぬ。場合によつては喜ばしいことだが、場合によつては恐ろしい拷問にもなりうる状態だ』

「私にとつては、何の問題もないことです。むしろ、願つたり叶つたりだわ」

『そうか……それでは、魂縛の儀式を行い、その後に魂離の儀式を行え。それぞれの儀式を行う図式は靈王術書の六百八頁に載つてゐるだろう』

小人の言葉にマリーは感極まり、涙を浮かべた。

あつた。方法があつた。ハウエルズを生かす方法が。

それだけで、もうなにも言つことはなかつた。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ 私が、なにかあなたに出

来ることはありますか？」

『そうだな、出来る限り長くここに置いて欲しい。私は知りたい、全て知りたい、世界をながめ、人をながめ、物質をながめていたい……我的寿命は半年ほどだが、扱い方によってはすぐに消えてしまう』

小人の並べた言葉に、マリーは考えた。

それはおそらく、この研究室に置いておけば叶うことだろう。けれど、誰に託せばいい？ クリスは、あまり好まないような気がする。リサは、まだ怒っているから、話も出来ない。ジュディでは門外漢だ。だとすれば、クリスしかいない。

「わかりました。出来る限り半年あなたが世界をながめられるように配慮します」

『そうか。では、私は少し眠る……』

そう小人が告げると、頭の中からひっかいたような音が去る。

マリーは、すぐにフラスコの前に「ホムンクルス鍊成に成功。生存中」と書いた紙を置いた。誰かが中身を捨ててしまつたら困るからだ。

それから後片付けをはじめた。早くしなければ夜になる。

明日。すべては明日だ。そう決めた瞬間、ふとした思考の隙間をぬつて、不安がそつと忍びこむ。

もしも、万が一、小人の言ったことがうそだつたら？

マリーは首を左右に振つた。今は、小人の言葉を信じて進むしかない。

結果は、やつてみればわかることだ。明日図書館に行こう。その前に、ジュディに訊ねてみなくては。「靈王術書」とはいかなる書物なのか、マリーには全くわからなかつたからだ。

とにかく、ここを綺麗に片づけて、ハウエルズに会いに戻る。そして、彼に説明をする。もしかしたら、彼も何か知つてているかもしない。

マリーは、数日前から持ち出しあげた、数少ない自分の私物を

まとめ、床を掃き清める。濡れた布で台を拭き、ホムンクルスの宿つたプラスコ以外の器具を洗う。少しづつ、日が傾き、室内が暗くなつた頃、マリーはそっと研究室を出た。

ドアのプレートにはめこまれた「マルガレーテ・ヘイスティングス個人研究室」の紙を抜き取り、てのひらの中でくしゃくしゃに丸める。

それからもう一度室内を見渡してから、マリーはきびすを返した。

人生で最大の試み 3

やるべきことはあとひとつだけだ。

けじめをつけること。そこをきちんとしなければ、マリーは納得して次へ進めない。服のポケットに入れた紙の存在を意識して、重い足を動かす。まだ、彼が残っていることはわかつていた。

そこまでの道のりが遠い。けれども、マリーは歩を進め、やがて辿りつく。

教授の部屋の前に。

息を吸い込み、ノックする。

「はい」

「教授、お話があるので少しよろしいでしょうか？」マリー・ヘイスティングスです」

廊下に声が響く。答えはすぐに返つてこなかつた。間の悪い静けさが場を満たす。

「どうぞ」

控えめだが、固い声が返つてきた。マリーは扉を開けて、執務机につき、なにか書きものをしているアレックスを見た。彼は顔を上げずに、感情のこもらない声で言つた。

「要件は何でしょう？ 忙しいので、手短にお願いします」

「……これを、受理していただきたいと思つてきました」

マリーはポケットから封筒を取り出し、彼の前に置く。そこには「辞表」と書かれていた。さすがに驚いたのか、アレックスが顔をあげる。マリーは真つ直ぐにその目を見て、頭を下げた。

「色々とご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ありませんでした。一身上の都合で恐縮なのですが、辞めさせて頂きたいと思います」

きつぱりと言つと、アレックスはそれを手に取ることもせず言つ。

「これを受け取る訳にはいきません」

「なぜですか？」

「あなたは優秀な研究員です。確かに、私との間には色々なことがありましたが、それと仕事内容に対する評価は関係ありません。この研究所には、あなたがいた方が良い」

「べもなくそう告げると、ふたたび書きものに戻る。

それでも、マリーは引くわけにはいかなかつた。

「では、学院長か副学院長のところへ行きます」

そう言つと、アレックスは顔をあげて、迷惑そうに眉間にしわを寄せた。マリーは、その視線を受け止めて、静かに心境を語る。「これは、私にとつてのけじめなんです。鍊金術にたずさわることや、研究自体から離れることはないと思うのですが、他のひとや、教授を巻き込むようなことを独断でしてしまったのは、やはり私の責任です。ですから一度、責任をとらなければならないと考えました。身勝手なことを言つて申し訳ありません……ですが、たとえそれが受理されなくとも、私はここを一度去るつもりです」

アレックスは、つらそうつな顔をした。

「なら、これは私が預かつておきましょ」

「……わかりました。教授、今までいろいろとありがとじやございました。私は、あなたに会えて良かった、いつかの舞踏会では、本当に嬉しくて仕方なかつたです。あの時ハロルドからかばつてくれたことはずっと忘れません。本当に、ありがとうございました」

一息に言葉を並べて、マリーは彼に背を向けた。そうしないと、また泣いてしまいそうだったから。それから急いで部屋から出ようとすると、声がかけられる。

「ま、待つて下さい！」

マリーは立ち止まつた。だが、振り向けない。

「これで、何もかも終わりにするということですか？」

「……そうです」

マリーが答えると、椅子から立ち上がる気配があつた。その場から動かすにいると、後ろから肩をつかまれ、振り向かされる。

「私は、確かにあなたに暴言を吐きました、ですがそれは……」

「わかつてぃます」

アレックスの言葉をさふぎるよつ、マリーは言つ。

「心配してくれた教授を、私は裏切ったんですね。だから、あなたの思いを受ける資格はない……それに、彼は私が生み出したも同然です。だから、彼の思いも存在も、私が受け止めるべきだと決めたんです。それが理由です」

「納得出来ません」

言つて、アレックスはマリーを抱きしめた。涙がにじむ。この腕の強さも、胸の温かさも、優しい声も全てが好きだった。

「納得……して頂けなくとも、私は決めたんです」

「まだ、婚約は破棄していません」

「教授なら、またいい恋が出来ますよ……」

小さく言つて、腕の力がゆるんだ好きに胸を押す。腕が放れて、呆然としたアレックスの顔が見えた。マリーは、せめてもの思いで、うそをつくことにした。

「私なんかに、いつまでも捕らわれて欲しくないから、言つます」「何を……」

「教授なんて大嫌いです！ 全然タイプじゃないです。身分がいいから付き合つてみただけですよ。ただ肉体関係になるにはいいかなと思ったし、ここで出世もしたかったですしね。なのに真面目すぎだし、その上、顔が綺麗すぎて一緒にいたらこっちが引き立て役になっちゃうし。しかもこれだけ一緒にいても何もしないし、教授つて女に興味ないんじゃないですか？ という訳で、さようなりー」

わざと大きな声でマリーは言つた。

ひとつも本心ではない。それでも、彼の心に突き刺さればいいと思つた。マリーのことなど、嫌な女だったと思つて忘れてくれればいい。

マリーは、アレックスが驚いているのつけで走り出した。

必死で走つて、大学院の外まで来ると大きく息をする。しばらくは、喋ることも出来ないほど呼吸が苦しかつたが、しばらくして収

まつてくると、マリーは振り返った。

これでいい。

いひするのが、今マリーに出来る全てだ。

つ、と頬を涙が一筋伝づ。

初恋だった。

ハロルドとうっかり婚約してしまったせいで、恋する前に傷ついたマリーは恋らじい恋など出来なくなっていた。けれど、彼の優しさに恋をしたのだ。そして、傷つけてしまった。マリーはせめて、彼が自分などより遙かに素晴らしい女性を見つけてくれることを祈りながら、帰路へとついた。

人生で最大の試み 4（前書き）

R1-5（※分）が出てきますのでご注意ください。

いつまでもジュディーの家に厄介になつてゐる訳にはいかない、といふ理由で、マリーはパティントン市内に貸家を見つけて借りていた。ジュディーは気になくても良いと言つてくれたものの、マリーはやはり気が咎めていたのである。

運が良いことに、探し出してほどなく、比較的治安の良い場所で家賃も思つていていたより良心的な場所を見つけることができた。

そこに戻ると、室内から焦げた匂いがする。マリーは苦笑しながら、鍵を取り出して開けると中に入った。室内は狭く簡素なものだ。作りつけの家具も少ないが、生活出来れば十分だ。台所は暖炉と兼用になつていて。そこに行くと、ハウエルズが鍋をかきませて渋い顔をしていた。

「また焦がしたの？」

「料理つて難しいんだな。肉を焼くくらいならなんとか出来たけどさ」

渋面で答えると、テーブルを見る。

食卓の上には、焼いた肉や豆と切つたパンが載り、灯心草ロウソクの明かりに照らされて、美味しい香りを放つてゐる。

マリーは、むしろシチューを焦がす方が難しいのにと思ひながら笑つた。彼はまだ鍋とにらめっこをしている。

それを横目に、上着を脱いで荷物を置くと、近づいて背中に抱きつぐ。早く言いたくてたまらない思いをこらえながら、ゆっくりと言つた。

「聞いて。もしかしたら、一緒に生きられるかもしねれないの」

マリーの言葉に、ハウエルズの手が止まつた。一旦はなれて向き合つと、彼の瞳が不安と期待に揺らいでいるのがわかる。マリーは今日あつたことを説明した。さらに、ハウエルズに書物の名前を聞くと、彼は知つていると答えた。マリーは思わず彼を凝視する。

「その本は、あらゆる魂を弄んだ罪で悪魔に墮天させられたやつが人間に教えた秘術を記したとされる本だ。あまり有名ではないし、よほどの好事家でもなれば出でこない題名だ。その小人とやらの言っていること、信ぴょう性がありそうだな」

「私は、信じることに決めたわ」

真っ直ぐに目を見て言うと、ハウエルズは戸惑つたように笑った。

「だけど、それだとマリーは一生、俺に縛られることになるぞ……いいのか？」

「もちろんよ。例えうんざりすることがあつたとしても、今日の気持ちをもう一度思い返せばいいだけよ、違う？」

きつぱりと言ふと、ハウエルズは嬉しそうに、けれど意外そうな顔をした。

「……何というか、少し前まで迷つて泣いて、俺とあの教授に振り回されていたマリーと同一人物には見えないな。こう、強さを手に入れたつて感じがするよ」

ハウエルズの指摘に、マリーは苦笑した。

確かに、その通りだ。あの時は進んでも進んでも、道が見えなかつた。けれど、今は違う。はつきりと進むべき道が見えていて、やるべきことも、気持ちも定まっている。

だからきっと、強く見えるのだろう。

今ならわかる。マリーは、ふたりともを心から愛していた。

ひとは、誰かひとりだけしか愛せない訳ではないのだ。

けれど、どちらかを選ぶことが出来ずにいた。怠慢だったのだ。だからこそ、アレックスを傷つけ、ハウエルズに身を引かせるという残酷なことをさせてしまった。

それは、取り返しのつるものではないけれど、もう決めたのだ。だから、迷わない。

「そうね、多分気持ちがはつきりしたからだと思つ。私はあなたが好き、だから側にいたい。他にはなにもない。あなたのさつきの言葉だけど、そのまま返すわ。あなたは一生私に縛り付けられること

になるけど、それでもいいの？」

小首をかしげて問うと、ようやくハウエルズの顔から強張りがとれた。

「望むところや」

つぶやいて、マリーの頬に触れる。ハウエルズはそのままかがみこんで、唇を重ねた。

ここに来て以来、何度も繰り返された口づけ。

軽いものから、全てを奪い尽くそうとするようなものまで、さまざまなキスをした。

そのまま、最後まで行ってしまったようになったこともある。けれど、そろはならなかつた。

マリーは男を知らない。だからだらうか、彼はキスしかしない。体に触れる手が、欲しいと訴えているように思えても、決して行為の要求をすることもない。

マリーは唇がはなれた隙に言つてみた。

「ねえ、最後までいってもいいのよ」

ハウエルズが動きを止めた。驚愕に瞳孔が開き、頬に赤みがさしている。その反応に、いたずら心が刺激され、動きをとめている彼の耳にふつ、と息を吹きかける。

「……！」

驚いたハウエルズは体を思いきり離した。

「ごめん、でも、今言ったことはうそじゃないから」

マリーはほほえんで、焦げ付いたシチュー鍋を暖炉からおろした。黒い部分を取り除けば食べることが出来そうだ。さて、食事にしようかと鍋を覗き込んでいる、ハウエルズが近寄ってきた。顔を上げると、真剣な顔をしている。

「どうしたの？」

「本当に、いいのか？」

マリーは一瞬呼吸が止まりそうになつた。

「うん、私の覚悟は決まっているわ」

そう言つと、ハウエルズは困ったような顔をした後で、そつと手を伸ばしてきた。マリーは、せっかく作ってくれた食事が冷めてしまうなと思いながらも、何も言わずにおいた。

大きな手が、マリーを抱えあげて寝室へと運んでいく。心臓の音がうるさい。やがて寝台に横たえられると、綺麗な顔が視界を埋め尽くした。最初の造形とは異なる、鋭くて少し悪賢いような、それでも愛おしい顔が。

ハウエルズは顔をマリーの首もとに埋め、静かな声で囁く。

「ずっと、こうしたかった」

嬉しそうな、少しかすれた声だ。

お腹に、きゅんとした痛みが走る。

言葉ではなく、彼に抱きつくことでマリーは応えた。

「温かい。私ね、ずっとあなたの身体が冷たいのが寂しかったの、つないだこの手が温かかったらいいのに、って何度も考えた

「なら、叶つたわけだ」

ハウエルズはそう言いながら、マリーの首にキスをしようとして動きを止めた。その目がある一点を凝視している。マリーは彼の見ているものが何なのか気づいて、笑った。

「これ……まだ持つてたのか？」

「うん。だって、あなたが初めて私に買つてくれたものでしょ？」マリーは、ハウエルズが首にかけたウォーター・サファイアのネックレスに触れるのを感じて、そう言つた。彼は名状しがたい顔で、嬉しそうに何度もそれに触れる。

小さな、安物のアンティーク・ジュエリー。けれど、マリーひとつでは本物のサファイアくらいに価値のあるものだ。

「とつぶに捨てたと思つてた」

「そうね。そうじようかと思つたこともあるけど、どうしても捨てられなかつた。あの時、手をつないでくれたのが嬉しかつたし、本心では、もうあなたのこと好きになっちゃつてたのね」

アミーリアの話を聞かされたあと、彼と一緒に市場を歩いた。ほ

んの短い時間だつたけれど、そのときの胸が温かくなる感覚は今まで
もずっと残つてゐる。

「だとしたら、時間を無駄にしたよな」

「そうね、私のせい……だから、もう無駄にするのはやめましょう」
手を伸ばしてハウエルズの背中に触れる。彼は笑つた。
「そうだな」

その晩、食卓の料理がふたりのお腹に収まる事ではなく、それは
そつくり朝食になつたのだった。

「では、はじめますよ」
ジュディの声がして、マリーは冷たい石の床に横たわったままうなずいた。

「準備はいいわ、ジュディ……お願いね」

「はい！ 全力をつくします」

ジュディはまつ黒なローブのフードの中から、妖しい微笑を浮かべて請け合つた。

なんだか、いつものジュディとは違うひとに見える。恐ろしい迫力が今の彼女はある。そのせいか、マリーは成功するような気分になつてきていた。心から祈る。

身勝手なのはわかっているけれど、成功して欲しい。

「うわ、何だろう。見てるだけなのにすっごいどきどきする。くれぐれも入れ替わっただのなんだの、妙なことにはしないでよ」

見学状態のクリスが、やはり緊張した面持ちで言う。

「失礼な！ 陣はマリーさんの作った小人さんに聞いた通りにきちんと書きました。ハウエルズ様の召喚に成功した私の構成が間違つものですか！」

ジュディが憤慨しつつ叫ぶと、マリーは彼女の気持ちをなだめたくて言う。

「私は信用してるから

「……はい、絶対に信頼に応えて見せます」

頼もしい返事が返つてくる。マリーはほつとして、隣に横たわるハウエルズを見やる。すると、穏やかなほほえみを浮かべて、彼はマリーを見ていた。こちらが恥ずかしくなるくらい、透明な笑みだ。

四人が集まっているのは、悪魔学科の実験室だ。実験室、といつても、マリーたちにおなじみの器具がある風景ではなく、石壁に囲まれた小さな部屋で、窓はなく、天井に穴があいているだけだ。部

屋は暗く、ルーペやランプがなければ何も見えない。

壁際には、かつて悪魔を召喚して操った経歴のある男性の頭蓋骨や、水晶玉、逆さまにした十字架、薬草、逆五芒星を書いた紙は壁に貼りつけられ、室内全体に、甘ったるい香が焼きしめられている。

以前であれば、気味が悪いと言つて決して近づかなかつた場所だ。室内に暖炉はないので、非常に寒い。

まだまだ、春は遠いのだ。けれど、これが成功すれば、マリーにとつてはそれこそが春だ。

あの晩の翌日、マリーは早速ジユディとクリスに説明してどうすれば儀式が行えるかを相談した。すると、ほとんど使われていらない、悪魔召喚に用いる実験室が開いているから、そこでやるうとすぐには話がまとまつた。また、ジユディは「靈王術書」を熟読したことがあり、たつた三日で儀式用の準備をひとりで終えてしまった。

あまりに潤滑にことが進んでしまい、マリーは拍子抜けしていた。

「では、はじめます」

ジユディが開始を告げる。マリーは口を開じた。例えどんな結果になつても、それを受け入れる。覚悟は、もつ決まつていた。

やがて、ジユディが聞いたことのない言語で何かを唱え始める。それと同時に、マリーの全身に負荷がかかつた。意識が飛びかけ、妙な浮遊感にさいなまれる。吐き気がし、頭が痛むが、マリーはうめき声ひとつあげなかつた。うつすらと口を開けて、隣のハウエルズを見ると、彼の顔も苦悶に歪んでいる。

しばりへりへりえていると、何かがするり、と意識に入り込んできただような感覚があり、そこでマリーの意識は途切れた。

暗闇の中に、意識がだけが浮かんでいる。そこで、マリーは光るものを見た。

美しい女性がそこにいた。古い衣装をまとい、長い黒髪に大きな褐色の瞳。体つきはふつくりとしていて、小柄だった。曲線を描く唇が蠱惑的な印象を残す氣の強そうな顔を見て、マリーはふと直感した。

「アミーリア？」

「あら、知つてたのね。初めてまして、といつてももう一度と会つて記憶しないけれど」

意志の強いはつきりとした声。マリーはほほえむアミーリアが腕に抱いている半透明の魂を見やる。

「それは」

「あの悪魔が抱いた人間への思慕。だから、完全に私の魂を消せなかつた、でも、その思いはこうして形をとつたから、私はこれで完全に消えるわ」

少し寂しそうに言つて、アミーリアは？それ？をマリーに差し出した。

「ある意味では、これは私の子……どうかよろしくね」

「は、はい」

マリーは？それ？を受け取り、大切に抱きしめると、やつと体の中に入り込んで消えた。

同時に、マリーは自分を呼ぶ声に耳を覚ました。

田の前に、ハウエルズの顔がある。見慣れた顔。けれど、決定的に違うのは瞳だった。暗く淫靡な赤い色を宿していたのに、それが消えているのだ。

「マリー、大丈夫か？」

「え、ええ。ありがとう」

背を支えて起こしてもらひながら、マリーは部屋の中にもうひとり増えたことに気づいた。驚いてそちらを見やると、見たことのない美形が香などの載つていてる台の上に腰かけて、嫣然と笑っている。その口もからは、牙がこぼれて見える。

さらりとした黒い髪。整つた、端正だが冷たい印象を受ける顔。背も高く、しなやかな体つきをしており、漆黒の羽根が生えている。まとう衣服は全て漆黒。唯一、切れ長の瞳だけが赤い光を内包して、深い輝きを放っていた。

「あれが、もともとのハウエルズ様です」

ジユディの声がした。悪魔はほほ笑みながら声を発した。

「ようやくその窮屈な檻から出ることが出来た。感謝するぜ……それと、邪魔な感情を取り払ってくれたことも礼を言ひ」

悪魔は、肉体のあるハウエルズを見て言う。

「こっちこそ、お前と離れられてせいせいでいたさ」

ハウエルズは、鼻を鳴らして行つた。向き合つ、もともとは同じ魂を持っていた者同士。田縁だけで意思を交わし合つたのか、互いに口端をあげ、微かに笑つた。

「まあいい、礼は言ったぞ。何も出来ないが……せめてお前たちが生涯悪魔に狙われることがないようにしてやう。俺が出来るのはそれだけさ。じゃあな」

低く艶めいた声で言つと、悪魔はぱさり、と羽根を羽ばたかせて消えた。

「あつ！ あゝあ、行つちやこました
ジユディがしょんぼりして言つ。

「あなたなら、また呼び出せるわよ
心からそういう思つてマリーは言つた。それから、ゆづくらと困惑い
ながらハウエルズを見る。

「本当に、人間になつたのね」

「ああ。ちゃんと血も流れ、心臓も動いてる。ありがどつ……これ
で、人を食らうことなく生きられる」

ハウエルズはそう言つと、強い力でマリーを抱きしめた。体は温
かく、きちんと存在を感じる。マリーはあまりに強く抱きしめられ
たので痛かつたが、何も言わなかつた。

しばらくそのままじつと抱きあう。

「あれだね、奇跡つてあるもんなんだね」

呆けたようにクリスが言つた。ジユディはそれを受けてうつどつ
と言つ。

「ロマンチックですよねえ、神秘的な存在と結ばれるなんて」

「いや、僕はふつうの女の子がいい」

クリスが半笑い気味に言つと、ジユディは彼を睨みつけた。

「そうですか。別にあなたに同意は求めていませんよ。まあ、あなたには理解は出来ないでしょうが、私だっていつかは悪魔を呼びだ
してその下僕にしてもらおうのが夢なんです」

「はー、下僕？ 君は頭がおかしいの？」

「失礼な、本心ですよ」

ジユディが断言すると、クリスは頭を抱えてうめき声をあげた。
それから、ジユディに言つ。

「その件についてはちよつと話しあひつか？ ビツしても理解でき
ないんだけど？」

「いいですよ！ 理解させてあげますよ」

なぜかふたりは言い争いをはじめ、部屋を出て行く。

「あ、マリーさん、後片付けは私がやつときますんで。むしろへた

に触らないほうがいい物もあるのではそのままにしておいて大丈夫です。それじゃあ、また！」

「うん、またね」

マリーは答えて手を振った。

やがて、言い争いをしながら去っていくふたりの姿が見えなくなると、マリーはつぶやいた。

「あのふたり、もしかしたらもしかするかも」

今はまだ何も芽生えていないが、マリーはちょっと期待してしまう。でも、それは未来の話だ。今は、自分を抱きしめてくる存在と言葉を交わしたい。マリーは、彼の身体がわずかに震えているのに気づいた。ハウエルズは、泣いていた。

「ハウエルズ……？」

「ごめん。ただ、さつきまで死ぬんだとばかり思っていたから」

「うん、でももうそんなこと考えなくていいのよ。どちらかが死ぬまで、一緒に」

マリーはハウエルズの背をさすりながら、優しく言ひ。それは、自分に言い聞かせる言葉でもあった。

「信じられない」

「私もよ……でも本当なのよ」

マリーは、彼にしがみつくなにして言った。少しずつ、思いがとめどなくあふれる。彼が生きている。ここにいる。それだけで胸がいっぱいになり、言葉が詰まって出てこない。お互に、ただ互いがちゃんといることを確かめあうだけの時間が流れる。

あふれた想いは、ゆっくりと全身に広がり、静かな幸せを感じた。やがて、落ち着きを取り戻したマリーは言ひ。

「これで、あなたは私とは離れられない。ねえ、後悔してる？ 私はひどい女よ、いろいろなひとを傷つけたのに、こうしていられるのが嬉しいんだから」

「そんなの、俺も同じだ」

ハウエルズはそう言ひと、体を離してキスをした。最初は軽く、

感触を確かめるよつたなキス。つづいて、息を奪つよつたなキス。マリーもそれに応えた。

お互いを確かめあうよつこ、何度も重ねあつ。

そうして、ふとした瞬間に見つめあつて、同時に笑つた。

マリーは思つた。

私は、本当に恋人をつくりてしまったのだ。あのとき結婚式で、情けない思いをぶつけるようにしてつくりた。これでもう、ひとり夜に泣くことはないのだ。

「ずっと、離さないから」

笑顔で心から語つ。

私は、幸せだ。

その後の話

十年後。

レピージュ大学院の研究室の窓が一回叩かれた。マリーは日の前の器具に向けていた視線をあげてほほえんだ。すぐに窓に近づくと、開ける。

「いいかげん普通に入つてくることを覚えられないの？」

呆れつつ言うが、どうしても笑いをこらえきれない。

開け放たれた窓からは、暖かな風が花の香りを運んでくる。穏やかな初夏の陽ざしに温められた草花が少しおれているのが見えた。

「こっちの方が早いだろ」

そう言つて、ハウエルズは持つてきた包みをかかげて明るく笑つた。

布の端から、長いサンドイッチがはみ出している。マリーは苦笑して、窓から離れる。ハウエルズは相変わらず身軽にするつと入り込んでくると、紙が散らばつたテーブルを手なれたようすで片づけた。

「別に、こつこつに届けにこなくともいいのよ？ 学食だつてあらんだし」

「いいの、一緒に食べたいんだから。それにマリーに味見してもらつて好評だったやつは売れるんだ」

楽しげに言つと、彼はお茶の準備まではじめた。

研究は一時中断だ。マリーはため息をつくと、片づけを手伝つた。室内には、食べものの良い香りが漂いはじめる。

やがて支度が整つと、昼食の時間だ。

「それで、少しは講義をするのも慣れた？」

「全然だめね、人前で話したり自分の考えを誰かに伝えるつて本当に難しいわ」

マリーは口の中のものを飲み下してからゆうつゆうつと呟いた。

あれから、マリーは別の大学院に移り、そこでハウエルズの身体を作ったときの経験を生かして、人体の一部を鍊成し、それを人体移植用に使えないかという研究をつづけている。

結果、患者の皮膚や血液から血管などを鍊成することに成功し、マリーは現在この大学院で助教授の立場になった。一方のハウエルズは、なぜか料理に興味を持ち、一から修行をしてパン屋で働いている。美形の職人さんがいるということで、そこそこ人気者になってしまつたらしく、そのパン屋は割と繁盛しているようだ。

もともと存在していなかつた人間である彼と暮らすには、いろいろと手続きが必要だつたものの、マリーは家族の助けなどを得て、でつちあげでなんとかした。

家族は最初、マリーの馬鹿さ加減をあげつらいで、考え方をよじさんざん迫つた。けれど、それでマリーの意思が変わることはなく、結局は向こうが折ってくれた。ハウエルズと会わせたときも、最初は恐々と接していたものの、彼の素直さや真っ直ぐさに次第に心を許すようになり、今ではちゃんと家族の一員として認めてくれている。

以来、マリーは研究に没頭する日々をおくつっている。そんなマリーを、ほほえましいものでも見るような目で見ながら、ハウエルズは言った。

「マリーならいつかは何かをするわ」

「そうね。でも今は無理そう、他にも大切なことができたし。そういえば、リサのところでまた子どもが生まれたそうだから、また会いに行きましょうね」

「ああ、パティントンならすぐだし、週末にでも行こうか
ハウエルズはお茶をする。

なんだかんだで、リサとは仲直りすることができた。最初にハウエルズと会わせたときは大変だったが、最終的にはわかってくれた。そこはやはり親友だな、と思う。彼女はすでに大学院をやめて、ビ

ックと結婚し、今では男の子と女の子がひとりずつ生まれて、母親にいそしんでいる。女の子はビックに似て、いたずら好きで困る」と良く手紙に書いてよこすくらいだ。

「ジュディは相変わらずみたいだし、クリスも大変ね」「そう言つと、ハウエルズは楽しそうに笑い声をあげる。

クリスはどうやら本気でジュディを好きになつてしまつたようなのだが、彼女の方は研究が命、の今まで、当分進展はなさそうだ。ちなみに、マリーのアドバイスを受けて見かけを変えたら、異性に言い寄られることが増え、うつとうしくなつたのか、結局またもとの黒ローブに戻つてしまつた。せつかくの美貌が生かされないのは残念だつたが、それがジュディなのだろう。彼女とは今でも手紙のやり取りがあり、互いの研究について話し合つのが楽しみな研究馬鹿の仲間である。

また、結局何だかんだでホムンクルスを彼に押し付けてしまつたものの、彼は彼の小人とそれなりに有益なやり取りをしたようで、あの後出世していた。たくさん面倒をかけたし、小人もたくさん話が出来たようで、マリーとしてはほつとしている。

それから、ハウエルズから聞いて、クリスが父に自分を見張るよう頼まれていたことも知つた。マリーは、ハウエルズのことを報告するために、怒られるのを覚悟しつつ父のところへ行つた。そのときに、クリスのことも頼んだのだ。もう彼を解放してあげて欲しいと。しばらくは父も譲らなかつたが、マリーの決意が固いことを知り、最終的には頼みを聞いてくれた。いま、クリスは自由の身だ。

「まあ相手が相手だしなあ」

苦笑するハウエルズ。

彼の顔からは鋭さが消え、年齢を重ねたことによる穏やかさが表面に出てきている。

その横顔を見て、マリーはリサが手紙に書いてきたことを思い出す。

教授はパデイントンから別の大学院に移り、そこで大きな功績を

残したそうだ。まだ誰とも結婚はしていないが、婚約を考えている女性がいるという。それは、心にひつかつたトゲが、あと少しでとれるかもしないという期待を抱かせる情報だった。真実のほどはわからないが、彼にも人生をともに歩んでくれる女性が現れるといい、と心から思う。けれど、彼の人生は彼のもので、良くできるのも彼しかいない。マリーには、見守ることしかできないのだ。

それに、と心の中でつぶやいて、マリーはお腹に触れる。

「ねえ、家族が増えるってどんな感じなのかしらね」

「そうだな、わからないけど、パンを買いに来る親子はたいてい幸せそうに見えるよ」

「私たちもそうなるといいね」

マリーが言うと、ハウエルズは食べる手を止めて、驚いた顔でマリーを見てくる。

それ以上は何も言わない。顔を見れば、言つ必要がないのが一目瞭然だ。どうやら、言いたいことをわかつてくれたらしい。

マリーは幸せな気分で静かにお茶を飲み、食事をつづける。

その少し後、研究所からひとり大きな歓声があがった。

たまたま廊下の前を通りつた学生たちは、驚いて目を見交わしあう。けれど声の主がわかるとすぐ、いつものように丁寧に談笑しながら、のんびりと扉の前を通り過ぎて行つた。

その後の話（後書き）

完結です。ここまで読んで下さった方、途中だけでも一部分だけでも目を通して下さった方全てに、心から感謝いたします。

構成も何もないまままだ書きたい！という気持ちとノリで書き始めたせいか、終息させられるのか不安でしたが、何とか終わらせることが出来ました。評価やお気に入りを下さった方々のおかげです。本当にありがとうございます。

一応この話のもとになつたのはギリシア神話のピグマリオンのお話。その男女逆転バージョンを書いてみたかったのですが、成功したようなしていないような。

とりあえず、三角関係って難しいとしみじみ痛感しました…（・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687m/>

ある女鍊金術師の試み

2011年8月25日03時12分発行